

国立国語研究所学術情報リポジトリ

全国方言談話データベース 日本のふるさとことば 集成：第10巻 富山・石川・福井

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-10-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 国立国語研究所, The National Institute for Japanese Language メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002250

全国方言談話データベース

日本のふるさとことば集成

第10巻 富山・石川・福井

国立国語研究所資料集 13-10

国立国語研究所
2004

国書刊行会

刊行のことば

昭和52年度から昭和60年度にかけて、「各地方言収集緊急調査」という全国規模での方言談話の収録事業が、文化庁によって実施されました。調査は、各都道府県教育委員会と連携のうえ、各地の方言研究者が全面的に協力して行われました。国立国語研究所は、文化庁の要請により、この調査の計画段階から、指導・助言などにかかわっていました。その後、時を経て、この調査によって収録された膨大な録音テープと文字化原稿は、文化庁から国立国語研究所に移管されました。

これらの資料は、方言の使用実態を解明する貴重なデータであるとともに、急速に失われつつある各地の伝統的方言を、文化財として記録・保存するという意味においても意義のあるものです。そこで、国立国語研究所では、受け継いだ資料を有効に利用するために、方言談話の大規模なデータベースを作成し、公開するという計画を開始しました。平成8～12年度には「方言録音文字化資料に関する研究」で、平成13年度からは「日本語情報資源の形成と共有のための基盤形成」の一環として、全国方言談話データベースの作成と公開に取り組んできました。また、データベース化にあたっては、平成9年度から科学研究費補助金研究成果公開促進費（データベース）の交付を受けています。従来にはあまりなかった、音声と文字化の電子化データを備えていますので、研究や教育に活用いただけれることと思います。なお、本資料集の作成については、情報資料部門第一領域の井上文子が担当しました。

「各地方言収集緊急調査」の録音・文字化にあたっては、全国の研究者の方々が献身的に御尽力くださいました。話者として、多くのみなさまから御協力を得ました。また、各都道府県教育委員会の関係者、および、有志の御助力がありました。刊行にあたって、記して深く感謝の意を表します。

平成16年12月

国立国語研究所長 甲斐 瞳朗

利用にあたって

1. 内容

この書籍（冊子、CD-ROM、CD）には、以下のものを収録しています。

	冊子	CD-ROM	CD
刊行のことば	○	○	
利用にあたって	○	○	
目次	○	○	

富山県砺波市1981

地図	○	○	
話者・担当者	○	○	
解説	○	○	
凡例	○	○	
談話	○	○	
【昔の食べ物、労働の移り変わり】			
文字化・共通語訳	○		
文字化・共通語訳 pdf+方言音声 wave (ページ単位)		○	
文字化・共通語訳検索 FileMaker		○	
文字化 text (談話全体)		○	
共通語訳 text (談話全体)		○	
方言音声 (談話全体)			○
注記	○	○	

石川県羽咋郡押水町1977

地図	○	○	
話者・担当者	○	○	
解説	○	○	
凡例	○	○	
談話	○	○	

【冬の藁仕事、元服】		
文字化・共通語訳	<input type="radio"/>	
文字化・共通語訳 pdf+方言音声 wave (ページ単位)		<input type="radio"/>
文字化・共通語訳検索 FileMaker		<input type="radio"/>
文字化 text (談話全体)		<input type="radio"/>
共通語訳 text (談話全体)		<input type="radio"/>
方言音声 (談話全体)		<input type="radio"/>
注記	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

福井県勝山市1982

地図	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	
話者・担当者	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	
解説	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	
凡例	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	
談話	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	

【土地の食べ物の話】

文字化・共通語訳	<input type="radio"/>		
文字化・共通語訳 pdf+方言音声 wave (ページ単位)		<input type="radio"/>	
文字化・共通語訳検索 FileMaker		<input type="radio"/>	
文字化 text (談話全体)		<input type="radio"/>	
共通語訳 text (談話全体)		<input type="radio"/>	
方言音声 (談話全体)			<input type="radio"/>
注記	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	

作成・公開の経緯

「各地方言収集緊急調査」について	<input type="radio"/>		
「各地方言収集緊急調査」地点一覧	<input type="radio"/>		
「各地方言収集緊急調査」地点地図	<input type="radio"/>		
各地方言収集緊急調査補助全体計画	<input type="radio"/>		
各地方言収集緊急調査費国庫補助要項	<input type="radio"/>		
各地方言収集緊急調査実施要領	<input type="radio"/>		

各地方言収集緊急調査の実施について	<input type="radio"/>		
調査実施上の留意事項について	<input type="radio"/>		
「全国方言談話データベース」について	<input type="radio"/>		
Adobe Acrobat Reader		<input type="radio"/>	

音声データ仕様：サンプリング周波数22.050kHz, 量子化ビット数16bit,
waveファイル, ステレオ

CD-ROMは、CDプレイヤーで再生しないでください。CDプレイヤーが壊れことがあります。

本データベース編集にあたっては、個人のプライバシー等に配慮しました。
談話データの中には、現在では、その使用が好ましくないとされるような表現が含まれている場合もあり得ますが、学術的・歴史的資料の保存という観点から、そのまま収録しました。この点にご配慮のうえ、お使いください。

2. 著作権

この冊子、CD-ROM、CDに収録されているデータの著作権は、国立国語研究所にあります。

3. 利用条件

利用にあたっては、以下の利用条件をすべて守ってください。

- (1) 国立国語研究所の著作権を侵害するような行為はしないでください。
- (2) この冊子、CD-ROM、CDに収録されているデータは、どのような目的においても、また、どのような媒体（紙、電子メディア、インターネットを含む）によっても、他人に再配布しないでください。
- (3) この冊子、CD-ROM、CDに収録されているデータは、非営利の教育・研究目的に限り、自由に利用できます。ただし、上記（2）は守ってください。

- (4) この冊子、CD-ROM、CDに収録されているデータを利用した成果物を公表する場合は、
「国立国語研究所が作成した『全国方言談話データベース』を利用した。」
などのように、明記してください。
あわせて、成果物を国立国語研究所にご寄贈いただければさいわいです。
- (5) 以上の利用条件に合致しない場合、あるいは、利用について不明な点がある場合は、国立国語研究所に問い合わせてください。

連絡先：〒190-8561

東京都立川市緑町3591-2

国立国語研究所 情報資料部門

「全国方言談話データベース」係

FAX：042-540-4300

4. 付記

データの電子化、CD-ROM、CDの作成については、平成9(1997)～16(2004)年度科学研究費補助金研究成果公開促進費（データベース）の交付を受けています。

国立国語研究所資料集 13-10

全国方言談話データベース
日本のふるさとことば集成
第10巻 富山・石川・福井

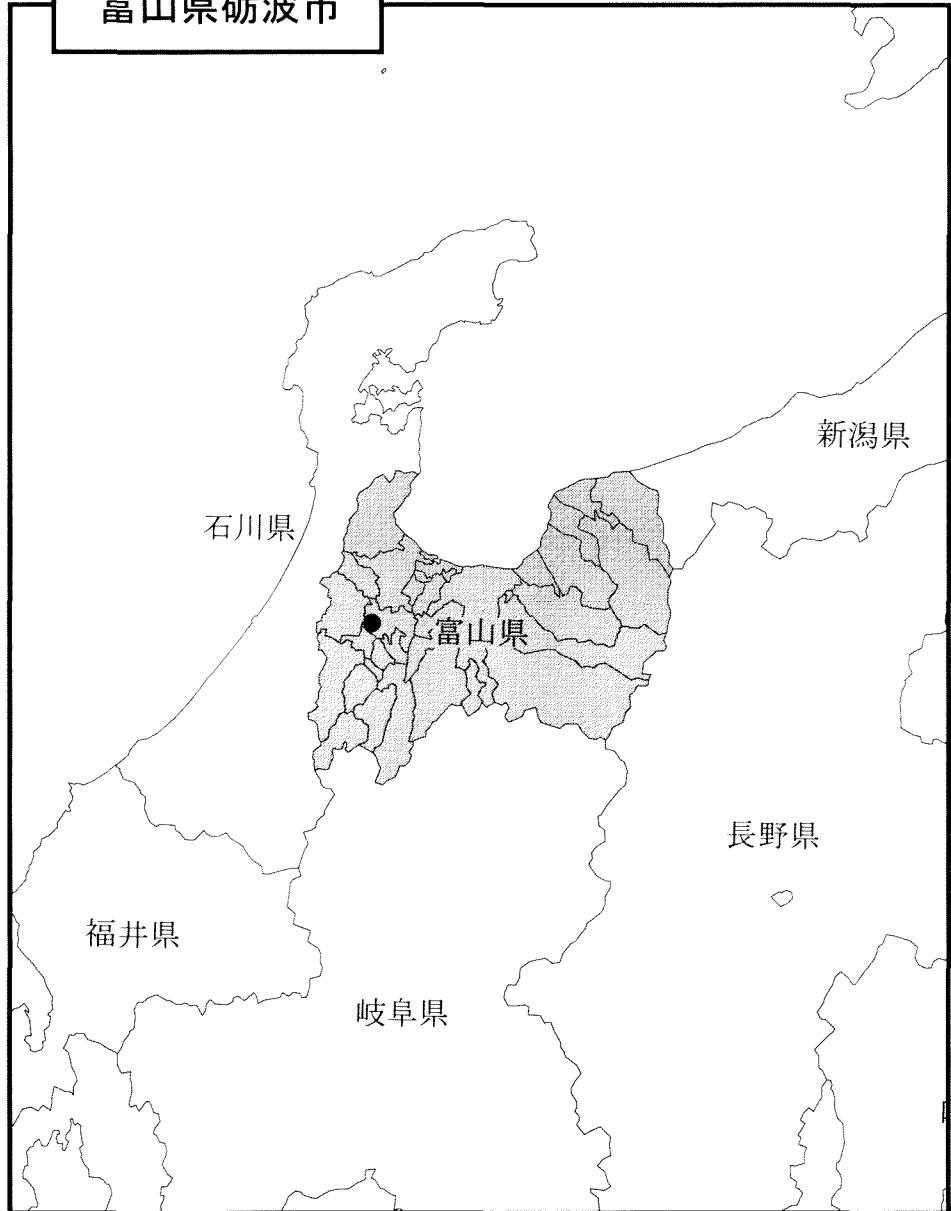
目次

刊行のことば	3
利用にあたって	5
I. 富山県砺波市1981 11	
地図	12
話者・担当者	13
解説	14
凡例	21
談話	26
【昔の食べ物、労働の移り変わり】	27
注記	86
II. 石川県羽咋郡押水町1977 91	
地図	92
話者・担当者	93
解説	94
凡例	102
談話	107
【冬の藁仕事、元服】	108
注記	159
III. 福井県勝山市1982 163	
地図	164
話者・担当者	165

解説	166
凡例	172
談話	177
【土地の食べ物の話】	178
注記	247
 作成・公開の経緯	251
「各地方言収集緊急調査」について	253
「各地方言収集緊急調査」地点一覧	257
「各地方言収集緊急調査」地点地図	262
各地方言収集緊急調査補助全体計画	263
各地方言収集緊急調査費国庫補助要項	264
各地方言収集緊急調査実施要領	265
各地方言収集緊急調査の実施について	268
調査実施上の留意事項について	270
「全国方言談話データベース」について	276

I . 富山県砺波市
1981

富山県砺波市



富山県砺波市1981話者・担当者

「各地方言収集緊急調査」

話者	定司 常治 武佐 ちよ 村中 そとえ
収録担当者	佐伯 安一 松永 玉吉
文字化担当者	佐伯 安一 松永 玉吉
共通語訳担当者	佐伯 安一 松永 玉吉
解説担当者	佐伯 安一 松永 玉吉

(敬称略 項目別50音順)

「全国方言談話データベース」

編集担当者	佐藤 亮一 江川 清 田原 広史 井上 文子
編集協力者	中林 諒子 井上 優 鳥谷 善史 熊谷 康雄

富山県砺波市1981解説

収録地点名

とやまけん となみし たかのす
富山県砺波市鷹栖

収録地点の概観

位置

砺波市は、富山県西部、砺波平野のほぼ中央に位置する。

交通

北陸本線高岡駅で城端線に乗り換えて約25分の砺波駅で下車。バスで国道359号線を西南西へ約3km、約15分で鷹栖に到着。

地勢

全くの平野であり、山地は最も近いところで西方1.5kmのところである。地味肥沃、稲作りの盛んな地であり、家々が平野に点在する散居村と呼ばれる村落形態が見られる。

行政区画

1876(明治9)年に石川県、1883(明治16)年に富山県に所属。1889(明治22)年に礪波郡鷹栖村となる。不動島村と合併して、1896(明治29)年、西礪波郡鷹栖村となった。1948(昭和23)年に東礪波郡に、1955(昭和30)年に砺波市に編入された。

戸数・人口

1981(昭和56)年10月現在、世帯数595戸、人口約2,537人。

産業

もともとは純農村であったが、中央部には少数の商家が集まっていた。また、副業として染色・漆器・榨油などの家内工業を営む農家もあった。近代に至って小中の工場も多くでき、農民の多くは工場労働者として働きに出ている。

当地は教育の盛んな地方であり、1909(明治42)年には旧制砺波中学校(現在の砺波高校)が設立された。砺波高校は1949(昭和24)年の火災の後、砺波市街地近くに移転したが、その跡地に砺波工業高校が開設され、現在に至っている。

収録地点の方言の特色

方言区画上の位置・隣接諸方言との関係

収録地点の方言は、西日本方言域にあり、北陸方言のうち、富山県西部方言の砺波方言圏に属する。富山県東部方言には東日本方言的な要素も入っているが、富山県西部方言はより西日本方言的な要素が濃い。南には五箇山方言、北には高岡・氷見方言がある。

音韻

(1) 「イ」がしばしば「エ」に近い音になる。

エカ (イカ)

エシ (石)

エドカッタワ (ひどかったよ)

オラチャメタイ モン (私たちみたいな者)

(2) 老年層においては、語によって「イ」が「ウ」になることがある。

トル (鳥)

カク (柿)

ガク (餓鬼)

(3) 動詞末の「あう」は「オ (一)」となる。

オ一 (合う、会う)

コ一 (買う)

チゴ (一) (違う)

(4) 共通語のサ行音がしばしばハ行音で発音される。

ハン (さん、様)

ホイタラ (そうしたら)

(5) 以前はズーズー弁も広まっていたが、今日ではほとんど消滅に近い。

オモスロイ (おもしろい)

アズ (味)

ウツ (うち、家)

共通語の「し」「じ」がそれぞれ「スィ [sii]」「ズィ [dзи]」となることがある。

スコスイダケ (少しだけ)

(6) 共通語の「じゅ」が「ジ」と発音されることがある。

ギジツ (技術)

ジクシタヨーナ (熟したような)

個人によっては、共通語の「せ」を「シェ」と発音する。

ミシエテ (見せて)

シェバイ (狭い)

(7) 長母音が短く発音されることがある。

ベントノ オカズ (弁当のおかず)

イッショグラエ (1升ぐらい)

(8) 語中での促音化・促音挿入がしばしば起こる。

ソツカラ (それから)

マツツリ (祭り)

(9) 動詞・助動詞の終止形語尾「る」が文中でしばしば促音化・撥音化する。

タベトツ トキ (食べているとき)

ナットンカ[°] トップ (なっているのを取って)

(10) 語頭の「うま」は「ンマ」となることがある。「もの」も「モン」となる。

「み」「に」も撥音化することがある。「みんな」も「ンナ」と発音されることが多い。

ンマ (馬)

ンマイ (うまい)

ンマレル (生まれる)

キモン (着物)

カンサマ (神様)

ゼン (銭)

(11) アクセントは系統的には近畿系だが、2拍名詞の2拍目が広母音の場合には、下がり目が1拍分後ろにずれる。

ヤマガ[°] (山が) (近畿方言 ヤマガ[°])

カワニ (川に) (近畿方言 カワニ)

動詞・形容詞のアクセントも、近畿中央と異なり、常に語末から2番目の音節の後に下がり目がある。

トブ (飛ぶ)
カワル (変わる)
ウタガウ (疑う)
アカイ (赤い)
カナシイ (悲しい)

(12) 文節末においてしばしば「うねり音調」が聞かれる。

文法

(1) 複数を表す接尾辞は「ラチ」「ラ」である。「私たち」は「オラチヤ」、「子どもたち」は「コドンダチ」「コドンドモ」となる。

アンタラチ, アンタラ (あなたたち)

ワカイ ヒトラチ (若い人たち)

組織や時間に「ラチ」「ラ」について「など」の意味を表すことがある。

Xサンノ ウチラチデモ (Xさんのうちなどでも)

ゴールドワインラチノ クラワ (ゴールドワインなどの倉庫は)

マエノ トキラチヤ (前のときなどは)

キノーラチヤ (昨日などは)

(2) 「私の」という意味を表す「ワー」という表現がある。

ワー モン (私のもの)

(3) 「すれば」が「シリヤ」となる。

(4) サ行五段活用動詞においてイ音便がさかんに起こる。

コワイタ (こわした)

ナクイタ (なくした)

(5) 形容詞の連用形の「く」が脱落する。

サムナッタ (寒くなった)

サムテ (寒くて)

オイシナイ, オイシナカッタ (おいしくない, おいしくなかった)

(6) 形容詞の連用形に「ラト」の形が見られる。

オソラト (遅く)

(7) 共通語の「いる」は「オル」、「ている」は「トル」である。

「トル」は、動作継続と結果存続を表す。

ママ タベトル (ご飯を食べている) <動作継続>

アナ アイトル (穴が開いている) <結果存続>

(8) 断定の助動詞は「ジャ」と「ヤ」が混在している。

ホンマニ ソージヤ (ほんとうにそうだ)

ソリヤ ソーザヤ (そりやそうだよ)

ソヤケデ, ソジヤケデ (そうだから)

(9) 動詞につく否定の助動詞は「ン」、その過去形は「ナンダ」である。条件形と、共通語の「なくて」にあたる形に特徴ある形が見られる。

センニヤ (しなければ)

オラニヤ, オランニヤ (いななければ)

イカンナン (行かなければ)

ナケニヤ, ナケラニヤ, ナケンニヤ (なければ)

ドーモ ナラエデ (どうにもならなくて)

ヒヤクメータ ハシライデ (100メートル走らなくて)

(10) 尊敬の助動詞に「シャル (サル)」「ハル」がある。収録地点では「シャル (サル)」の方を多く使う。

ミシエテクレッシャル (見せてくださる)

タベッサランチャ (お食べにならないよ)

ユワハッタ (言われた)

(11) 可能の形は、五段動詞も五段以外の動詞も、可能動詞の形が用いられる。

ヨメル (読める)

タベレル (食べられる)

イッテコレル (行って来られる)

(12) 意向形が命令の意味でも用いられる。また、「未然形+ (ラ) レン」の形が禁止の意味で用いられる。

イコ (行きなさい)

ナマデ タベラレンゾ ユーテ (生では食べるなよ [と] 言って)

(13) 係助詞「ワ」(は)は、「チ」で終わる語につくと融合して「チャ」となり、「ン」で終わる語につくと「ナ」となる。

アノ ヒトラチャ ソン ジブンナ ウチノ ハハオヤラチト
(あの入たちはそのころは私の母親たちと)

- (14) 準体助詞や「のだ」の「の」は「カ°」になる。「～のもの」の意味を表す表現は「～ノカ°」となる。

アカイカ°オ モイデキテ (赤いのをもいでて)
コメデモ ハコブカ°デモ (米なんか運ぶのでも)
ンナカ°ケ (そなんですか)
コレ アンタノカ°ヤ (これはあなたのものだ)

- (15) 「と言う」「と思う」において引用助詞「と」が脱落する。

ツナビキ シテクレ ューテ (綱引きしてくれ [と] 言って)
ドンナカ°ヤラ オモテ (どうなんだろう [と] 思って)

- (16) 接続助詞には次のようなものがある。

ハカットレド (計っているけれど)
ソヤケデ (そだから)
タベトルカ°デ (食べているので)
フンバトルカ°ニ (ふんばっているのに)
シタサエナ, シタサイノ (すると、した際には、しようものなら)
タベテデモ (食べても)

- (17) 終助詞には次のようなものがある。(↓: 非上昇, ↑: 上昇)

ハヤ ロクニ ナイチャ (もうろくにないよ↓)
アンジブンナ カーカヤワ (あの時期には主婦だよ↓)
ソシテ トッテクルカ°チ (そして取ってくるんだよ↓)
マメデ ハラ コワイテ シナハッタ ヒト アルカ°ヤゼ
(豆でお腹をこわして死なれた人があるんだぞ)
タベッシャイマ ューテ (食べなさいよ↓ [と] 言って)
ハヤジマエ シテコイヤ ューテ (早退してこいよ↑ [と] 言って)
ソコノ ウチノ ショクジカ° イチバン ヨカッタ チューガケ
(そこの家の食事がいちばんよかったと言うのかい?)
クジュサンカ (93 [歳] か)

アノ カナザワ ナカズカイ ュータカ[°] アッタナイケ
(あの金沢仲使い [と] いったのがあったじゃないか)
タベテミョマイケ (食べてみようじゃないか)

語彙

- (1) 「全然、まったく」「早くも、もう」「あなた」の意味を表す「ナン」「ハヤ」「アンタ」が間投詞的に多用される。「マン」(まあ),「ソリヤ」(そりや),「アノ」(あの),「ホレ」(ほら)などの間投詞も多用される。

イマデ アンタ ナン アカイ ジクシタヨーナ ハヤ ウクシー イロノカ[°] ナケニヤ タベレンモン

(今では、あなた、まあ、赤い熟したような、もう、美しい色のもの [が]ないと食べられないもの)

- (2) 「～カッテ」「～カエッテ」が、特定の目的を持った動作であることを強調する際に用いられる。

イッペン ネテカッテ トカエテカエッテ ツカワシヤイ

(一度煮て [よく] 溶かして使いなさい)

アンナ オカシーコト ユーテカエッテ

(あんなおかしなこと言って)

- (3) 「おいしくない」ことを「アジナイ」「ショムナイ」と言う。

- (4) 「立つ」ことを「タチル」「タッチスル」と言う。

- (5) 人をののしることばとして「ダラ」を用いる。

オマエ ダラカ (おまえはばかか)

ダラナ イワッシャンナマ (ばかなことをおっしゃるな)

(以上の解説は、基本的に、「各地方言収集緊急調査」当時の報告原稿による。)

富山県砺波市1981凡例

談話資料は、方言談話音声、方言談話音声の文字化、方言談話の共通語訳から成る。CD-ROMには、ページ単位で切った方言談話音声を、CDには、方言談話音声全体を収録した。

文字化と共通語訳

方言談話音声の文字化はカタカナで表記し、方言談話の共通語訳は、漢字かなまじりで表記した。方言談話音声の文字化と共通語訳とは、対照ができるよう、上下2段を1組として示した。上段が文字化、下段がその共通語訳である。

文字化については、表音的カタカナ表記を用いている。つまり、長音は「一」で示し、助詞「は」は「ワ」、助詞「を」は「オ」、助詞「へ」は「エ」と表記する。「カ°」「キ°」「ク°」「ケ°」「コ°」はガ行鼻濁音を表す。

また、分かち書き、句読点などは、便宜的なもので、厳密なものではない。「各地方言収集緊急調査」における、方言談話音声の文字化の方法は、後に掲げる「調査実施上の留意事項について」などに詳しく記されている。ただし、今回、「全国方言談話データベース」として公開するにあたり、文字化・共通語訳を整備する際には、当時のマニュアルにはとらわれず、読みやすさ、意味のとりやすさを優先して処理をした部分がある。

また、この文字化は、時間の流れを忠実に反映することを意図していない。したがって、発話の重なりや、複線的な会話の進行の構造が、文字化からは読み取れない。データを使用する際には、文字化・共通語訳を見るだけではなく、実際に、音声を聞いて判断していただきたい。

発話単位

ひとりの話者が続けて話している、話者が交替するまでの連続した発言を1発話とする。途中にあいづちが入る場合もある。

発話番号 <半角>

発話の通し番号を、各発話の話者記号の前に付した。

例：1A

話者記号 〈全角〉

話者、調査者など、談話の場にいる人物について、A, B, C, D, E, F, ……のように、アルファベットで示した。

例：1A

固有名詞

話者および一般の人名については、文字化・共通語訳の該当個所を、A, B, C, X1, X2, X3などのアルファベットに置き換えた。話者、調査者など、談話の場にいる人物については、A, B, C, D, E, F, ……のように示し、話題の中の第三者については、X1, X2, X3, ……のように示した。ただし、音声は、該当個所に加工をしなかった。

歴史上の人物や、有名人の人名については、記号に置き換えることはせず、個人名を出すことにした。また、会社名、店名、製品名などについても、発言されたとおりに記している。

地名については、そのまま扱うことにした。

記号

。 (句点) 〈全角〉

ポーズがあつて、意味的にひとつのまとまりを持つ文と考えられる個所。

共通語訳については、実際の発話でポーズが置かれていらないところでも、意味の取りやすさを優先して句点をつけた場合もある。

例：ソーデス ソーデス

そうです。 そうです。

、 (読点) 〈全角〉

基本的に息をついた個所、または、ポーズのある個所。

共通語訳については、実際の発話でポーズが置かれていらないところでも、意味の取りやすさを優先して読点をつけた場合もある。

また、文字化と対応しなくなつても、読みやすさを優先して、取り去つた場合もある。

例：シ、ヤクショ

市役所

？ 〈全角〉

上昇イントネーションと判断した個所。

例：アズケトイテ？

預けておいて？

() 〈全角〉

あいづち。ひとりの人が連續して話している時にさえぎったり、口をはさんだりした個所。

(A …… のように、開き括弧の次にあるアルファベットは、発言している話者を示す。() の閉じ括弧の直前の句読点は省略した。

なお、() 内のあいづちと、独立した発話扱いされているあいづち的発話との違いは必ずしも明確ではない。

例：(A アー ソーデスカ)

{ } 〈全角〉

笑、咳、咳払い、間、などの非言語音。

例：{笑}

{咳}

{手を叩く音}

× × × 〈全角〉

言い間違いや言い淀みなど。

例：ム ム ムツカシー

× × 難しい

* * * 〈全角〉

聞き取れない部分。

例：オチャズケノ*

お茶漬けの*

／＼＼＼ 〈全角〉

対応する共通語訳が不明な部分。

例：モーゼー／ モジナンデスナ、

／＼＼＼ 「文字」なんですね。

[] 〈全角〉

方言音声には出てこないが、共通語訳の際に補った部分。

例：ミカン ノセテ

みかん [を] 乗せて

= 〈全角〉

[] 内の=は、意味の説明や、意訳であることを示す。

例：イマ ユー

今 いう [=今話題にあがった]

| | 〈全角〉

注意書きなど。

例：| Aに対して |

[] 〈全角〉

注記。方言形の意味・用法、特徴的音声などについて説明し、文字化・

共通語訳の後にまとめてある。[] 内の半角数字は、注記の番号を示す。

例：ホシツキサンノオモチ [1]

音声

CD-ROM には、冊子のページ単位で区切った方言音声の wave ファイルを収録している。冊子のページを pdf ファイルにしたものに、方言音声をリンクさせていて、各ページにある **再生** の部分をクリックすると、そのページの音声を聞くことができる。

CD には、談話全体の音声を収録している。以下にあげるように、適当な個所で、トラックに区切っている。

CD トラック番号

文字化・共通語訳のヘッダは、方言音声を収録した CD のトラック番号を示している。「富山01-1」は CD トラック番号が01で、その1ページ目ということである。「富山01-1」「富山01-2」……「富山01-7/02-1」……「富山11-6」のように表示される。

また、文字化・共通語訳部分には、CD のトラックの切れ目を表示した。矢印の部分がトラックの切れ目を表し、その両側の数字はトラック番号である。

[↑01], **[01↑02]**, …… **[10↑11]**, **[11↑]** のように表示される。

第10巻のCD（66分47秒）には、富山県砺波市の談話、【昔の食べ物、労働の移り変わり】の全体の音声を収録している。各トラックの開始ページ・行、終了ページ・行、時間は下記のとおりである。行は、文字化の行を表示した。

トラックNo.	開始ページ・行	終了ページ・行	時間:分:秒
01	p.27・ℓ.1	p.33・ℓ.5	0:02:12
02	p.33・ℓ.7	p.38・ℓ.17	0:02:04
03	p.38・ℓ.19	p.45・ℓ.3	0:02:04
04	p.45・ℓ.3	p.51・ℓ.1	0:02:02
05	p.51・ℓ.3	p.56・ℓ.5	0:02:02
06	p.56・ℓ.7	p.61・ℓ.9	0:02:06
07	p.61・ℓ.11	p.66・ℓ.11	0:02:07
08	p.66・ℓ.13	p.72・ℓ.9	0:02:04
09	p.72・ℓ.11	p.74・ℓ.19	0:00:55
10	p.75・ℓ.1	p.80・ℓ.9	0:02:06
11	p.80・ℓ.11	p.85・ℓ.19	0:02:16
計			0:21:58

富山県砺波市1981談話

収録地点 富山県砺波市鷹栖

収録日時 1981(昭和56)年8月26日

収録場所 富山県砺波市鷹栖 鷹栖公民館

話題 昔の食べ物、労働の移り変わり

話者

A	男	1907(明治40)年	(収録時74歳)	農業
B	女	1902(明治35)年	(収録時79歳)	農業
C	女	1898(明治31)年	(収録時83歳)	農業

調査者

D	男
男	(収録談話中に発話なし)

収録時間 (CD) 21分58秒

【昔の食べ物、労働の移り変わり】

話し手

- | | | | |
|---|---|--------|----------|
| A | 男 | 明治40年生 | (収録時74歳) |
| B | 女 | 明治35年生 | (収録時79歳) |
| C | 女 | 明治31年生 | (収録時83歳) |
| D | 男 | | 調査者 |

1 A : トーフナンカ タベテデモ (B ウン)

豆腐なんか[を] 食べても (B うん)

[↑01]

(C ナカ[°]ケ、 ハー) ベント一 モッテエッテ。

(C そうなのか、 はあ) 弁当[を] 持って行って。

(B ウン)

(B うん)

イマノ ニショクベントヨリ オーキーカ[°][1] モッテエッテ。

今の 二食弁当より 大きいの[を] 持って行って。

(C ダランコト ユワレンナ) {笑}

(C ばかなこと 言いなさるな) {笑}

エッペンニ タベレンモンジャケデ[2]。 {笑}

1回に 食べられないものだから。 {笑}

(B ソルデ ヨイカ[°]イ) トーフ ヒツツ クレ ュート

(B それで いいのだ) 豆腐 ひとつ くれ [と]言うと

トフヤニ ド一 トフ ヒトツ ューテ
豆腐屋に ほら 豆腐 ひとつ [と]言って

キッカエシタモンデスチャ。

聞き返したものでした。

2 B : ハーン ソーデス タイショクヤッタモンジャケデ
ふうん そうです 大食だったものだから

3 A : ソーシタラ トフ ヒトツ タベテ。 (B ウン)
そうしたら 豆腐 ひとつ 食べて (B うん)

ニショクベントア ヤッパリ チョッコ モノエモンジャカラ
二食弁当が やはり 少し [多くて]つらいものだから

チョコル ノコエトエテ。 コーシテ サト アリクト ュート
少し 残しておいて。 こうやって 里[を] 歩くと いうと

ヒタア ヒヤクショノ ヒトラチャ イップクシトラッシャル。
人は 百姓の 人たちは 一服しておられる。

(B ウン) ソルオ ミタサイ ヒモジーナッテ マタ
(B うん) それを 見ると ひもじくなって また

(B ケナルーナル[3]カ°ヤロ)
(B うらやましくなるのだろう)

ソイテ ソレオ ベント ノコエトエタレド
そして それを 弁当[を] 残しておいたけれど

富山 01-3

スコスイダケ タベテ (B ヒッパリダエテ タベルト)
少しだけ 食べて (B 引っぱり出して 食べると)

コッチャヤト ホレ マツノ ヒトト チコ[°]テ
こちらだと ほら 町の 人と 違って

ホレ タバコ[4] チューモン タベトッタ クセ
ほら 間食 というもの[を] 食べていた 癖[が]

アルモンデッサカイ。 (B ソヤテ)
あるものですから。 (B そうですよ)

ソシテ ヤッパ スコ[°]イテキタモンデス。
そうして やはり 過ごしてきたものです。

ソデ ナン イッショク[°]ラエ イチニチニ
それだから まあ 1升ぐらい 1日に

クー コト ナン メズラシナカッタ。
食べる こと[は] 全然 珍しくなかった。

4 B : ソンカイニ アンタ アノ コビキサンク[°]ライ アンタ
そのかわりに あなた あの 木挽きさんなどは あなた
ニショージャ ユーテ。
2升だ [と]言って[いる]。

5 A : ウ ソー ユーテ。 イマ。
× そう 言って 今。

6 B : ソヤデ ヤッパ ロードーシャ チュモンナ
だから やっぱり 労働者 というものは

7 A : ナン イッショクタ イッショクニ ヤッパ サンコ[°]ラエ
まあ 1食× 1食に やっぱり 3合くらい

ナン フツーノ モンジャデ。 (B ン ン)
まあ 普通の ものだから。 (B うん うん)

8 B : イマノ コドンダチ イチニチニデモ サンコ[°]ヨリ ナン
今の 子どもたちは 1日でも 3合以上 まあ

タベンガイ。
食べないよ。

9 A : イチニチニ サンコ[°]サエ イランワ。
1日に 3合さえ いらないよ。

10 B : イランチャ。 (C ン?) イマノ オコダチャ (C ウン)
いらないよ。 (C ん?) 今の お子たちは (C うん)

サンコ[°]ノ ゴハンサエ タベッサランチャ。
3合の ご飯さえ 召し上がらない。

(C ソーカモシレン)
(C そうかもしない)

11 A : ソッカラ ソンカワニ フクショク チューモンナ
それに そのかわりに 副食 というものは

富山 01-5

エーヨーナイモン ダッテ トチュナカデモ
栄養がないから // 中途でも

12B : ナンモ。

何も[食べない]。

13A : トーフナンカ チューモンナ ソリヤ イチバン エーヨーカ。
豆腐など というものは それは いちばん 栄養が

アッタモンヤチャ。 (B ソヤー) タエテー ンメボシカ。
あったものだよ。 (B そうだ) たいてい 梅干しか。

ベントノ オカズヤチャ ンメボシ。
弁当の おかずというと 梅干し。

14B : アノ コノコ[°]ロノ ナスピノ ム ムラサキ[5]ニ
あの このごろは ナスの × 醤油に

ツケタヨーナ ナスピノ シ アノ シオズケガ[°]。
漬けたような ナスの × あの 塩漬けが。

15A : ガッコーエ イクヨーニ ナット (B ウン)
学校へ 行くように なつたら (B うん)

アノ ダイコンノ ツケタ アサズケオ タベルカ[°]
あの 大根の 漬けた 浅漬けを 食べるの[が]

オエシテネ。 (B ウン ソーヤ)
おいしくてね。 (B うん そうだ)

ソイテ イッショケンメー タベトッタモンデ
それで 一生懸命 食べていたもので

ナン イマメタエニ ヤ オカズエレヤ ナンジャカ ユーテ
まあ 今みたいに × おかげ入れだとか なんだとか いって

ベツニ ナットランシ。 ガッコーエ イキヤ
別に なっていいないし。 学校へ 行けば

キューショクデ ナン チャーント エーヨ ハカットレド。
給食で まあ 正しく 栄養[を] 計っているが。

ムカシノ モンナ ナンデモ タベサエシリヤ、
昔の 人は 何でも 食べさえすれば、

ハラサエ フクレリヤ ヨカッタモンジャ。
腹さえ ふくれれば よかったものだ。

(B ソンナカ°イチャ。 ナ) ソイデ ヤッパリ ナカニ
(B そなんだよ ×) それで やはり 中に[は]

オーキー オラチャ X1サマ ユーテ
大きい[家の] 私たちは X1さま [と]いうと

X1 アノー X1サマ ュートッタガ°。
X1 あのう X1さま [と]いっていたの[=人]。

アノ ヒトラチャ ムカシカラ ホレ モンモ アルヨーナ
あの 人たちは 昔から ほら 門も あるような

オーキー ウチヤッタモンジャデ (B ウン ウン)
大きい 家だったものだから (B うん うん)

コンデ ショーガユユーテ アノ ヒトノ ベントノ マ
これで ショウガ湯というあの人の弁当の ×

オカズ イチバン ヨカッタロ トオモトルワ。
おかげ[が] いちばん よかっただろう と思っているよ。

[01↑02]

オレ ミトル。
私[は] [そのように] 見ている。

16B : アン X1 X1 X1サヤッタカイノ
あれ X1 X1 X1さんだったかね

X2サヤッタカネ。 (A ダンガ) X1 ナン X1サ X1
X2さんだったかね。 (A 誰が) X1 まあ X1さん X1

X1サ。 {笑} (D X1) アノ X1サンデナカッタケ。
X1さん。 {笑} (D X1) あの X1さんでなかつたかね。

ドロボ ハイッタシー (D ソー)
泥棒[が] 入ったし (D そう)

(A ウン ドロボ一 ハイッタカ[°])
(A うん 泥棒[=人] 入ったの)

モンダイ オッキタカ[°]。 ナツネ。
問題[が] 起きたの 夏[あった]ね。

富山 02-2

ソコノ ウチノ ショクジガ イチバン ヨカッタ チューカ[°]ケ。
その 家の 食事が いちばん よかった というのか。

17A : ドーモ ソーラシカッタ。 (B アー アー アー) ヨー。
どうも そうらしかった。 (B ああ ああ ああ) よく

アンタ エカ[6]ヤトカ タラノコズケメタイモン
あなた イカだとか 鮯の子づけみたいなもの[を]

モッテキテクレタモン。 ソンナモン ナン
持つててくれたから。 そのようなもの[は] まあ

オラチャメタエナ ナン ヘーゼー ナン
私たちみたいな[のは] まあ 普段 まあ

メレモセンモンヤチ。 (B ウン ソヤ ソヤ ソヤ)
見ることもできないものだよ。 (B うん そう そう そう)

(D ウン) ソルデ マ ハラノ コタ ジューブン マ
(D うん) それで ま 腹の ことは 十分に ま

フクサエテモロタレド ヤー
[腹を]ふくれさせてもらったけれど いや

フクレナンダ チュヤー ヤッパ センソーチュデシタネ。
ふくれなかつた といえば やっぱり 戰争中だったね。

18B : ソーヤラ。 アノ ジブンナ アンター ドンナ ヒトモ
そうだろう。 あの 頃は あなた どの 人も

富山 02-3

コンナ ヒトモ エッショヤッタチャ。 ヒドイコト
この 人も 一緒だった。 ひどいこと

19A : ソルデ ソノ ジブン (C ウン)
それで あの 頃 (C うん)

20B : エクサチューワー センソチューワー
戦中は 戰争中は

21C : ヒドイ モン タベトッタモンダ。 イマノ モン
まずい もの[を] 食べていたものだ。 今の人[は]

イマデ アンタ コーリャンヤラ ナンヤラ タベヨル
今は あなた コーリャンとか なんとか[を] 食べている

タベテ ンナ ハラ ワルシテ
食べて みんな 腹[を] 悪くして

アンタ デカイド シナサッタカ[。]ヤネ。
あなた 多く 亡くなつたのだぞ。

22A : オラ アンタ ズリ[7] ヒッパッテ イッテ
私 あなた そり[を] 引っぱって 行つて

アサ コンド イキシナニ
朝 そこへ 行きがけに

X3サンノ ウツカラ ニモツ ツケテ
X3さんの 家から 荷物[を] 載せて

ズリ ヒッパッテ ソシテ アタリマエドオリ
そり[を] 引っぱって そして 普通どおりに

ウンソーテンデ ソロテ
運送店で 搬つて

カヤリニ ヒトア オヤスン ューテ イク ジブンナ
帰りに [他の]人が おやすみ [と]いって 帰る 頃に

コンダ フカエ[8]ノ スエシャマデ クルガ°ヤチャ。
今度は 深江の 水車まで 来るのだ。

ズリ ヒッパッテ キトッタガ°。
そり[を] 引っぱって 来ていたのだ。

(C マメカ アンナモン ハイキューニ アタッタノオ)
(C 豆か あのようなもの 配給に 与えられたのを)

カヤリニ ヒンモジテネ ドーモ ナラエデ。
帰りに ひもじくてね どうにも ならなくて。

ソシテ アン トキヤ シリヨ ドッダケ タッタモンカネ。
そして あの ときは 飼料 どれだけ あたったものかね。

ムシノ スデネ ヒトイモンヤッタ。
虫の 巣でね ひどいものだった。

ソルオ コノ カタテニ イッパイ
それを この 片手に いっぱい

アノ アナ アイトル トコロカラ デタヤツネ
あの 穴[の] あいている ところから 出たものね

ゾン ナン コーシテ ヒッパリヤ クルガ[。]ヤゼ。
それが まあ こうして 引っぱると [出て]くるんだよ。

ムシャ ツズクットッタカ[。]
虫は 巣を作っていたけれど

テデ ナン クジランデモ イー。
手で まあ ほじくり出さなくても よかった。

ソルオ ヒトクチ タベタラ ソレデ ナン
それを 一口 食べたら それで まあ

ハラモ イトモナライデ[9]。 ソルデ ウチマデ コレタガイ。
腹も 痛くもならないで。 それで 家まで 来られたのだ。

イマカラ ミリヤ ナン ソラ ナン
今から みると まあ それは まあ

ハラ ナンベン キッテ シジツスルクライニ シンニヤ
腹[を] 何回[も] 切って 手術をするほどに しなければ

ナオランヨーナ モンデモ タベトッタモンジャチャ。
治らないような ものでも 食べていたものだったよ。

ソルデ ダイジョーブナ シリョ カイク[。]イシタ ヒトア
それで 大丈夫だった 飼料 買い食いした 人は

マダ ヨカッタホーデスチャ。

まだ よかったほうですよ。

23C : アンナ ヒトイ モン センソーチュニ ンマレタ モンナ
あんな まずい もの 戦争中に 生まれた ものは

シランワ。 アンナ ヒトイ モン タベタモン。 {笑}
知らないよ。 あんな まずい もの[を] 食べたもの。 {笑}

24B : ゾースイヤ ゾースイヤ ューテ。 (C ウーン)
雑炊だ 雜炊だ [と]言って。 (C ううん)

ゾースイヤ ューテ (C ドースル オラワ)
雑炊だ [と]言って (C どうする 私は)

25A : ソルデ サッキカラ キモン チュー ハナシモ デタガ°
それで さっきから 着物 という 話も 出たが

キモンナンカ チュモンナ ンナ ムカシャ アエゾメニ
着物など というものは みんな 昔は 藍染めに

シタモンジャチャ。

したものだよ。

(C ヒトイ モン タベ タベタモンジャ)

(C まずい もの[を] ×× 食べたものだ)

02↑03

アエ ンナ ウチデ ツクッタモンジャ。

藍[は] みんな 家で 作ったものだ。

富山 03-2

(B ソヤチャガイチャネー) (C ウン)

(B そういうことなんだよね) (C うん)

ソシテ アエカ[。]メヤナンカ チューカ[。] アッタレド。
そして 藍瓶だなど というものが あつたけれど。

イマコサ センイデ オラモ ソメヤエモ チョツコ アノ
今でこそ 繊維で 私も 染物屋にも 少し あの

クワイシャエ イットッタモンダカラ。
会社へ 行っていたものだから。

26C : イモノテテ[10] カエニ イッテ *****
いもがしら[を] 買いに 行って *****

イモノテテマデ タベタ。 ウチャ オババ
いもがしらまで 食べた。 うち[の] おばあさん

オラ コンナモン タベタラ スグ クダンジャワ
私[は] こんなもの 食べたら すぐに 下痢をおこすよ

ユワハッタ。 {笑}
[と]言われた。 {笑}

27A : ソーナットルガネ。 (C ユワハッタ[11]ナ)
そうなっているがね (C 言われたね)

ナン ムシノ スモ ナン アッタモンデ ナイワ。
まあ 虫の 巣も まあ あつたもので ないよ。

ナンデモ タベレルモン。
なんでも 食べられるから。

28C：ユワハッタモンヤ。 ヒトイ モン タベタ。
言われたものだ。 ひどい もの[を] 食べた。

ベントニ ダエコ デカイト マゼティッタラ
弁当に 大根[を] たくさん 混ぜていいたら

ガッコノ センセア ア コンナ シロイ ママ タベトル
学校の 先生が あ こんな 白い ご飯 食べている

ユーテ ヤメ[12] ユワハッタモンヤ。
[と]言って ×× 言われたものだった。

29A：ゾンナラ (C ウン) シックラ[13] アッテ。
それから (C うん) 好き嫌い[が] あって。

オラ ナンデモ (C アー) タベタモンヤレド
私 なんでも (C ああ) 食べたものだけれど

チッチャイ ジブンナネー ネキ[°]ノ シロイ トコ
小さい 頃はね ネギの 白い ところ

タベニクイシ。 (C ム マルデ ナン)
食べにくいし [=嫌いだし] (C × まるで まあ)

ネンジンカ[°] ヤッパリ タベニクイシ。
人参も やはり 食べにくいし [=嫌いだし]。

富山 03-4

ウチノ オヤジア アンマリ ソンナ コト シテ
私の 父親は あまり そんな こと して

オラチャメタイ コヤケノ モンナ ヒトノ ナカエ
私たちみたいな 貧乏な 者は 人の 中へ

ツカワレンカ°ヤト
行ってはいけないのだと。

30C : ヨ ヨモンサエ マゼテ タ タベタモンヤゼ。 ゴハンノ ナカヨ。
× ヨモギさえ 混ぜて × 食べたものだ。 ご飯の 中だよ。

ヒトイ モン タベトッタモンジャ。 ウン。
まずい もの[を] 食べていたものだ。 うん。

31A : ソシテ ソンナ ショクノ エドルグイ シタサエナ
そのうえ そのように 食事に 好き嫌い したりすると

ヒダルイ メニ アワンナンゼ ューテ。
ひもじい 目に あわねばならんよ [と]言つて。

ソンカワリニ ナンデモ タベタ。
そのかわりに なんでも 食べた。

タベレンモン ナシンナッタ。
食べられないもの[が] ないようになった。

シマイニ シインマデ タベタモンジャデ。
最後は [果物の]芯まで 食べたものだからよ。

ソンナ モンジャッチャ。
そのような ことだよ。

32C : ナーン サツマイモノ ポー[14]モ ナケラニヤ
まあ サツマイモの 葉柄も なければ

ソンナ モン ナーン ナーモ
そのような もの まあ 菜も

ドンナ モンモ マゼテ タベトッタモンジャカ。 ***
どんな ものも 混ぜて 食べていたものだか。 ***

33A : ソンナモン イーホーデスチャ。
そんなものは いいほうですよ。

アゼブチノ ホーグライ ンナ
畦道の 穂なども みんな

コーシテ ヒトワ コーテイッティイッタモンデスデネ。
こうして 人は 買っていったものですからね。

34C : コメ コメツブモ ン ナーン オーカ コメツブモ ナイモン
×× 米粒も うん まあ 多くは 米粒も ないもの

ウ マッデ カヤクダラ カスノモン
× どれもこれも 混ぜ物の多いご飯やら かすのもの[を]

タベテ
食べて[いた]。

富山 03-6

ゾースイ タベテ (B エン) フィンドカッタモンジャー。
雑炊 食べて (B うん) ひどかったものだよ。

35A : ゾヤエド オラチャ アン ジブンナ カホーヤッタチャ。
そうだけれど 私たちはあの頃は [まだ] 果報者であった。

(C ソン マダ ヨカッタワ) ドコヤラ アンタ
(C そう まだ よかったよ) どこだか あなた

ナンジャ ユヤー ヒトノ アンナ ユーテ
なぜかと いうと 人の あんな[こと] いって

タベレンモンデモ ナン モラッテ タベタモンジャモン。
食べられないものでも まあ もらって 食べたものだから。

イマノ ヒトラチャ ナン タベテモ
今の 人たちは 何[を] 食べても

ナン オイシナイ ワケナガイチャ ハラ ヘットランケデ。
全然 おいしくない わけだよ 腹[が] 減っていないから。

36C : オラ アノ コーリヤン コーリヤン タベタカ。
私 あの コーリヤン コーリヤン[を] 食べたの[が]

イツパン ヒドカッタワ。 オラ (B {笑})
いちばん ひどかったよ。 私[は] (B {笑})

アンタ トルノ タベルヨーナ モン タベタカ。
あなた 鶏の 食べるような もの[を] 食べたの[が]

イチバン ヘドカッタワ。

いちばん ひどかったよ。

37A : コーリヤンノ コターネー (B ウン ***)

コーリヤンの ことを言うとね (B うん ***)

フクオカノ (B ウン) アノ サカヤニ アッタカ[。]

福岡の (B うん) あの 酒屋に あったのを

デカイト モッテキタガデ アノ オケン ナカカラ。

多く 持ってきたので あの 桶の 中から[持ってきた]。

アル オラチャ ヒッパッテ モッテキタガヤ。

あそこは 私たちが 引っぱって 取ってきたのだ。

38C : ヒドカッタモンジャ。 アンナ モン

ひどかったものだ。 あんな もの[は]

マッデ トルノ トルノ タベルヨーナ モン タベテ

まるで 鶏の 鶏の 食べるような もの[を] 食べて

(A トルノ タベルヨリワネー)

(A 鶏の 食べるよりはね)

ハイキューデ コメア ハイキューデ コメ ンナ ダサッシー。

配給で 米は 配給で 米[は] みな 供出させ。

ソッテ コメ ハイキューデ コメナ カワリニ

そして 米[は] 配給で 米の かわりに

サトーヤトカ (A ウン) ソンナモンジャトカ。
砂糖だとか (A うん) そのようなものだとか。

マメ デカイト。 (A ウン)
豆 たくさん。 (A うん)

03↑04

マメデ ハラ コワイテ スナハッタ ヒト アルカ[°]ヤゼ。
豆で 腹 こわして 亡くなった 人[が] あるのだぞ。

39A : ソシテ アノ シューセントージノ サト タベ タベテ
そしてあの 終戦当時の 砂糖 ×× 食べて

ムシャ デカイト オッタ。
虫が たくさん いた。

40C : ヒドカッタモンジャー。
ひどかったものだ。

41A : サトニ ムシ オッタガ[°]イ。
砂糖に 虫[が] いたんだ。

42C : アンナ コト イマノ コドンドモニ ハナストシテモ
あのような こと 今の 子どもたちに 話すとしても
ナン ダチャカン シランワ。
まあ らちがあかない 知らないよ。

43A : X4サンノ シナハッタ ダンナハンナ。
X4さんの 亡くなった お医者さんは。

富山 04-2

オラ アン ドキニ ジーニシチュー ャッテ
私 あの 時に 十二指虫[に] かかって

ミテモライニ イッタカ°ヤッタカ°。
見てもらいに 行ったのだったのだ。

ジューニシチュア コンナ ムシヤ ューテ。
十二指虫は こんな 虫だ [と]言つて。

イマ ムカシディヤー ムツノ キッタヨーナ
今 昔でいえば ムツの 切つたような

コマコ一 キッタヨーナ シロイ アンナカ°ヤッチャ。
細かく 切つたような 白い あのようなだと。

ソーウー トキヤ ソイカラ サト アノ ヒトア ミトッテ。
そういう 時は それから 砂糖[を] あの 人が 見ていて。

アノ アンカ[15] アンカ アノ サト
あの 長兄 長兄 あの 砂糖[を]

イマ ナマデ タベラレン ューテ。 (B フーン)
今 生で 食べるなよ [と]言つて。 (B ふうん)

ニテ タベッシャイ ューテ。 コンナ ムシヤ ューテ。
煮て 食べなさい [と]言つて。 こんな 虫だ [と]言つて。

チヨット ユーヤネー セムノ カラミタイニ。
一言で いうと 蝉の 賀のような。

富山 04-3

ソレ ムシノ ハヤ カラデスチャ。 (B ハーン)
それ[は] 虫の もう 穀ですよ。 (B ふうん)

デテイッタカ[°]ノ。
[虫の]出ていったやつの。

ソシテ コンナ ムシ オルカ[°]ヤ ユーテ。
そして こんな 虫[が] いるのだ [と]言って。

アノ ボーエンキョーデ ミシテ アー ボーエンキヨーン ナイワ。
あの 望遠鏡で 見せて いや 望遠鏡で ない。

アノ ムシメカ[°]ネデ ミシェテ クレッシャルモンヤデ (B フン)
あの 虫めがねで 見せて くださったものだから (B ふん)

ヤッパリ セミホドノ デカサニ ナッテ ミエタ。 (B ハーン)
やはり 蝉ほどの 大きさに なって 見えた。 (B ふうん)

ソシテ コンナ ムシ オルカ[°] ユーテ。
それで こんな 虫[が] いるのだ [と]言って。

アノ スインニ[16] コーテキタ サト
あの 新たに 買ってきた 砂糖[を]

スインニ ツカワレンゾ ユーテ。
すぐに 使うなよ [と]言って。

イッペン ネテカッテ トカエテカエッテ ツカワシャイ。
一度 煮て [よく]溶かして 使いなさい。

富山 04-4

ソーシタラ シンドルサカイ チューカ[°]イ。
そうしたら 死んでいるから と言うのだ。

アノ X4サンノ ダンナ ミミヤ *** ソンナコト
あの X4さんの 医者[は] 耳は *** そんなこと

ンナ オシユテクレッシャルチャ。
みんな 教えてくださるよ。

44C : イモノテテ カズイテ ノムラジ ノムラジマダケ
いもがしら 背負って 野村× 野村島まで

オラ カエニ イッタラ。
私 買いに 行ったら

ヨサル クロナッテ ヒトノ ミテヤッサルトクニ
夜 暗くなって 人の 見ておられる時に

ソンナ ウチカラ カズイテ デラレン ューテ
そんな 頃から 背負って 出てはいけない [と]言って

クロナッテカラ ナンシタラ オトク
暗くなつてから 何[を]したら //

オチャ ジーチャン メ ムカエニ イラハッタ
うち[の] おじいさん[が] × 迎えに いらっしゃった

ク クラナッテ (B クロナッテ)
× 暗くなつて (B 暗くなつて)

ヒトノ トナリキンジョノ ヒト ウ デトル トクニ
人の 隣近所の 人[が] × 出ている 時に

ゾン イモノテテ カズイテ デラレン
×× いもがしら 背負って 出られん[と言われた]。

(B ソーヤ ソーヤ)

(B そう そう)

ゾンナモン コーテキテ (B ナン**)
そんなもの[を] 買ってきて (B なん**)

ゴハンニ マゼテ タベトッタモンヤ。
ご飯に 混ぜて 食べていたものだ。

ヒドイコトカ。 {笑} (B ***)
ひどいことが[あった]。 {笑} (B ***)

ゾンナコト イ イマ ナンジャ チュヤイヤー
そんなこと × 今 何だ と言って言えば

カンジャ チュヤイヤー ワケ ワカラんモン。
ああだ と/or 言って言えば わけ わからないもの。

ヒドイモンジャ トモーテ。
ひどいものだ と思って。

45A : ソルデ。 イマノ ヒトラチャ ソレ
それで。 今の 人々 それ

オラチャホド ンマラト タベトランモンヤチャ。
私たちほど おいしく 食べていない。

ウン ホンマニ ンマイ アジチャ シランカ^イ。
うん ほんとうに おいしい 味は 知らないよ。

(B ナン シラン シラン)
(B まあ 知らない 知らない)

イマノ アンタ サカナ チュヤー ヨーショクデショーカ^イ。
今の あなた 魚 といえば 養殖でしょう。

(C ソンナカ^イ) ハダケヤ ュータトコロカ^イ ネー
(C そのとおり) 畑[物]だ [と]言ったところが ね

モヨーノ ヨイ トクニ ツクッタカ^イナラ ンマケレド。
[天気の]模様の よい 時に 作ったのなら おいしいけれど。

アンタ アメ フッタ トクノヤツチャ マッデ アンタ
あなた 雨[が] 降った 時のものは まるきり あなた

ンナ アンタ オンシツデ ツクッタヨーナ モン
みんな あなた 温室で 作ったような もの[を]

タベトルカ^イネ。 (B ナンマンダブ)
食べているのだね。 (B なんまんだぶつ)

イマノ ヒトラチン コタ メズラシイ モン タベトルカ^イデ
今の 人たちの ことは 珍しい もの[を] 食べているので

ンマサニ タベトルカ。ンナイナイケ。

おいしく 食べているのではないじゃないか。

04↑05

ヤッパリ ナスピデモ スイカデモ (B ウン) ウリデモ

やはり ナスでも スイカでも (B うん) ウリでも

ソノ ジキジキニ タベルカ。 イチバン オイシーモンデスヨ。

その 時期時期に 食べるの[が] いちばん おいしいものですよ。

(B ソー**) アマミチューモンナ チコードス。 (B ウン)

(B そう**) 甘味というものは 違います。 (B うん)

ナマノ アジ イマノ ヒトラチャ シランチャ。 (B ナス*)

生の 味[は] 今の 人たちは 知らないよ。 (B ナス*)

タダ メズラッシー[17]。 オラチャミタイナ

ただ 珍しい[ものを]。 私たちみたいな

ヤット シエカ マク ジブンニ シエカ タベタ。

やっと スイカ[の種を] まく 頃に スイカ[を] 食べた。

ネー。 (B ウン) ウル ヤット フリュー ジブンニ

ね。 (B うん) ウリ[が] やっと 熟する 頃に

ンナ ハヤ タベラレタ ューナ

みんな 早くも 食べられた [と] 言うな

ジキヤケデ ホントノ ンマイ モン チューア

時期だから ほんとうの おいしい もの といえば

富山 05-2

(B ウン) メズラシイ モン タベトルカ°ヤ。
(B うん) 珍しい もの[を] 食べているのだ。

46B : ソージャネー テマイデ ツクッテ (C エーン) テマエ
そうだろうね。 手前で 作って (C ふうん) ××

ジブンラチア ハダケニ ツクッタカ°オ (C ウン)
自分たちが 畑に 作ったのを (C うん)

タタイテミテ オトカ° ヨイ ューテ トッテキテ
たたいてみて 音が いい [と]言つて 取ってきて

(C ウン) サー ワッテ タベヨマイカ ューカ°ノカ°カ°
(C うん) さあ 割って 食べよう [と]いうやつのが

オイシイチャ。 (C ソヤ ソヤ) スイカナラ。
おいしいね。 (C そう そう) スイカなら。

47C : ソリヤ オイシーワ。 アズア ツコ°ーワ。
それは おいしいよ。 味は [=が] 違うよ。

48B : ソッカラ ネー イマ トマトノ モンダイデ ュートネ。
それから ね 今 トマトの 問題で 言うとね。

(C ウン) トマトカ° アノ モ サンチカラ モイデクルカ°
(C うん) トマトが あの × 産地から もいでくるの[が]

アオミナイヨーナカ° モイデ ホイテ ミチ ドーチュー
青みがかったの[を] もいで そして ×× 道中[で]

富山 05-3

アルイトル アイダナ アコーナルカ[。]ヤロ。 (C ウン)
歩いている 間には 赤くなるのだろう。 (C うん)

ソヤケデ ショムナイ [18] ト。
それだから おいしくないと [いう]。

ハダケニ ナットルノカ[。] アカイト。 (C ウン)
畑に なっているのが 赤いと [いう]。 (C うん)

ソノ アカイカ[。]オ モイデキテ ショクタクエ モッテキテ
その 赤いのを もいできて 食卓に 持ってきて
タベタカチャ。 (C アジア チコ[。]マスチャ)
食べるとすれば。 (C 味は 違いますよ)

アジア チコ[。]ト。
味が 違うと [いう]。

49C : ア タベタ ジブンニ ネー ションナイカ[。]ト ネー[。]
あれ[を] 食べた 頃に まあ 味のないと まあ
ナラベテ コーバシー ンマイカ[。]ト アルヨ。 アンタ。
並べて おいしい おいしいのと あるね。 あなた

50B : ソーヤソナ。 ソコデネ ハジメテ (C ウン) アノ
そうだ それでね 初めて (C うん) あの
トマト チューモン オラ アンタネ。 (C ウン)
トマト というものを 私 あなたね (C うん)

富山 05-4

トナリノ カーチャン コレ ドコタラデ[19] モロテキタカ°ヤ。
隣の 主婦[が] これ どこかで もらってきたのだ。

ワケテ タベテミョマイケ。 タベッシャイマ ューテ
分けて 食べてみよう。 食べなさいよ [と]言つて

クダハレタカ°イ。 ナーン アンナ ニオイカ°
くだされたよ。 まあ あのような匂いが

イマ ナン センチャ。 (C ウン) アノ ソノ ジブンニ
今 全然 しないね。 (C うん) あの その 頃に

51A : ハヤッテキタ ジブンニヤロ。 (B ウン)
はやってきた 頃にだろう。 (B うん)

ハヤッテキタ ジブンナ タベネド オラッチャ
はやってきた 頃には 食べないけれど 私たちは

アオイカ° モンデキテ サイショニ タベタカ°イ。 (B ハーン)
青いの[を] もいできて 最初に 食べたのだ。 (B ふうん)

サイショニ アノ ウチノ トナンノ オジサンナ オイ A オマンナ
最初に あの 私の 隣の おじさんが おい A おまえは

ナンデモ タベンニヤ。 コレ タベテミ。
なんでも 食べなければ[いけない] これ[を] 食べてみろ。

ドーニモ タベレンデネ。
どうしても 食べられなくてね。

52B : タベレナンダワ。 ニオイカ° * * * * *

食べられなかつたよ。匂いが[して] * * * * *

53A : ナンヤラ コンカヤイテクルヨーナカ°ンナッテ。

なんとなく [喉から]吐きかえしてくるようなのになつて

54B : クサイヨーナ。

臭いような。

55C : ハズメニ アンナモン タベレナンダレド ダンダン

始めに あんなもの 食べられなかつたけれど だんだん

タベルヨーニ ナッタ。

食べられるように なつた。

56B : ソシタラ ダンダン ナレテシモテ

そうしたら だんだん 慣れてしまつて

57A : タベルヨーニ ナッタカ°ト ジメンニ ナレタカ°ト

食べるようになつたのと 地面に 慣れたのと

フタツ アルカ°ンナイカネ。

ふたつ あるのではないかね。

58B : ジメンカ° ナレタカ°カ。

地面が 慣れたのか

コノ クチノ ナカカ° ナレタカ°カ。

この 口の 中が 慣れたのか。

59A : イヤ クチモ ンナ ナレテキトル。
さあ 口も みな 慣れてきている。

60B : シーナ ナレルガ°ヤチャ。
みんな 慣れるのだ。

61A : イマデ アンタ ナン アカイ ジクシタヨーナ ハヤ
今では あなた まあ 赤い 熟したような もう

05↑06

ウクシー イロノカ° ナケニヤ タベレンモンニ。
美しい 色のもの[が] ないと 食べられないもの。

アンナ マッデ ウッテアルヨーナモン タベレンモン。
あのような 町で 売っているような[は] 食べられないもの。

アジノーテ。 ナン。
おいしくなくて。 まあ。

62B : ソーヤトコ。 {笑} コナイダ ウチニモ ソーユー コト
そうだ。 {笑} この間 家でも そういう こと[を]

ユートッタカ°。
言っていたのだ。

63A : ムカシア オラッチャ。
昔は 私たちは。

タノ クサ トットキ ユーテ モンデキテヤテ ***
田の 草[を] とつておけ [と]言って もいできて ***

アオイカ[。] モンデキタ。 ホイテ タベタモンネ。
青いの[を] 摘んできた。 そして 食べたものだ。

ソッカラ タベタカ[。] ダンダン ミズノン カワリニ
それから 食べたが だんだん 水の 代わりに

アレ ミズノ ホシイ トクニ ヨイモンデシテネ。 ナン。
あれ[は] 水の 欲しい 時に よいものであってね。 まあ。

64B：ソヤソヤ ミズミズト シトルモンヤ。
そのとおり みずみずと しているものだ。

65A：イマノ ヒトニワ ワロカレド イツツデモ ムツツデモ
今の 人には 悪いけれど 5つでも 6つでも

オラッチャ モンデ タベタモンジャ。 イマコサ ンデ
私たちは 摘んで 食べたものだ。 今でこそ それで

イマデコサ フタツホドヨリ ナン タベレネド。 {笑}
今でこそ ふたつほど以上 まあ 食べられないけれど。 {笑}

イッペンニ。 イマ アンタ オーキナカ[。]ン ナッチャ
一度に。 今 あなた 大きなのに なると

コンナカ[。] ナルゼ。 (B ソーヤロ ウン)
こんなの[に] なるね。 (B そうだろう うん)

キクノ ハナミタイニ。 {笑}
菊の 花のように[なって]。 {笑}

ソンナコト オモタサイナ

そんなこと[を] 思ったら

ナン イマダ オラチャ オイシーガ° タベテ

まあ まだ 私たちは おいしいの[を] 食べて[いて]

マツニ ウッタカ° タベレンチャ。

町に 売ってあるの[は] 食べられないね。

66B：ソヤ ソヤ。 ションナーイト。

そう そう。 おいしくないって。

ソリヤ ホレ モイダ サンチカラ モイデ

それは ほら もいだ 産地から もいで

ハコニ ツメテ コーシテ ユゾーシテ。

箱に 詰めて このように 輸送して。

ソシテ ウリバデ コーヤッテ コッチニ ウルカ°ヤ。

それから 売り場で こうやって こちらに 売るのだ。

ソノウチ ヒ タッテ アカーナッタカ°オ

そのうち 日[が] たって 赤くなったのを

ゼン ダイテ コーテクルカ°ヤロ。

銭[を] 出して 買ってくるのだろう。

ソン ナン ウチ トッテキテ タベリヤ

それ[を] まあ 家[へ] 取ってきて 食べると

(C ツションナーイワ) ツションナイ。

(C おいしくないよ) おいしくない。

(C ソンナカ[。] ツションナイカ[。] ウン)

(C そのようなのは おいしくない。 うん)

67A : ソレデ アンタ イマデ アンタ オンシツナンカノ トマト
それで あなた 今ごろは あなた 温室なんかの トマト

ヒトツキホド マエ。 オラ アルイタカ[。]

ひと月ほど 前[に] 私 [回って]歩いたが

ハヤ ンナ カレテシモートルモンデ。

もう みんな 枯れてしまっている。

ハヤイサカイデ。 (B ハーン ソーヤラシリマセン)

早く[熟した]から。 (B ふうん そうかもしれません)

ツイ デ ウチラノ オラチャ タベル ジブン ナッタサイナ
// / 私たちの 私たちは 食べる 頃に なると

ナン ウル ヒトラチャ ナン ハヤ ウルガ ロクニ ナイチャ。

まあ 売る 人たちは まあ もう 売るのが ろくに なくなる。

ナン ハヤ キロコーナッテシモテ。

まあ 早くも 黄色になってしまって。

キカ[。] カレテ ツケモト ンナ キロコーナットル。

木が 枯れて 根元[が] みんな 黄色になっている。

富山 06-5

シェカナンカデモ ムカシ ナン
スイカなんかでも 昔[は] まあ

ポンノ ジブンニ タベリヤ ヨイ トコヤッタモンチ。
お盆の 頃に 食べれば よい ところであったものだ。

イマ アンタ ナン ゴ ゴカ[。]ツノ ツケハジメカラデモ
今[は] あなた まあ × 5月の 月初めからでも

セエカ ウットルモン。 {笑} (B ナンヤラ)
スイカ[を] 売っているもの。 {笑} (B どうしたことか)

オラチャ マク ジブンナ ハヤ ハヤイカ[。] デトル。
私たちは [種を]まく 頃には もう 早いの[は] 出ている。

ソリヤ マ オキナワデ ツクルカ。
それは ま 沖縄で 作るか。

ドコデ ツクルカ シラネド。
どこで 作るか 知らないけれど。

68B : ソジャケデ ハライッパイ *** オロタイテー。
そうだから 精一杯 *** 急ぎたてて。

キコーモ ダイジヤシ クニモ ジメンモ ズート
気候も 大事だし 国[=土地]も 地面も 一層

ハヤラト ナル トコロノカ[。]ヤロケレド (C ウン)
早くから なる ところのものなのだろうけれど。 (C うん)

ソル コッヂエ クルマデニー (C ウン)
それ[は] こっちへ 来るまで (C うん)

ナンスルカ°。 コッヂノ モンナ オソラート
何する[=手数をかける]けれど。 こっちの ものは 遅く

ムコーカラ クル ジブンニ ャットコ タネ マエテ
向こうから 来る 頃に やっと 種[を] まいて

(C ウン) ナンスルカ°。 ソル
(C うん) なに[=育生]するのだ。 それ[は]

コッヂノ モンナ キコーニ アワシテ マクモンジャケデ。
こちらの ものは 気候に 合わせて [種を]まくものだから。

06↑07

ソヤケデ ナン ドーシテモー ウン ソノ ワー
それだから まあ どうしても うん その 私の

ジメンニ ツクッテ
地面に 作って

ソントクニ タベルカ° イチバン オイシイチャ。
その時に 食べるの[が] いちばん おいしいですよ。

69A : イマデ カイリヨーシタモンチャ。 ジャガ°イモナンカデモ
今では[は] 改良されているものとは。 ジャガイモなんかでも

ウチノ オラチノ チチオヤ ツクッタカ° コンナ アンタ
家の 私たちの 父親[の] 作ったの[は] このような あなた

富山 07-2

ンメブシノ チョッコリ デカイヨーナ ハシカカ[°]ランヨーナ[20]
梅干しの 少し 大きいほどの のどにひっかかるような

ナンヤラ オカシー タベトッタモン。
なにやら 変な[のを] 食べていたものだ。

(B アレ ヨゴ[°]イ[21]ヨーナ) ヨゴイヨーナ
(B あれ えぐいような) えぐいような[味]

(B アジ シタモンジャチャ) イマコサ ホレ
(B 味[が] したものだね) 今[で]こそ ほら

ホッカイドノ タネ ューテ ハジメカラ (B ウン)
北海道の 種 [と]言って 始めから (B うん)

オイシイカ[°] (B オイシイカ[°]) ヤッタレド。
おいしいの (B おいしいの) だったけれど

ホロホロシタカ[°] タベレルカ[°] ソシテ ダイブ
ほろほろしたの[を] 食べられるけれど。そして だいぶん

イマデ タベルカ[°]モ クチモ コイタレド マタ
今では[は] 食べるのに 口も 肥えたけれど また

ヨイガモノ アルチャ。
よいのも あるね。

70B : ソヤソヤ。 ヨイコトト ワルイコトト アルチャ。
そうそう。 よいことと 悪いことと あるね。

71A : デ オラチ ウチノ オヤジダチデモ アエモ ヨー
で 私の うちの 親爺たちでも 藍も よく

ツクラレタモンジャカ[。] アエナンカ ナンジャカ サオデ
作ったものだが 藍なんか[でも] なんだとか 竿で

オラチャ コーヤッテ カヤイテ[22]ヤルト。
私たちは こうして [上下に]ひっくり返してやると。

ソシタラ オヤジ スート コッチャニ コーヤシッテハッテ。
そうしたら 親爺[が] すっと こちらで こうしておられて。

ンデ イマ ソメモンデモ イマ (B フン) ンナ
それで 今 染物にしても 今は (B ふん) みんな

センイデモ ソメルカ[。] オラチャ イマ
繊維でも 染めるのに。 私たちは 今[は]

イットッタ ツザワノ センショクノ クワイシャラチ
行っていた 津沢の 染色の 会社ででも

ンナ アンタ ソメカタ チゴマスサカイデ。 ンナ
みんな あなた 染め方 違いますから。 みんな

アイカ[。]メヤネカ ナン ヨートラン。
藍瓶やなにか いやあ 言っていない。

(B イマ テマエノ トコロニ)
(B 今 自分の ところで)

アノ ケ ケナンカ チューモンナ。
あの × 毛なんか というものは。

ゴールドワインラチノ クラワ
ゴールドワイン | 企業名 | などの 倉庫では

(B アイガメノ クラモンデショカ[°])
(B 藍瓶の 倉物でしょう)

ホンマノ ジュンモーノ ケー ソメルチャネー。
本物の 純毛の 毛[を] 染めるよね。

ソノ センイガ ンナ チコ[°]モン。 (B ウン ソーヤチャ)
その 繊維が みんな 違うもの。 (B うん そうですよ)

ナン イママデ イッテカッテ サオニ カケテ
まあ 今まで[は] 入れて 竿に かけて

シューット シブルヨーナ コト ナン センチャ。
しゅっと 絞るような こと[は] まあ しないよ。

(B ソージャ) モト ンナ アイガメカラ ダイテヤッテ
(B そうだ) もと[は] みんな 藍瓶から 出してやって

カワエ イッテ サライトッテ
川へ 行って 晒していく

ソシテ ミズナ ナカ[°]レトル トコデ コーヤッテ
それから 水が 流れている ところで こうして

ヨー[23] イサブッテ (B イサブッテ)
よく 振り動かして (B 振り動かして)

キュッ キュッ キュート シメテ (B シメテ)
きゅつ きゅつ きゅつと 締めて (B 締めて)

ソシテ サオニ カケテ ホイタモン。
そして 竿に 掛けて 干したものだ。

イマ アンタ ンナ カンソーシツチ。 (B ソヤ ソヤ)
今 あなた みんな 乾燥室だよ。 (B そうだ そうだ)

カンソーシツデモネー ハナハダシーカ°
乾燥室でもね 甚だしいの[は]

イマ コンナ ズート コーシテ アノ オビミタイニ ナッテ
今 こんな ずうっと こうしてあの 帯のように なって

72B : アンナ テンピニ ダイテ ホイトル モンナ
これまでのよう 天日に 出して 干している ものは

オルマイ。
いないだろう。

73A : テンピデ ナン ホサンデスチャ。 (B ソヤロー)
天日で まあ 干さないですよ。 (B そうだろう)

ソンナコト シリヤ アンタ コンド
そんなこと すると あなた 今度[は]

ヒヤケスル ヤツカラ イロイロ ソメムラガ[。] デキル。
日焼けする ものから いろいろ 染めむらが できる。

74B：ソトカ[。]ワノ ホーア ヒヤケスライシ。 (A ウン)
外側の ほうは 日焼けするだろうし。 (A うん)

ナカノ ホーノア ャッパ ナランダリシテ
中の ほうのは やっぱり ならなかつたりして。

75A：ソメムラセズ イマ ナン アンタ アノ ローラーデ
染めむらせず 今[は] まあ あなた あの ローラーで

マワイテッテ ソシテ ミギカラ ヒダリエ キヨル。
回していくって そして 右から 左へ 来る。

ソノ アイダニ ンナ カワイシモカ[。]ネ。 (B ソーヤ)
その 間に みんな 乾いてしまうのだ。 (B そうだ)

07↑08

76B：イマデネ ソンナ ギジツデモ
今では[は]ね そんな 技術でも

ンナ カワッテ キトルサカイデ。 ウン。
みんな 変わって きているから うん

77A：カワッテキトル キトル。 ソメモンナンカデモ イマ
変わってきて きている。 染め物なんかでも 今[は]

タイテー ムカシメタイニ アイカ[。]メモナシ
たいてい 昔のように 藍瓶もないし

シェバイトコデ ソマルモンニ。

狭いところで 染まるもの。

ムカシナラ アンタ ズート アイガ[°]メア

昔なら あなた 前から 藍瓶が

アコニ ヒヤクアル。 デ デカイト アル (B ウン)

あそこ[の家]に 100ある。 × たくさん ある (B うん)

ウッチャナー ユーテ。

家だな [と]言って[いた]。

タイテーノ イエナ ゴジューホド ユーテ

たいていの 家は 50ほど[ある] [と]言って

ンナ ヤットッタカ[°]。 タカノス[24]ノ ホーデデモ

みんな やっていたものだ。 鷹栖の 村ででも

X5サニ オラチャ ヤッテヤッタカ[°] シットルシ。

X5さんに 私たちは 染めておられたの[を] 知っているし

X6ツア X6ツア アブラ[25]ヤッタ。

X6さん X6さんは 油搾りだった。

ソレカラ X3サンノ ウチラデモ ンナ シタッテ。

それから X3さんの 家などでも 残らず しておられて。

ムカシャ ムラデモ デカイト ソメトル ウチ

昔は 村でも 多く 染めている 家[が]

アッタモン。

あったから。

78B : オラチャ アンタラチャ トテモ ワカイヨーニ オモテ
私たちは あなたたちを とても 若いように 思って

ミトレドー アノー X6ツアニー アブラ シボットッタリー
見ているけれど あの X6さんに 油[を] 摺っていたり

ホッカラ X5サニ アエデ ソメタリ シトラッサンカ°
それから X5さんに 藍で 染めたり しておられるの[が]

ワカルカネ。

わかるかな。

79A : ワカルドコロカ。 {笑}

知っているどころか[=知っている]。 {笑}

オラチャ アコ アンタ ショ オラ アンタ
私たちは あそこ[に] あなた ×× 私 あなた

ショーカ°ッコエ イカン ショーカ°ッコエ イカン サキカラ
小学校へ 行かない 小学校へ 行かない 前から

クルマノ ツナビキシテ アノ チュ一イツセン[26]ノ
車の 綱引きして あの 中越線の

キシャカ° ミタテ。 (B ハーン ソヤ) ソイテ
汽車が 見たくて。 (B ふうん そうなの) そして

クワシャノ ナカエ イレラレテ イレテ ト一 タタイテ
貨車の 中へ 入れられて 入れて 扉[を] たたいて

ナイトッタカ[。] イマデモ オボエ アルチャ。
泣いていたの[を] 今でも 記憶[が] あるよ。

80B : オボエ アルカ。 {笑} (C エーン)
記憶[が] あるか。 {笑} (C うん)

クワシャノ ナカエ ハエッテ アスンドッタラー (C フン)
貨車の 中へ 入って 遊んでいたら (C うん)

ト タテラレタ[27]ト。 (C フン)
扉[を] 閉められたそうだ。 (C ふうん)

81A : ソイタラ マックラニ ナルモン。 クワモツヤケデ。
そしたら 真っ暗に なるんだよ。 貨物[車]であるから。

82B : ソヤケデ ソレ オボエ アル ユーテ。
それだから それ 記憶[が] ある [と]言つて。

(C ウン ウン)
(C うん うん)

83A : ノーカ[28]ノ X7ラチトヤッタ。
苗加の X7たちと[一緒]だった。

84B : ワカイヨーニアレード。 (C アーン)
若いようだけれど。 (C ふうん)

富山 08-5

コノッサン オラチカラ ミリヤ ワカイヨーニアレードー
この人は 私たちから 見ると 若いようだけれど

ヤッパル ソノ ハヤラト[29]
やはり その 早く

アノ シャバエ デテ ハタラエテラッシャル
あの 世の中へ 出て 働いておられる

85C：ア一 ソンナカ°ヤチャ。
ああ そうなんですよ。

86A：アン ジブンナ オラ アンタ ムツツカナ。
あの 頃は 私 あなた 6歳かな。

ガッコエ ナナツカラ アカ°ットルデ。
学校へ 7歳から 入学しているから。

ガッコエ アカ°ラン サクヤッタカイデ。 (B エーン)
学校へ 入学しない 前であったから。 (B ふうん)

ガッコエ アカ°ラン サクヤッタケデ。
学校へ 入学していない 前であったから

ムツツカ イツツデモ ナカッタカ°デ。
6歳か 5歳でも なかつたので。

ナンノシェ[30] ナナツカラ ガッコエ アカ°ットルサカエデ。
ともかく 7歳から 学校へ 入学しているから。

(B ウン ウン) ソイテ イッタラ。

(B うん うん) そして 行ったら。

ソンナコト ューテ シマイニ オモショナッタラ
そんなこと 言って あげくに おもしろくなったら

A オマエ クルマヒケ ューテ

A おまえ 車引け [と]言って

イッショケンメー ヒッパッテッテ アノ チューガ[°]ッコ一ノ
一生懸命 引っぱって行って あの 中学校の

アコノ サカ オツリルガ[°] ソン トキナサイ ナン
あそこの 坂 おりるのに その 時は まあ

カタカ[°]ワカ[°] ダブニ ユミニ ナッシモテ
片側[の綱]が だぶって 弓なりに なってしまって

ナン チョッコシモ ヒッパットランカ[°]イ。 (B フーン)
まあ 少しも 引っぱっていなかつた。 (B ふうん)

ソイタラ ヒトカ[°] ミテカッテ ア コッデモ
そしたら 人が 見て × これでも

オマエ チョッコシ タシニ ナルカイ ューテ。
おまえ 少し 役に 立つか [と]言って

ダラ ソンナコト ューナ。
ばか そんなこと 言うな。

コレ ノボリ アガ°ルトク コレ ギャクニ ナッデ
これ 上り 上がるとき これ 逆に なるから

チヨッコ フンバッテクレルチャ ユーテヤト。
少し ふんばってくれるよ [と]言っておられる。

オラ コンナ イッショケンメーニ フンバットルニ
私 こんな[に] 一生懸命に ふんばっているのに

アンナ オカシー コト ユーテカエッテ。
あんな おかしな こと 言って。

アノ オヤトモテ オモトッタ[31]コト アルモンジャ。
ああ おやつと 思っていたこと[が] あるもの。

08↑09

87B : アノ ホレ X8 ュー ンチノ バーチャン (A ウン)
あの ほら X8 [と]いう うちの おばあさん (A うん)

アノ ドーヤッタ ホレ アノ ムカシノ
あの どうだった[かね] ほら あの 昔の

チューザイショノ ホームイテ イク トコノ アノ
駐在所の ほうに 行く ところの あの

X9ノ ンチノ ムカエカ°ワニ アル。 (A アン X8サケ)
X9の 家の 向かい側に ある。 (A あの X8さんか)

アノ チューエツインサツ[32] イットラハッタ オヤッサマノ
あの 中越印刷[に] 行っておられた ご主人の

アツ X8 ナンジャイネ。
あれ X8 なんだつたかね。

88A : X8ヤチャ アトワ X10 (D X8サ)
X8だよ。 後は X10 (D X8さん)

89B : アノ オババモ アッデ ポッカ[33] ヨク ヨー
あの おばあさんも あれで 荷負人[を] よく よく

シテラハッタ。 ヒトデナイガ[°]。
していらっしゃった。 人じやないかな。

90A : アノ ヒトラチャ ソン ジブンナ ウツノ ハハオヤラット
あの 人たちは その 頃は 私の 母親たちと
(B ハア) スエシャカラ コメ カズイトッタモンジャ
(B はあ) 水車から 米[を] 背負っていたものだ

91B : ホーン ナンノセ アッデ チカラシコ[°]トシタ ***
そう ともかく あれで 力仕事した ***

92C : ドコノ オババイカ。
どこの おばあさんか。

93B : X8。 X8サカイネ。 (A ウン) X8サ
X8。 X8さんかね。 (A うん) X8さん

X8サ チュー ウチノ。
X8さん という うちの。

富山 09-3

94C : X8サノ オババ アンタ コメ カズイテ
X8さんの おばあさん あなた 米[を] 背負って

ヒッパッタリ シテハッタ ヒトヤゼ。
引っぱったり しておられた 人だよ。

95B : ソルカ°ー アノー コノコ°ロー ドーシテ オイデルケ
それが あの このごろ どうして おられるか

ユヤー ソクサーイ [34]デ シャコ°シャコ°ヤト。
[と]言えば 息災で 元気だって。

96A : アノ ヒト ソクサイヤチャ。 (C アンタ クジュサンヤ)
あの 人[は] 息災だよ。 (C あなた 93[歳]だ)

ソクサイヤチャ。
息災だよ。

イツンカモ [35] ナイショク シテラッサル。
いつも 内職 しておられるそうだ。

97C : クジュサンヤ。
93[歳]だ。

98B : クジュサンカ。
93[歳]か。

99C : クジューサン。 (B ハーン) ウン
93[歳] (B ふうん) うん

09↑

— 中 略 —

100A：ホイテ ャッパリ コメデモ カズイテヤハッタカ°。

そして やはり 米でも 背負っておられたが。

[↑10]

イチニチニ イッショケンメー カズエテ ニジュナンカイガ°

1日に 一生懸命 背負って 20何回が

ソレガ° デカイ。 デ ウチノ ハハオヤ チューモンナ

それで 多い。 × うちの 母親 という者は

コンド ジー ヨメンモンジャカラ (B ウン)

こちら[は] 字[が] 読めないものだから (B うん)

コンカク°ライ カズクヨーニ ナッタサイノ

粉糠など 背負うように なつたら

ワカイ ヒトラチ オモシロカ°ッテ。 (B フン {笑})

若い 人たち[が] おもしろがって。 (B ふん {笑})

カンカンニ ヒョーニ シトクカ°ヤチャ。 (B フン)

固く 俵に しておくのだよ。 (B ふん)

ソイタサイナ チーサイモンジャデ

そうすると 小さいものだから

カルイモンジャ トオモーテ カズイテイクカ°イ。

軽いものだ と思って 背負って行くのだ。

富山 10-2

ワカイシュ コメ カズイテイクガ° ミツテ
若い衆[は] 米 背負って行くの[を] 見ていて

ヤ アレ ダレ カズイテイッタ。
あ あれ だれ[が] 背負って行った。

Aノ オババ カズイテイッタ。
Aの おばあさん[が] 背負って行った。

アン ジブンナ カーカ[36]ヤワ。 カーカ カズイテイッタ。
あの 頃は 主婦だよ。 主婦[が] 背負って行った。

ワカイ ヒトラチャ ンナ ジ ヨメルモンジャサカエデ
若い 人々 みんな 字[が] 読めるものだから

コンド メカ°タ ミテカッテ
これは 目方[を] 見て

ヒョー デカイヨーニ アッテデモ
僕[は] 大きいようで あっても

コンカナラ ヤコイ ヒョーニ シトキヤ
粉糖なら 柔らかい 依に しておけば

アノ オーキー モンジャケデ ソルオ カズイテイッテ。
あの 大きい ものだから それを 背負って行って。

イマノ X11ツアノカ°トカ
今の X11さんのとか

富山 10-3

アノ ヒトラチャ シーナ ミトッテ。
あの 人々 みんな 見ていて。

ヨ X3サン イッテ ンマ ツコトッタラ
よく X3さん[に] 行って 馬[を] 使っていたら

ソンナ ハナシ シテハッタカ。
そのような 話[を] しておられたのだよ。

Aノ オマエ カ一カ イマデ ューヤ バーバヤレド
Aの あなた 主婦 今で 言えば おばあさんであるけれど

オマエ バーバ イチバン オボタイ エシ
あなた おばあさん[が] いちばん 重い 石

カズイティッタモンジャ。
背負って行ったものだ。

ジー ヨメンケデ {笑} (B オボタイカ)
字[が] 読めないので {笑} (B 重いか)

ソ一 ユーテ ワロトッタ。
そう 言って 笑っていた。

101B : アー ムカシノ ソーユー アノー ポッカ シテラッシャッタ
ああ 昔の そのような あの 荷負人 しておられた

ヒトラチャ ゾ カラダ キツツイモンジャネー。 エン。
人々 × 体[が] 堅固なものだね。 うん

富山 10-4

102A : アノヒトア マー ハジメテ ゴトビヨ カズイトキヤ
あの人が まあ 初めて 5 斗俵 背負った時は

ジューシノ トクヤチャ。 (B アー) ソルデ オンナデ。
14[歳]の 時だよ。 (B ああ) それに 女で。

103B : ハーン イマノ ジューシノ コドンダチニ
そう 今の 14[歳]の 子どもたちに

ソンナモン モッタケ[°] ユーテデモ
そんな[重い]もの 持ち上げろ [と]言っても

アホラシカ[°]ッテ ニケ[°]テイクリ。
ばかばかしいと思って 逃げていくよ。

104A : ソイテ ハハオヤ イマノ コメヨリ カルイチャ、 ネ。
それで 母親 今の 米より 軽いよ、 ネ。

ゴトービヨヤ ユーテモ シトーゴショホドモ メカ[°]タ
5 斗俵だ [と]言っても 4 斗 5 升ほども 目方[が]

アッタモンカネ。
あったものかね。

105B : カンソーモ ノルカッタ[37]カ[°]デナイカ。
乾燥も 十分でなかったのではないか。

106A : ソルデ オラチャノ バーサンカ[°] アントクニ
それで 私たちの おばあさんが あの時に

富山 10-5

X12ハンエ ネン[38] ハカルカ[°]デ。
X12さんへ 年貢米[を] 納めるので。

X12ハン X13ツア X13ツア ユートッタモン。
X12さん[を] X13さん X13さん [と]言っていた。

107B : ウン X13ツア ユータ。
そう X13さん [と]言った。

108A : アコノ モンノ ウシロエ ハイルマデ
あそこの 門の 後ろに 入るまで

タチッテ[39] ミトッタ。
立って 見ていた。

モト チューザイショノ アコニ。
元[の] 駐在所の[あった] あそこに。

ミヤカ[°]ワノ アコニ ウチ アッタモンヤチ。
宮川の あそこに 家[が] あったものだ。

X14 チューモンナ。 アコエ ハイルマデ ミトッタ
X14 というものは。 あそこへ 入るまで 見ていた

ユワハッタ。 (B ハア) ソシテ
[と]言われた。 (B はあ) そして

カズクネニ キツカッタデスゾ。 (B ウン)
[荷を]背負うのに 強かったですよ。 (B うん)

ナン トシ アトカラ トシエッテ。
まあ 年 後から 年取って。

アルデ オラ アノ X3サン オボイタクヤガ[°]。
あれで 私 あの X3さん[を] 知ったときだが。

ニジューヨンカンノ ネエシデモ
24貫の 根石でも

ヤッパリ ンナ カズイテ モッティカサルシ。
やはり みんな 背負って 持っていかれるし。

X15サン オナイトシヤッタレド
X15さん[と] 同輩であったけれど

[10↑11]

オラト フタルシテ ドカタボ^ー[40]デ アノ オラ
私と ふたりで 土方棒で あの 私[は]

ズーット アノ トンボ^[41] カタンデ^[42]
ずっと 棒の 先端[のほうを] 肩にかついで

アノ ヒト ウシロ カタンデ。
あの 人[は] 後ろ[を] 肩にかついで。

オラ ナン ヒトリデ アンナモン カズケンコトイ
私 まあ ひとりで あんな[重い]もの 背負えないな

ユーテ ユワハッタコトエ。
と 言われたね。

富山 11-2

- 109B : ウチラ ソンナコト スル カイショ ナイモンデ
私たち そんなこと[を] する 甲斐性[が] ないものだから
- シテミタ コトモ ナシ スルモンジャト オモイモ セント
してみた ことも ないし するものだと 思いも せずに
- ア アバイクサッテ ヒク[。]ラシ シトッタケデ
× 甘えてしまって 日暮らし していたから
- コノ オッサンダチノ ユワシャルカ[。] キートッタカチャ
この おじさんたちの 言われるの[を] 聞いていると
- ナン キノドクデ キートレンモンジャチャ。
どうも 気の毒で 聞いておられないね。
- チッチャイ ジューニサンノ ジブンカラ
小さい 12,3[歳]の 頃から
- ハヤ ナナヤツツノ ジブンカラ
はや 7、8歳の 頃から
- ハタラク ハタライテヤサッタモンデ。 ウン。
働く 働いておられたものだから。 うん。
- 110A : マー ハナシ ヨコノ ホーエ イケド
まあ 話[は] 横の ほうに 行くけれど
- オラ アンタ クリカラノ トーケ[。] イッテ。
私 あなた 倶利伽羅の 峠[に] 行って。

イマノ トーケ[°]ワ イマカラ ミリヤ
今の 峠は 今から すると

ジューイチメータ ヒクカッタモンチ。 ア タカカッタモンチ。
11メートル 低かったのだ。 いや 高かったのだ。

ソン トクニ トーケ[°] コエテ アカ[°]ルガ[°]
その ときに 峠[を] 越えて 上がるのに

イスルキ[°][43]カラ ソノ トーケ[°] アカ[°]ルマデ
石動から その 峠[に] 上がるまで

ベツニ コンド ツナビキ チューモンナ オッタモン。
別に 今度 綱引き というものが いたもの。

(B ウン ソヤ ソヤ) アッチャ
(B うん そう そう) あちらは

コンド カネザワノ ホーカラ クル トキヤ アノ アッチャノ
これは 金沢の ほうから 来る 時は あの あちらの

タケノハシ[44]カ。
竹の橋かな。

アッチャカラ マタ アカ[°]ッテクル モン オッテ。
あっちから また 上がってくる 者[が] いて。

ソイテ イチダイノ クルマ シチニンカラ ハチニンシテ
そして 1台の 車[を] 7人から 8人で

ヒッパッテ アカ°ッタ。 (B ハーン)
引っぱって 上がった。 (B ふうん)

ホンノ シバラク。 (B フーン)
ほんの しばらく。 (B ふうん)

ソシテ オラニ オイ A アン キョー オマエ
そうして 私に おい A あの 今日 おまえ

ヨシエマデ イッテ。 アシタヤッタワ。 アシタ
吉江まで 行って。 明日だったわ。 明日

イスルキ°マデ オマエ ツナビキ シテクレ ユーテ。
石動まで おまえ 綱引き してくれ [と]言って。

ソシテ イッタラ ツナビキスル モンカ° タラン
そして 行ったら 綱引きする 者が 足りない

ユーテ (B ホーン) デマチカラ アノ X16ト
[と]言って (B ふうん) 出町から あの X16と

ソルト X17カ° ジドーシャ ナイ ジブ。
それに X17が[行った] 自動車[の] ない 頃[に]。

111B : ソコエ ャッパリ ツナビキニ テッダイニ デル ヒト
そこへ やはり 綱引きに 手伝いに 出る 人

マタ ショーバイニ デトルカ°カ。
また 商売に 出ているのか。

富山 11-5

112A : イ ソル ショーバイニ。 ソノ ヒトラチャ
× それ[を] 商売に[して]。 その 人たちは

ソコバッカリ アカ° アカ°ル ウチニダケニ。
そこばかり ×× 上がる 間だけ。

113B : ダケノカ°ニ ソコエ デテヤカ°ヤ。
[それ]だけのことに そこに 出ていらっしゃるんだ。

114A : ウン デトルカ°イ。 ゴニンナリ ロクニンナリ チュー。
そう 出ているの。 5人なり 6人なり という。

タイマー ジューニング°ライ オッタラシイ
たいてい 10人くらい いたらしい。

クルマ ニダイ イキヤ
車 2台 引くと

ハヤ ジューニン イルモンジャケデ。 (B ウン)
もう 10人 必要であるものだから。 (B うん)

115B : アノ ンナラ X18。 X19カ。 X18カネ。
あの そななら X18[か]。 X19か。 X18かね。

(A アン X19 ウン) アノ カナザワ ナカズカイヤ
(A あん X19 うん) あの 金沢 仲使いだ

ユータッタカ° アッタナイケ。
[と]言っておられたの[が] あったじゃないか。

富山 11-6

116A : ウン X19ノ コノ キンネン シナサッタ ジーサン。
そう X19の この 最近 亡くなった おじいさん

アン ヒトワ ソン トキ ショーガ[°]ッコ オワットッテ。
あの 人は その 時 小学校[を] 終えていて。

(B フン)

(B ふん)

ソシテ カナザワマデ ヒッパッティットッタ。
そして 金沢まで [車を]引っぱっていっていた。

ウチノ トナリノ オッサンノカ[°]。
私の 隣の おじさんの[を]。

アン ジブンナ カナザワ ナカズカイ シテヤハッテ。
あの 頃は 金沢 仲使い していたので。

117B : アノ ジブンナ コーツーキカンナ ソーユーコトヤシ。
あの 頃は 交通機関は そういうことだし。

イマナラ ジドーシャデ シューット モッティカッサレド。
今なら 自動車で しゅっと 持っていかれるけれど。

ドンナ タカイ トコデモ サカニ ナットル トコデモ
どんな 高い ところでも 坂に なっている ところでも

スーイ イカシャル。 ムカシア タイソシタ[45]モンヤチャ。
ずっと 行かれる。 昔は 苦労したものだよ。

11↑

富山県砺波市1981注記

[1] カ°

準体助詞。この場合は、弁当を指す。

[2] ケデ

理由を表す接続助詞。

[3] ケナルーナル

うらやましくなる。「ケナルイ」は「うらやましい」。

[4] タバコ

間食すること。休憩して、食事を取ること。

[5] ムラサキ

醤油。

[6] エカ

イカ。鳥賊。しばしば「イ」が「エ」に近い音になる。

[7] ズリ

そり。雪の上で、荷を運ぶ道具。

[8] フカエ

地名。富山県砺波市深江。話者A氏の家から2km程度の距離。

[9] イトモナライデ

痛くもならないで。「なる」が続く時に、形容詞連用形がウ音便化する。

共通語の「ならないで」は、「ナライデ」と言う。

[10] イモノテテ

いもがしら。サトイモの親芋。サトイモの根のうちで一番大きい部分で、
まわりに子芋がつく。

[11] ユワハッタ

「言った」の尊敬語。「ユワッシャッタ」とも言う。

[12] ヤメ

「ヤメク」と言いかけてやめたと思われる。「ヤメク」は「叱る」。

[13] シッキラ

好き嫌い。

- [14] ポー
葉柄。葉の一部で、葉を支えて枝や茎につける、柄のように細くなった部分。
- [15] アンカ
長兄。一般に、自家・他家の区別なく用いる。
- [16] スインニ
新たに。同じ「スイン」で、「すぐに」「即座に」の意の語もある。
- [17] メズラッシー
珍しい。方言として、促音になる語が多い。
- [18] ショムナイ
おいしくない。
- [19] ドコタラデ
どこかで。どこやらで。
- [20] ハシカカ[°]ランヨーナ
のどにひっかかるような。
- [21] ヨコ[°]イ
イク[°]イ。あくが強くて、のどを刺激するような味や感じがする。えぐい。
- [22] カヤイテ
ひっくり返して。サ行五段活用動詞「カヤス」の連用形のイ音便形。
- [23] ヨー
「よく」のウ音便。
- [24] タカノス
地名。富山県砺波市鷹栖。収録地点。
- [25] アブラ
菜種油をしぶることを指している。
- [26] チューイッセン
中越線。高岡～城端間を結んでいた、民間鉄道会社の中越鉄道の路線。1920(大正9)年に国鉄城端線となった。
- [27] ト タテラレタ
「ト タテル」は「扉を閉める」。

- [28] ノーカ
地名。富山県砺波市苗加。収録地点の隣の地区。
- [29] ハヤラト
早く。
- [30] ナンノシェ
ともかく。いずれにせよ。
- [31] オヤトモテ オモトッタ
おやつと思っていた。「～トモテ」は、引用の「と」にあたる。
- [32] チューエツインサツ
中越印刷株式会社。
- [33] ボッカ
荷負人。「物荷」が語源か。
- [34] ソクサーイ
「ソクサイ」は、健康であること。息災。
- [35] イツンカモ
いつも。いつでも。
- [36] カーカ
主婦。おかみさん。また、子どもの母親を呼ぶ時にも使った。
- [37] ノルカッタ
十分でなかつた。のろかった。
- [38] ネン
年貢米。小作者が地主に納める米。
- [39] タチッテ
立って。
- [40] ドカタボー
土方棒。土木工事の仕事で、もっこに土を入れて二人でかつぐ時に使う、てんびん棒の少し長いもの。
- [41] トンボ
先端。

[42] カタンデ

「カタグ」は、「肩にかつぐ」。

[43] イスルキ[。]

地名。富山県小矢部市石動町。小矢部市の市街地。収録地点から6.5km程度の距離。

[44] タケノハシ

地名。石川県河北郡津幡町竹橋。石川県側の俱利伽羅^{くりから}峠に登る山麓にある。
旧・北国街道に面している。

[45] タイソシタ

苦労した。難儀した。

II. 石川県羽咋郡押水町
1977

石川県羽咋郡押水町



石川県羽咋郡押水町1977話者・担当者

「各地方言収集緊急調査」

話者	川場 よね
	塩田 義雄
	山本 利勝
収録担当者	塩田 義雄
文字化担当者	岩井 隆盛
共通語訳担当者	岩井 隆盛
解説担当者	岩井 隆盛
	塩田 義雄

(敬称略　項目別50音順)

「全国方言談話データベース」

編集担当者	佐藤 亮一
	江川 清
	田原 広史
	井上 文子
編集協力者	篠田 留知亞
	加藤 和夫
	井上 優
	鳥谷 善史
	熊谷 康雄

石川県羽咋郡押水町1977解説

収録地点名

いしかわけん はくいぐんおしみずまちあさほうだつ
石川県羽咋郡押水町字宝達

収録地点の概観

位置

押水町は、石川県の中央部、能登半島の付け根に位置する。東は宝達山を隔てて富山県西礪波郡福岡町に、南は石川県河北郡津幡町および高松町に、北は石川県羽咋郡志雄町に、西は日本海に面している。

収録地点の宝達は、押水町の東部にある。

交通

国鉄金沢駅から七尾線で約50分で宝達駅に至る。宝達駅周辺が押水町の中心地である。宝達駅前から押水町内には国鉄バスが運行している。駅から約400m西方に国道159号線が南北に通じて、北陸鉄道の定期バスが走っている。このバスを利用すれば、金沢市にも、七尾市にも約1時間で達する。

地勢

押水町の中央部は平野部で水田地帯である。東側は宝達山（標高637m）などの山が重なり、この山系に源を発する4河川は、平野部を流れて日本海に注いでいる。西側は日本海に面して砂丘地となっている。

収録地点の宝達は、東、南、北の三方が山に囲まれ、宝達山麓の谷間、宝達川の上流に発達した集落である。夏は涼しく、冬は積雪量が多い。

行政区画

1954(昭和29)年11月3日、北大海村、中荘村、北荘村、末森村、柏崎村の5か村が合併して押水町が誕生した。宝達は、はじめ北荘村に属し、押水町の誕生とともに押水町の大字となった。

戸数・人口

1978(昭和53)年1月現在、押水町は、世帯数2,146戸、人口9,379人、宝達は、世帯数75戸、人口333人である。

産業

江戸時代には、米作、養蚕などが盛んであり、海岸地帯では沿岸漁業が盛ん

であった。宝達山には加賀藩直轄の宝達金山があつて、多量の金を産出した。

現在、押水町は、米作や、ブドウ、花木、杉苗などの出荷が盛んである。沿岸漁業もわずかながらおこなわれている。織物工業では、県下有数の地である。

宝達では、米、林産物のほか、以前からの特産物として、宝達葛や山芋（自然薯）がある。会社に勤める人の数も増加している。

収録地点の方言の特色

方言区画上の位置・隣接諸方言との関係

石川県の方言は、北陸方言に属する。石川県は能登地方と加賀地方に分けられるが、石川方言は、アクセントなどから、金沢市内を流れる犀川付近を境として二分するのが妥当なようである。

収録地点の押水町字宝達の方言は、能登方言の中の口能登方言に属すると言つてよいが、加賀方言に通ずる点も多い。くらのと

音韻

(1) イ段音がエ段音に近く発音されることがある。

エッパイ (いっぱい)

ゲンエン (原因)

エツネン (1年)

キセンモン (寄進物)

ジョーズネ (上手に)

(2) ウ段音とオ段音の混同が聞かれる。

オサキ° (うさぎ)

デンヨ° (天狗)

モコサマ (むこさん)

ドーム (どうも)

シユーダイ (招待)

(3) 「シ」と「ス」、「チ」と「ツ」、「ジ」と「ズ」が混同される、いわゆるズーズー弁がある。

トス (年)

アス (足)

ススマイ (獅子舞)

ツカラ (力)

ツーサイ (小さい)

カタツ (形)

ズブン (自分)

ワラズ (わらじ)

ハズメ (始め)

ズメン (地面)

マズッテ (まじって)

シキ (好き)

シミドラ (炭俵)

ヌシマレタ (盗まれた)

- (4) 共通語の「セ」「ゼ」が「シェ」「ジェ」と発音されることがある。「シェ」がさらに「へ」となることもある。

シェワ, ヘワ (世話)

シェックワイ (石灰)

ジエンブ (全部)

マジエル (交ぜる)

ヘナカ (背中)

ヨヘル (寄せる)

- (5) 共通語の「ソ」が「ホ」に、「ヒ」が「シ」と発音されることがある。

ホノ (その)

ホコ (そこ)

ホシテ (そして)

ホーヤ (そうだ)

シト (人)

シッパル (引っぱる)

- (6) 語中のガ行音は、ほとんどがガ行鼻音になる。

オサキ[°]カ[°] (ウサギが)

スク[°]ニ (すぐに)

(7) 合拗音「クワ」「グワ」が聞かれる。

クワヤク (火薬)

クワジ (火事)

ソークワイ (総会)

セックワイ (石灰)

グワンタン (元旦)

(8) [awa] [uwa] が融合して, [a:] [wa:] となる。

ターラ ← タワラ (俵)

ワータ ← ウワダ (上田)

ワーノ ← ウワノ (上野)

(9) 摆音化が見られる。

トニニイク (取りに行く)

マツンノカ[。] (祭りの)

キンノキ (桐の木)

コドンドモ (子供たち)

(10) 「ン」に「ワ」の音で始まる助詞が続くと, 融合を起こして「ンナ」となる。

アンナモンナ ← アンナモンワ (あんなものは)

ソノテンナ (その点は)

コノヘンナ (このへんは)

シランナイ ← シランワイ (知らないよ)

コンナイ ← コンワイ (来ないよ)

アクセント・イントネーション

(1) 基本的には京阪式アクセントであるが, 部分的に京都と異なるアクセントも見られる。また, 隣接する富山方言とも異なる部分がある。

	押水	富山	京都	東京
飴が	アメカ [。]	アメカ [。]	アメカ [。]	アメカ [。]
水が	ミズカ [。]	ミズカ [。]	ミズカ [。]	ミズカ [。]
橋が	ハシカ [。]	ハシカ [。]	ハシカ [。]	ハシカ [。]
弦が	ツルカ [。]	ツルカ [。]	ツルカ [。]	ツルカ [。]

足が	アシカ°	アシカ°	アシカ°	アシカ°
犬が	イヌカ°	イヌカ°	イヌカ°	イヌカ°
肩が	カタカ°	カタカ°	カタカ°	カタカ°
雨が	アメカ°	アメカ°	アメカ°	アメカ°

(2) 文節末・文末に「うねり音調」が見られる。

文法

(1) ウ音便、イ音便が見られる。

ウトニタ（歌った）
ノニテ、ナニテ（なくて）
ホイタ（乾した）
ツブイトル（つぶしている）

(2) 形容詞に「ナル」(なる)がつく場合、次のような形になる。

アカナル、アコナル（赤くなる）
シロナル（白くなる）
アツナル（暑くなる）
サビシナル（さびしくなる）

(3) 断定辞は「ヤ」である。老年層は「ジャ」を用いることもある。

(4) 否定辞は「ン」、その過去形は「ナンダ」である。テ形や条件形に特殊な形が見られる。

イカン（行かない）
イカナンダ（行かなかった）
イカイデ、イカンデ（行かなくて）
イカンナラン、イカナナラン、イカニヤナラン
(行かなくてはならない)

(5) 「と言って」が「チューテ」、「テテ」、さらには「テ」と縮約する。

イクチューテ、イクテテ、イクテ（行くといって）

(6) 共通語の準体助詞「の」にあたる形は「カ°」である。

オラノカ°ヤ、オラカ°ヤ（私のだ）
「のだ」にあたる形も「カ°ヤ」「カ°イ（縮約形ケ°一）」となる。
イクカ°ヤ、イクカ°イ、イクケ°一（行くのだ）

ホンナカ[°]ヤ, ソンナカ[°]イ, ソンナケ[°]ニ (そうなのだ)

- (7) 命令表現には、①命令形と、②意志勧誘形が命令の意味で用いられるものがある。後者は前者よりもやわらかい命令を表す。前者は「マ」などの終助詞をつけて用いられることが多い。

①イケ (マ) (行け (よ))

ミー (マ) (見ろ (よ))

オキ (マ) (起きろ (よ))

②イコ (行け)

ミョ (見ろ)

オキョ (起きろ)

共通語の「なさい」「てください」にあたる形に特徴的な形が見られる。

イカンセ, イカンチエ (行きなされ)

イッテクサレ, イッテクサイ (行ってください)

- (8) よく用いられる終助詞として、「チャ」(強調), 「ワイ」(強調), 「カ」「ケ」(疑問)がある。

イクチャ (行くよ)

イクワイ (行くよ)

イクカ[°]ヤチャ (行くのだよ)

イクカ[°]ヤワイ (行くのだよ)

イクカ, イクケ (行くか)

特徴的な終助詞として「ゾケ」「ゾノ」「ワケ」「ゾネ」「ワネ」がある。

ヨイゾケ, ヨイゾノ (いいよ) <老年層>

ヨイゾネ (いいよ)

ヨイワケ, ヨイワノ (いいよ) <老年層>

ヨイワネ (いいよ)

- (9) 接続助詞には「サカイ」(理由), 「レド」(逆接), 「ケド」(逆接), 「ネド」(逆接, 否定辞につく場合)などがある。

イクサカイ (行くから)

アカイサカイ (赤いから)

ナツヤサカイ (夏だから)

ホヤレド（そうだけれど）
ホヤケド（そうだけれど）
イッタレド（行ったけれど）
イッタケド（行ったけれど）
ホンナレド（そうなのだけれど）
ホンナカ[。]ヤケド（そうなのだけれど）
イカネド（行かないけれど）
イカンケド（行かないけれど）

特徴的な接続助詞に「カチャ」（条件）がある。

ミタカチャ（見たとすると）
イッタカチャ（行ったとすると）

(10) 敬語には次のようなものがある。「テヤ」敬語が見られるのが特徴的である。

①オイデル（おられる）

オイデン（おられない）
オイデタ（おられた）
オイデナンダ（おられなかつた）

②オッテヤ（おられる）

オランジャ ← オランデヤ（おられない）
オッタッタ ← オッテヤッタ（おられた）
オランジャッタ ← オランデヤッタ（おられなかつた）

③オレル（おられる）

オレン（おられない）
オレタ（おられた）
オレナンダ（おられなかつた）

④オラシタ（おられた）

スワラシタ（座られた）

⑤オルマシタ（おられた）

スワルマシタ（座られた）

語彙

次のような特徴的な語彙が用いられる。

- アサキ[°]リ（早朝）
- オイソ（遠い所）
- オジ（次男以下の男子）
- コケ（茸）
- ダラ（馬鹿）
- チンマイダ（肩車）
- バンドリ（農作業用の雨具、蓑）
- アジナイ（おいしくない）
- オゾイ（粗末だ）
- オトマシイ（惜しい）
- モノイ（つらい）
- シミル（凍る）
- ネマル（座る）
- バッカイスル（世話する）
- チョッコ（少し）
- ヤモド（たくさん）
- トロッペ（始終）

(以上の解説は、基本的に、「各地方言収集緊急調査」当時の報告原稿による。)

石川県羽咋郡押水町1977凡例

談話資料は、方言談話音声、方言談話音声の文字化、方言談話の共通語訳から成る。CD-ROMには、ページ単位で切った方言談話音声を、CDには、方言談話音声全体を収録した。

文字化と共通語訳

方言談話音声の文字化はカタカナで表記し、方言談話の共通語訳は、漢字かなmajiriで表記した。方言談話音声の文字化と共通語訳とは、対照ができるよう、上下2段を1組として示した。上段が文字化、下段がその共通語訳である。

文字化については、表音的カタカナ表記を用いている。つまり、長音は「一」で示し、助詞「は」は「ワ」、助詞「を」は「オ」、助詞「へ」は「エ」と表記する。「カ°」「キ°」「ク°」「ケ°」「コ°」はガ行鼻濁音を表す。

また、分かち書き、句読点などは、便宜的なもので、厳密なものではない。「各地方言収集緊急調査」における、方言談話音声の文字化の方法は、後に掲げる「調査実施上の留意事項について」などに詳しく記されている。ただし、今回、「全国方言談話データベース」として公開するにあたり、文字化・共通語訳を整備する際には、当時のマニュアルにはとらわれず、読みやすさ、意味のとりやすさを優先して処理をした部分がある。

また、この文字化は、時間の流れを忠実に反映することを意図していない。したがって、発話の重なりや、複線的な会話の進行の構造が、文字化からは読み取れない。データを使用する際には、文字化・共通語訳を見るだけではなく、実際に、音声を聞いて判断していただきたい。

発話単位

ひとりの話者が続けて話している、話者が交替するまでの連続した発言を1発話とする。途中にあいづちが入る場合もある。

発話番号 <半角>

発話の通し番号を、各発話の話者記号の前に付した。

例：1A

話者記号 〈全角〉

話者、調査者など、談話の場にいる人物について、A, B, C, D, E, F, ……のように、アルファベットで示した。

例：1A

固有名詞

話者および一般の人名については、文字化・共通語訳の該当個所を、A, B, C, X1, X2, X3などのアルファベットに置き換えた。話者、調査者など、談話の場にいる人物については、A, B, C, D, E, F, ……のように示し、話題の中の第三者については、X1, X2, X3, ……のように示した。ただし、音声は、該当個所に加工をしなかった。

歴史上の人物や、有名人の人名については、記号に置き換えることはせず、個人名を出すことにした。また、会社名、店名、製品名などについても、発言されたとおりに記している。

地名については、そのまま扱うこととした。

記号

。 (句点) 〈全角〉

ポーズがあって、意味的にひとつのまとまりを持つ文と考えられる個所。

共通語訳については、実際の発話でポーズが置かれていないところでも、意味の取りやすさを優先して句点をつけた場合もある。

例：ソーデス ソーデス

 そうです。 そうです。

、 (読点) 〈全角〉

基本的に息をついた個所、または、ポーズのある個所。

共通語訳については、実際の発話でポーズが置かれていないところでも、意味の取りやすさを優先して読点をつけた場合もある。

また、文字化と対応しなくなっても、読みやすさを優先して、取り去った場合もある。

例：シ、ヤクショ

市役所

? 〈全角〉

上昇イントネーションと判断した個所。

例：アズケトイテ？

預けておいて？

() 〈全角〉

あいづち。ひとりの人が連續して話している時にさえぎったり、口をはさんだりした個所。

(A …… のように、開き括弧の次にあるアルファベットは、発言している話者を示す。() の閉じ括弧の直前の句読点は省略した。

なお、() 内のあいづちと、独立した発話扱いされているあいづち的発話との違いは必ずしも明確ではない。

例：(A アー ソーデスカ)

{ } 〈全角〉

笑、咳、咳払い、間、などの非言語音。

例：{笑}

{咳}

{手を叩く音}

× × × 〈全角〉

言い間違いや言い淀みなど。

例：ム ム ムツカシー

× × 難しい

* * * 〈全角〉

聞き取れない部分。

例：オチャズケノ*

お茶漬けの*

/// 〈全角〉

対応する共通語訳が不明な部分。

例：モーゼー／＼ モジナンデスナ、

／＼／＼／ 「文字」なんですね。

[] 〈全角〉

方言音声には出てこないが、共通語訳の際に補った部分。

例：ミカン ノセテ

みかん [を] 乗せて

= 〈全角〉

[] 内の=は、意味の説明や、意訳であることを示す。

例：イマ ュー

今 いう [=今話題にあがつた]

| | 〈全角〉

注意書きなど。

例：| Aに対して |

[] 〈全角〉

注記。方言形の意味・用法、特徴的音声などについて説明し、文字化・

共通語訳の後にまとめてある。[] 内の半角数字は、注記の番号を示す。

例：ホシツキサンノオモチ [1]

音声

CD-ROM には、冊子のページ単位で区切った方言音声の wave ファイルを収録している。冊子のページを pdf ファイルにしたものに、方言音声をリンクさせていて、各ページにある **再生** の部分をクリックすると、そのページの音声を聞くことができる。

CD には、談話全体の音声を収録している。以下にあげるように、適当な個所で、トラックに区切っている。

CD トラック番号

文字化・共通語訳のヘッダは、方言音声を収録した CD のトラック番号を示している。「石川12-1」は CD トラック番号が12で、その1ページ目ということである。「石川12-1」「石川12-2」……「石川12-5/13-1」……「石川22-5」のように表示される。

また、文字化・共通語訳部分には、CD のトラックの切れ目を表示した。矢印の部分がトラックの切れ目を表し、その両側の数字はトラック番号である。

[↑12], **[12↑13]**, …… **[21↑22]**, **[22↑]** のように表示される。

第10巻のCD（66分47秒）には、石川県羽咋郡押水町の談話、【冬の藁仕事、元服】の全体の音声を収録している。各トラックの開始ページ・行、終了ページ・行、時間は下記のとおりである。行は、文字化の行を表示した。

トラックNo.	開始ページ・行	終了ページ・行	時間:分:秒
12	p.108・ℓ.1	p.112・ℓ.7	0:01:57
13	p.112・ℓ.9	p.117・ℓ.13	0:02:00
14	p.117・ℓ.15	p.122・ℓ.19	0:02:04
15	p.123・ℓ.1	p.127・ℓ.15	0:02:00
16	p.127・ℓ.17	p.133・ℓ.1	0:02:11
17	p.133・ℓ.3	p.138・ℓ.7	0:01:58
18	p.138・ℓ.9	p.140・ℓ.3	0:01:05
19	p.140・ℓ.5	p.143・ℓ.15	0:02:12
20	p.143・ℓ.17	p.149・ℓ.15	0:02:09
21	p.149・ℓ.17	p.154・ℓ.3	0:02:01
22	p.154・ℓ.5	p.158・ℓ.3	0:01:49
計			0:21:26

石川県羽咋郡押水町1977談話

収録地点

いしかわけん はくいぐんおしみずまちあざほうだつ
石川県羽咋郡押水町字宝達

収録日時

1977(昭和52)年8月17日

収録場所

石川県羽咋郡押水町字宝達 話者C氏自宅

話題

冬の藁仕事、元服

話者

A	男	1900(明治33)年	(収録時77歳)	農業
B	女	1905(明治38)年	(収録時72歳)	農業
C	男	1905(明治38)年	(収録時72歳)	元・教員

収録時間 (CD) 21分26秒

【冬の藁仕事、元服】

話し手

- A 男 明治33年生 (収録時77歳)
B 女 明治38年生 (収録時72歳)
C 男 明治38年生 (収録時72歳) 司会者

1 C : エー キョア ドーモ アンタカ°タ ゴクロサンデス。
ええ 今日は どうも あなたがた ご苦労さまです。

↑12

エー イロイロト チョッコ ムカシノ コトヤ イマノ コトオ
ええ いろいろと 少し 昔の ことや 今の ことを

エー オタカ°イ カタリオーテミタラ ドーカ ト
ええ お互い 語り合ってみたら どうか と

オモウンデスカ°。

思うのですが。

エー ムカッシャ ヨー コノ フユニ ナルト アー
ええ 昔は よく この 冬に なると ああ

ワラシコ°トオ シタ モンジャカ°一 (A ウン)
藁仕事を した ものだが (A うん)

アンタラモ タブン ワラシコ°ト シタッタ[1] ロー ト
あなたがたも 多分 藤仕事[を] されただろう と

石川 12-2

オモーガ° ホイト ソノ ワラシコ° トオ シタ ハナシオ
思うが そうすると その 薫仕事を した 話を

シテモライタイ ト オモテー (A {笑}) オレン [2]。
してもらいたい と 思って (A {笑}) いるんだ。

2 A : アー ソーケ [3] (C ウン) ウン。
ああ そうですか (C うん) うん。

ヤー ムカシャ ワラシコ° トオ ウッタ
やあ 昔は 薫仕事を 打った

ミンナ ヨッテ シタネ ウン。
みんな 集まって したね うん。

アサキ° レ ハヨラト [4] ホノ オキテ
朝 早く その 起きて

ワラ スク° ッテ ソレオ ウッテ ホイテ ウン
薫[を] きれいにして それを 打って そして うん

ムカシャ アンタ クラブ [5] ミナ ヨッテ ホシテワ
昔は あなた クラブ [に] みんな 集まって そうしては

アー ワラシコ° トオ (C ウン) ウン シタモンジャ ウン。
ああ 薫仕事を (C うん) うん したものだ うん。

3 B : ネ オジジア ソノ ワラオネーエ [6] (A ウン)
ね おじいさんは その 薫をね (A うん)

石川 12-3

ムカスイアネーエ アノ トス[7]ノ ハジメニ
昔はね あの 年の 初めに

アノ ウスイ ウツブキニ シテネ
あの [藁打ち]臼[を] 下向きに してね

(A ハイ ハイ ウン)

(A はい はい うん)

オトッチャン[8] ホイテー ヨノ アケラン[9] マットッテ
おとうさん[=A] それで 夜が 明けるのを 待っていて

ミンナ カッチ カッチ カッチ カッチト (A {笑} ソヤ)
みんな カッチ カッチ カッチ カッチと (A {笑} そうだ)

ミンナシテ ワラ ウッタ モンヤネ。
みんなで 藤[を] 打った ものだね。

4 A : ホヤー (B ウン) トシノ ハズメノオー (B エー)
そうだ (B うん) 年の 初めの (B ええ)

シコ°トハジメデ。
仕事始めで。

5 B : シコ°トハズメデネー[10]。
仕事始めでね。

6 A : エ ホー ソヤ ソヤ ソヤ ソヤ。
ええ そう そうだ そうだ そうだ そうだ。

石川 12-4

7 B : ネー ウン {笑} (A ウン ソーユ ワケヤ)
ねえ うん {笑} (A うん そういう わけだ)

ソレア キマットッタイネ。 ウン。 {笑}
それは 決まっていたのよね。 うん。 {笑}

8 A : ホーヤ ホヤ。 マー アサ ハヨー
そうだ そうだ。 まあ 朝 早く

ムカシノ ゴジカ ロクジ シタウチャ
昔の 5時か 6時 したうちは

マダ ウスク[。]ラカッタヨーナ トキニ オキテワ
まだ 薄暗かったような 時に 起きては

アンデ ソノ トシノ マー ハジメテノ アンデ シコ[。]トヤ
あれで その 年の まあ 初めての あれが 仕事だ

シコ[。]トハジメヤッタンヤ。
仕事始めだったんだ。

9 B : ホンナンヤネ。 (A ウン ウン)
そうだね。 (A うん うん)

ホンデ オトッチャン イツネンジュー ハク一
それで おとうさん [=A] 1年中 履く

(A ウン) ワラジオー (A ホヤ)
(A うん) わらじを (A そうだ)

ミンナー (A ウン) ツクッタ モンジャイネ。
みんな (A うん) 作った もんだね。

10A : アーア ツクッタル ツクッタ。 (B ウン)
ああ 作った 作った。 (B うん)

イマミタイ アンタ[11] (B ウン) ホンナー ナンジャー
今のように あなた (B うん) そんな なんだ

ウー ハダスタッビヤ[12] ナイシ クツツア ナイシ。
うん 地下足袋は ないし 靴は ないし。

12↑13

11B : ドコナ (A ソヤロ) オト オトッチャン
どこの (A そうだろ) ×× おとうさん [=A]

ドコナ ウチ イッテモー アノ ニワ
どこの 家[へ] 行っても あの 玄関の土間[へ]

ハイッタラネー (A ウン) イマコサ ニワ
入ったらね (A うん) 今でこそ 土間[は]

ミンナ チーサイケド (A ウン) ミノ アキ
みんな 小さいけれど (A うん) ×× 秋[仕事を]

スルモンデ オーキカッタワネー。 (A ウン)
するので 大きかったね。 (A うん)

ホントキニ ミンナ アー ヒャク ヒャクゴジュート
その時に みんな ああ 100[足] 150[足]と

石川 13-2

シテ (A オー ホーヤー)
[わらじを]作って (A ああ そうだ)

ミンナ ミコ^トナニ (A ソーヤ ウン)
みんな 見事に (A そうだ うん)

ワラジ ツクッテ カザッテ アッタネ。
わらじ[を] 作って 飾って あったね。

12A : ホヤー シクナテモ ヤッパリ ヒヤクク^トライヤ
そうだ 少なくとも やっぱり 100[足]くらいは

モットラニヤ イチネン。
持つていなくては 1年[もたない]。

13B : シクナテ ヒヤクヤネー。
少なくとも 100[足]だね。

14A : ウン ウン ウン。 イチネンジュー ハカラニカ^トヤサ
うん うん うん。 一年中 ××××××

ハカンナランサカイ。
はかなくてはいけないから。

15B : ホシテ オンナ ドーヤッ チュータラネエエ (A ウン)
そして 女[は] どうか といったらね (A うん)

アシナカヤチャ[13]。 (A アー ハイ ハイ) オイネ。
足半草履だよ。 (A ああ はい はい) そうなのよ。

石川 13-3

タビヤ ナイシネー (A ウーン ウーン) アシナカオ
足袋は ないしね (A うん うん) 足半草履を

ツクッテ (A ウイ) タンボエ イクカ[。]ニー
作って (A うん) 田んぼへ 行くのに

(A ホーヤ ホーヤ) ャッパ ヒヤクモー {笑}
(A そうだ そうだ) やっぱり 100[足]も {笑}

アマリモ ツクラニヤ (A ウン)
以上も 作らなくては (A うん)

シコ[。]ト デキナンダワネ。
仕事[が] できなかつたわね。

16A : マー ソー ュー ワケヤ。 (B エー) オン。
まあ そう いう わけだ。 (B ええ) うん。

(B {笑})
(B {笑})

17B : ホシテ ワラジヤ ゾーリ ツクッタラ
そして わらじや 草履[を] 作つたら

コンド オトッチャン (A ウン ウン ウン)
次[は] おとうさん[=A] (A うん うん うん)

シェックワイ[14]ノ ターラ アムヤラ {笑}
石灰の 俵[を] 編んだり {笑}

石川 13-4

(A オー ホーヤ) アノ シミ ドラ[15] アムヤラ
(A おお そうだ) あの 炭俵[を] 編んだり

(A ウン ソヤ ソヤ) コンデ ムカシャ
(A うん そうだ そうだ) これで 以前は

ワラシコ°トネ アヘナカッタ[16]ネー。
藁仕事に 忙しかったね。

18A : アシェナイ[17] アシェナイ。 (B {笑})
忙しい 忙しい。 (B {笑})

ホンデー ヒトフユ アンター サンカ°ツノ ヤッパリー
それで ひと冬 あなた 3月の やっぱり

ナカゴ°ロマデー スーイスク°ト ミンナ ヨッテ
中頃まで よく みんな 集まって

セケンバナス スイースイ マー イッショケンメネ
世間話[を] しながら まあ 一生懸命に

ワラシコ°ト シタ モンジャ。 ウーン。
藁仕事[を] した ものだ。 うん。

19B : ホイテ オトッチャン アー オ オマ
そして おとうさん[=A] ああ × ××

バーチャンモ モ モ ソン トキヤ
おばあちゃん[=B]も × × その 時は

石川 13-5

バーチャンデ ナイカ[°]イチャ (A オー)
おばあちゃんで[は] ないのだけど (A うん)

ニヤーニヤ[18]モ コンカイネ ッテテ (A {笑})
おねえさん[=B]も 来なさいよ と (A {笑})

ユーテワー (A ホヤ) ホカノ ナヤ
言っては (A そうだ) よその 納屋[へ]

イッテワー (A オー) ホイテ オトコダチト
行ったりして (A うん) そして 男たちに

マズイッテ セケンバナスイ シテ (A ン ホヤ)
まじって 世間話[を] して (A うん そうだ)

ホイテ カカ[°]リ[19] アムヤラ (A ウン) ア ア
そして 薙製かがり[を] 編んだり (A うん) あ あ

ゾーリ ツクルヤラ タノンナカッタワネー。
草履[を] 作ったりして //なかつたわね。

20A : アノー アンター コノ シタニ
あのう あなた この 下[のほう]に

ホレ X1サンナ シェックワイ (B エー)
ほら X1さんが 石灰 (B ええ)

シェックワイ イシバイ ヤイテ ソノ ターラオー
石灰 石灰[を] 焼いて その 俵を

ムラムラノ トショリダチカラ ワカイモンカラ
村々の 老人たちや 若者など

ミンナ アンダエン チュンジヤ。
みんな 編んだ というのだ。

21B：ソンナカ。イネ[20]。
 そうなんだよね。

22A : シー キョーソーシテワ {笑}
うん 競争しては {笑}

23B : ホイデ ソン トキ キカイヤ ナイシ
そして その 時 機械では ないし

ミンナ ナワモ テニ ノータモンデスケ。一。
みんな 繩も 手で なったもんですよ。

24A : ソヤ ソヤ (B ウン) ソイガ[。]ヤ。
 そうだ そうだ (B うん) そうなんだよ。

13↑14

シマイネ アンター ワラスコ。トオーバッカリ
最後に[はね] あなた 薙仕事をばかり

ソーヤッテ ャットル モンジャカイ
そうして やっている ものだから

ケンノ ゴークア アンタ ウスー ナッテモテ
手の 皮が あなた 薄く なってしまって

石川 14-2

コノ ユビノ ココカ[。]ネ ワラエ コーユ イッショケンメ
この 指の ここがね 薫へ こういう 一所懸命

ワラ ツッタ ワラネ スレテ チカ[。] デルヨーナ
薫[を] つるした 薫に それで 血が 出るほどの

(B ウン) コーユー ウスーイヨニ

(B うん) こういう[ふうに] 薄く

カワカ[。] ン一 ヘッテムタモンジャ。
皮が うん すりへってしまったものだ。

25B : ホンナンヤネー。 (A ウン ウン)
そうだね。 (A うん うん)

ホイテ オトッチャン オンナヤッタラー ア
そして おとうさん[=A] 女だったら あ

ホソイカ[。]ニー ナワ ノーテ カカ[。]リモ アンダリ
細いのに 繩[を] なって かがりも 編んだり

(A ホーヤ) オト オトコダッチャ

(A そうだ) ×× 男たちは

オトッチャンチャ バンドリ[21]ヤロ
おとうさん[=A]たち[は] 薫製蓑でしょ

(A ホーヤ) {笑} ネー。

(A そうだ) {笑} ねえ。

石川14-3

26A : バンドリヤノ ホレカラ コノ ネゴダ[22] ウン。 (B エー)
藁製蓑だの それから この 藂製背負具 うん。 (B ええ)

エー モノオ カツク。 トキヌイ
ええ ものを かつぐ 時に

ヘナカ アテル ネゴダオ イロイロ ツクッタモンジャ。
背中[に] 当てる 背負具を いろいろ 作ったものだ。

27B : ホンナケ°一ネ。 (A ウーン) ホイテ イマ
そうだったよね。 (A うん) そして 今[も]

アンター (A ウン) ア オマ ミンナ アンター
あなた (A うん) × × × みんな あなた

ヤマエデモ ヤッパ キノ アノ ナワノホア
山へでも やっぱり 木の あの 繩のほうが

キオ オコシカ° ヨイシー (A ソヤ ソヤ)
木を 起こすの[には]は いいし (A そうだ そうだ)

アノ ビニルミタイモナネ一エ (A ウン ウン)
あの ビニールのようなものはね (A うん うん)

バーチャンカ°ネ一エ ヤマエ イッテネ (A ウン)
おばあちゃん[=B]がね 山へ 行ってね (A うん)

ククッテン オトッチャン (A ウン ウン)
括ったのよ おとうさん[=A] (A うん うん)

ソレオ シタカ[。]ンニ イッテ ソノー[。]
それを 下刈りに 行って その

ソレオ キリヤ イーカ[。]オネ (A ウン)
それを 切れば いいのにね (A うん)

ソレオ ワスレティネ (A ウン) ワスレタラネーエ
それを 忘れてしまって、 (A うん) 忘れたらね

クビ シメタミン ナッテ
首[を] 締めたみたいに なって

ソノ キー カレタゾネ。
その 木は 枯れてしまったよ。

28A : ウン ウン アレアネ。
 うん うん あれはね。

29B : アレア エダニ ククットカニヤ ダメナンヤゾネ ウン。
 あれは 枝に 括っておかないと だめなんだよね うん。

30A : ウン アレアー クサライデ。
 うん あれは 腐らないで。

31B : クサライデ。 (A ウン) アレダケ ダメヤワ
 腐らないで。 (A うん) あれだけ[は] だめだわ

ヤッパ ナワノ ホア イーゾイネ。
やっぽり 繩の ほうが いいよ。

32A : ウン ナワ イーンヤ エーンヤ。
うん 繩[が] いいんだ いいんだ。

33B : ウン。 イッペン ソンナニ オーテー (A ウン)
うん。 一度 そんな[目]に あって (A うん)

ア一 コレカラ コンナ コト
ああ これから こんな こと[は]

ヒントカンナラン トオモタデスワ。
しないようにしなければならない と思ったのですよ。

34A : ホシテカラー ソコア ヒヨータンミタイニー
それから そこは 瓢箪みたいに

フカーグ コンダー ビニールノ一
深く 今度は ビニールの

ソノ カ カラケ[°]タ トコカ[°] クイコンデー。
その × 縛った ところが くいこんで。

35B : クイコンデネー (A ン) カマ ミツケタトコデネー
くいこんでね (A うん) 鎌[を] 見つけたとしても

(A ン) カマニ キドデモ キラレンケ[°]イネ
(A うん) 鎌に 切ろうと思っても 切られないのよね

(A ウン) ウン。
(A うん) うん。

36A : ホイタラ ソコエ コンターア フイニ ナッタカチャ
そうすると そこへ 今度は 冬に なったとすると

ユキガ[。] ソノ キニ アタマエ ン一 ニ ツモッタカ[。]チャ
雪が その 木に 頭X ×× に 積もったんだ

ソノ ヒョータンミタイ トッカラ ソノ ピニールカ[。]
その 瓢箪みたい[な] ところから その ピニールが

カラケ[。]タッタ トコロカ[。] ソノ ホソイ モンジャサカ
縛り付けてあつた ところが その 細い もんだから

ポキント オレレンヤッテア。
ぽきんと 折れるんだって。

37B : ソーラシーデスナー。
そういうのですね。

38A : ウン アレア ヤッパ キー[。]
うん あれは やっぱり 気を

ツケンナランモンジャネ。
つけなくてはならないものだね。

39B : ヤッパ ククル トキニヤ
やっぱり 括る 時には

エダネ ククッタラ イーケ[。]イトイネ。 (A ハー ハー)
枝に 括つたら いいんだね。 (A はあ はあ)

40A : ソヤ ソヤ (B ウン) ンデ イマデモ一 ヤッパリ
そうだ そうだ (B うん) それで 今でも やっぱり

↑15

ソーユー モン ツコーテオレド ヨー イマジヤ
そういう もの[を] 使っているが まあ 今では

ソーユガ[°]オ ナンジヤ ケーケンシトッサカイ
そういうことを 何だ 経験しているから

タイガ[°]イ エダネ ン一 ツコ一ネ。
たいてい 枝に うん 使う[=する]ね。

41B : ウン ハズメ ヤッパネ (A ン) ハズマ ア ナン
うん 始め やっぱりね (A うん) ××× × ××

ハズマッタ トキニ ヤッパ
[使用の]始まった 時に[は] やっぱり

ソレ ワカラニ モンデネ {笑} (A ホヤ)
それ[が] わからない ものでね {笑} (A そうだ)

ホンナ メネ オータケ[°]ネ。 イマ
そんな 目に 会ったのだね。 今[は]

(A ウン ハカヤ) ワカッタノデ シエンケレド。
(A うん ×××) わかったので しないけれど。

42A : ウン ハカイクブンジヤ (B ウン エー) ヤッパ
うん 進むものだ (B うん ええ) やっぱり

ナワ ノーター マン イチバン イーワイ。
縄[を] なった[のが] まあ いちばん いいな。

43B : ヨイネ。 (A ウン) ヤッパ ナンデモ (A ウン)
いいね。 (A うん) やっぱり なんでも (A うん)

イッショヤ ムカスノ モンナ イーケ[°]イネ。 {笑}
同じだ 昔の ものは いいんだわ。 {笑}

(A {笑})

(A {笑})

44A : マー アンデ ヨブニ
まあ あれで よぶんに

45C : マー アンデ (B エー) ワラヤト ナンカ
まあ あれで (B ええ) 薫だと なにか

アタタカイヨナ キア スルワネ。
暖かいような 気が するよね。

ワラニ シタ モンナ。 (A アー ハイ)
薫で 作った ものは。 (A ああ はい)

ウン (A ホヤネ) ウン (A ウン)
うん (A そうだね) うん (A うん)

コー イマノ ハイカラナ ヤツア
こう 今の 上品な ものは

ナンカ ツメタイヨーナネー (A ウン ウン) エー。
なにか 冷たいようなね (A うん うん) ええ。

46A：ソリヤー ムカシ アンタ ホラ オッチャン
それは 昔[は] あなた、 それは おじさん[=A] [が]

ワカイ トキヤ アンタ フカク[°]ツ ツクッテ
若い 時は あなた、 深靴[=藁の長靴] [を] 作って

ワラノ フカク[°]ツ ホシテ コンター ナンヤッテア
藁の 深靴 そして 今度は 何だったかな

ヤマエ コンター オサキ[°] トルアネ (C ウン)
山へ[行って] 今度は ウサギ[を] 獲るのに (C うん)

{笑} モ ウサキ[°]ノ ワナ カケネ イッテワ (C ハ一)
{笑} × ウサギの 餌[を] かけに 行っては (C はあ)

{笑} イツイネンネ エッソクー フユノ ハズメニ ツクッタ
{笑} 1年に 1足 冬の 始めに 作った

フカク[°]ツヤ ヤレテシモ一ホド ヤマエ {笑}
深靴など 破れてしまうほど 山へ[行った] {笑}

シコ[°]トア ナイモンジャー (C ウン)
仕事が ないものだから (C うん)

コンタ アー ウサキ[°] トンネ エッタンヤ ウン。
今度はあの ウサギ[を] 獲りに 行ったのだ うん。

石川 15-4

アレオ ウッター ャッパー アブラケア ナケレド
あれを 撃った やっぱり 油つ気は ないけれど

アンデ ケッコー アッサリシテ ウマイモンヤ。
あれで けっこう あっさりして うまいものだよ。

47C : {笑} ウサキ°。

{笑} ウサギ。

48A : イマデア ハヤ ミンナ ハヤ。

今では もう みんな もう[食べない]。

ウン ゴツツオーヤ マ ホンナー。

うん ごちそうだ ま そんな。

49B : イマ ジシェツデネ (C ウーン)

今 [こんな]時代でね (C うん)

オジーチャン イマデア

おじいちゃん[=A] 今では

オサキ° タベル モンナ オランゾイネ。

ウサギ[を] 食べる 人は いないよ。

50A : オー ソーユ アンバイヤ。 (B {笑}) ウン。

ああ そういう 具合だ。 (B {笑}) うん。

トンニ イク モンモ ハヤ オラン アンバイヤ。

獲りに 行く 者も もう いない 具合だ。

51B：オランシ トッテキテモ タベンノヤ。
[獲る人が]いないし 獲って来ても 食べないのだ。

(A ウン) ウン。

(A うん) うん。

52A：ムカッシャ オマエ ソンナ。
昔は あなた そんな。

53B：ムカシャ ヨロコンデ タベタモンヤノニ。
昔は 喜んで 食べたものなのに。

54A：タベタトワ サーシタカチャ[23]
[それは]食べたけれど どうかすると

アンタ アノ ホネマデ タタイテ
あなた あの 骨まで たたいて

トリ[24]ノ ホネ (B {笑}) {笑}
ウサギの 骨[を食べた] (B {笑}) {笑}

ヤー イーヤ タベタゾ ウン。
いや いや[ほんとに] 食べたぞ うん。

15↑16

ヒョーノ ワタ ワラスゴ^ト ヒトフユカ^ダ
僕の ×× 薫仕事 ひと冬で

イツネンジューノ コンデ イル ブンノ
一年中の これで 要る 分を

コッシャエランヤサカイノ。 ウン。

作るのだからね。 うん。

55B：ホイテ オトッチャン ヒヤクモ

そして おとうさん[=A] 100[足]も

ツクッテオイテネ ワ ワラズ ハイテモテ

作っておいてね × わらじ[を] はいてしまって

タライデネ (A ウン) ス ツクラニヤ

足りなくてね (A うん) × 作らなくては

シコ°トネ イカレンシ (A ウン)

仕事に 行けないし (A うん)

ヨナベニ ヨー ツクッテ (A ウン)

夜なべで よく 作って (A うん)

デティッタ コト アルゾネ。 {笑}

[仕事に]出て行った こと[が] あるわ。 {笑}

56A：ウン ウン ウン。 ソンナエーテア (B ウン) ウン。

うん うん うん。 そんなことだよ (B うん) うん。

ミンナモ ホレ シェーネンダンノ トコエモ

みんなも ほら 青年団の ところへも

ワラズ ツクッテ ダサンナン。

わらじ[を] 作って 出さなくてはならない。

ワラズト ナワト ウン。

わらじと 縄と[を] うん。

57C : ホーヤワ アノ ン一 セーネンダンノ アレワー
そうだよ あの うん 青年団の あれ[=クラブ]は

(A ウン ウン) アノ ワラジ ツクッテ

(A うん うん) あの わらじ[を] 作って

ソノ オカネニ (B ホ オイ)

その お金で (B × はい)

タテタガ°ヤ ッチュニヤネー。

建てたのだ っていうんだね。

(B ウン ウン ウン) ウン。

(B うん うん うん) うん。

58A : ミナ アノ ジブンナ ホレ ソレ イマミタイ
みんな あの 頃は ほら それ 今みたい[に]

ゴムク°ツヤラ ハダスタッビヤ (C ウン) ナイ モンジャ
ゴム靴だの 地下足袋[は] (C うん) ない ものだから

ミンナ ワラジノ モンジャサカイ

すべて わらじの[=わらじをはく] 人だから

ワラディイヤ ヤッパ ミンナ ウレタワイネ。 ウン。

わらじは やはり みんな 売れたよね。 うん。

59B : ホンネイネ。 (A ウン)

 そうだったね。 (A うん)

60A : ヘーカラー ヤマノ キー オコッシア ナワ。

 それから 山の 木 [=倒木] 起こしは 繩 [だ]。

ナワ ドンダケ アッテモ タラナンダ ウン。

繩 [は] どれだけ あっても 足りなかつた うん。

ウマイコト ャッパリ ミナ アンデ ワカイシューナ

よく やっぱり みんな あれで 若い人たちは

コ一テクレタッタ? ウン。

 買ってくれたものだ うん。

61C : コノ ワカイ シュノー オー ツクッテ

 この 若い 人たちの ×× [わらじを]作つて [建てた]

ワシラモ マー ダイタケドモー (B ウン)

私たちも まあ [お金を]出したけれども (B うん)

アノ ワラジデ タテタ

あの わらじ [を売った金]で 建てた

アノ セーネンクラブアー (B ウン ウン)

あの 青年クラブは (B うん うん)

イマデモー ニッポンジューニ ヤカマシイ。

今でも 日本中で 名高い。

62A：ア一 ホーカネー？ (C ウン) オ一。
ああ そうですかね？ (C うん) ほう。

63C：ホイデエー コナイダアー (B ウン)
それで この間 (B うん)

ノ ノトセーネンノイエノ ショチョーサンカ° キテー (B ウン)
× 能登青年の家の 所長さんが 来て (B うん)

ホイテー ューテオクレタカ°ー
そして 言ってくださったが

ソレア イマ テッキンコンクリヤー アルイワ リッパナモンア
それは 今 鉄筋コンクリートや あるいは 立派なものが

イクラデモ アレドモ (B ウン) ミンナ ホリ アノ
いくらでも あるが (B うん) すべて ほれ あの

ダンインカ°ー ソーユー キヨードーサキ°ヨー シテ
団員が そういう 共同作業[を] して

(B ウン) ツクッタ ッテユーモンデ ナイカ°デー
(B うん) 作った というもので ないので

(B ウン ソーヤ) ミンナ (B ウン)
(B うん そうだ) みんな (B うん)

ホジョキン モロタリー (B ウン ウン)
補助金[を] もらったり (B うん うん)

石川 16-6

ナンジャラ カンジャラデ キフ モロタリ シテー
あれや これやで 寄付[を] もらったり して

(B ウン) ヤッタ モンデー (A ソヤ)
(B うん) 作った もので (A そうだ)

アーユー ダンインダケデー ワラジ ツクッテー
あんな 団員だけで わらじ[を] 作って

アルイワ ナワ ヌーテー
あるいは 縄[を] なって

ソレデ タテタ ッチュノワー (B ウン ウン)
それで 建てた というの (B うん うん)

モー メズラシー ッテ。 (B ホヤ) ウン。
もう 珍しい と。 (B そうだ) うん。

デ コナイダ トーキョーノ ダイカ[°]クノー シェンシェノ
それで この間 東京の 大学の 先生の

カイタ ホンカ[°]ー (B ウン) デテー ホ ホ ホイデ
書いた 本が (B うん) 出て × × それで

コンナ スバラシーカ[°] アルカ ッチュテー
こんな すばらしいの[が] あるものか と言って

(B ウン) キテ ミリヤ
(B うん) 来て 見れば

ヒンジャクナ アー モンジャケドネ。 (B ウン ウン)
貧弱な ああ もんだけどね。 (B うん うん)

16↑17

ホノ マコ[°]コロノ コモッター (B ウン ウン)
その 真心の こもった (B うん うん)

ソーユモンデ タテタッチャー (B ウン)
そういうもので 建てたというのは (B うん)

マー ニッポンニワ メズラシー ト (B ウン)
まあ 日本では 珍しい と (B うん)

64B : ホーデスカー。

そうですか。

65C : エー。 ホイトユンデ ヒョーバン ナッテー
ええ。 そういうので 評判[に] なって

(B フン フン) オレン。
(B ふん ふん) いるのだ。

66A : ヒヤー アン ジブンナー ワカイシュモ ハリキッテー
××× あの 頃には 若い人たちも はりきって

ホヤッテー ナンジャ ホシテ イマジャアー
そして 何だ そして 今では

ムラノ コーミンカンニ ナッテモテー (C ウン ウン)
村の 公民館に なってしまって (C うん うん)

ウン。 ホイテ アンタ アルヤロー シュオー
うん。 そして あなた あるだろう ×××

コトニ シューゴ[。]ーシテワ (C ソヤー)
こと[あるごと]に 集合しては (C そうだ)

アッコー ツコテオッター (C ウン) ムラトシテ
あそこを 使っていて (C うん) 村として[は]

アンデ タイヘン アンデ ベンリヤ イーンヤッテア
あれで たいへん あれで 便利が いいのだって

ホヤ (C ホヤネー) ウン。 ホリヤー アンデ
そうだ (C そうだね) うん。 それは あれで

アノ トージノ シェーネンダンノ オッタ マー
あの 当時の 青年団に いた[人は] まあ

ミンナ タイソ[。] シタワ。 (C タイソ シタネー)
みんな 苦労[を] したわ。 (C 苦労[を] したね)

アンデー ホエー イマミタイ クワイシャ ツトメタリナンダリ
あれで ええ 今のように[に] 会社[に] 勤めたりなど

ソノ ジブンナ シュル モンナ オラン。
その 頃は する 者は いない。

ミンナ ウチニ オッテ {笑} オッテワ
みんな 家に いて {笑} いては

石川 17-3

(C ホヤ ホヤ ソー ソー ソー)

(C そうだ そうだ そう そう そう)

ヤマエ (C ウン) ハタラキネ イッタリ (C ウン)
山へ (C うん) 働きに 行ったり (C うん)

ウン イッシャマエ イッタリ (C ウン)
うん 石山[=石灰山]へ 行ったり (C うん)

ホイテ ジモトニ オッテ

そして 地元に いて

ソーユ シコ[°]ト シトッタモンジャワイ。
そういう 仕事[を] していたものだよ。

シェーネンダンモ ヤマホド オッタワイネ。
青年団も [人が]たくさん いたよ。

(C ウン オッタ オッタ) ウン ウン ウン。

(C うん いた いた) うん うん うん。

67C : やー ホントニ コノ ムカッシャ

やあ ほんとうに この 昔は

サカンニ ワラデ (A オー) アンデモ (B ウン)
さかんに 薫で (A うん) 編んでも (B うん)

シタモンヤワネー。 (B ホンナガ[°]デスネ)
したものだよね。 (B そうなのですね)

68A：アー シタ シタ ムシロモ オランナンスイ
ああ した した 篦も 織らなければならないし

(C ウーン ソヤ ソヤ) ウン。

(C うん そうだ そうだ) うん。

69B：オイネ。 (A {笑}) ムスイロ キレーニ オッタネー。
そうだね。 (A {笑}) 篦[を] きれいに 織ったね。

(C {笑}) (A オー ムシロー) イマコソ アンタ

(C {笑}) (A うん 篦) 今こそ あなた

タナ タタミノ ウエニネ (A {笑} ホーヤ)
×× 疊の 上にね (A {笑} そうだ)

ミンナ ネマットルケレドネー (A ウーン)
みんな 座っているけれどもね (A うん)

アン トキヤ アンタ ムスイロ オッテネー (A オー)
あの 時[=昔]は あなた 篦[を] 織ってね (A そう)

オショーカ°ツネー (A ホー ハー) ムシロ
お正月に (A そう はあ) 篦[を]

オッタカ°オ シータラ アー キレーナ (A オー)
織ったのを 敷いたら ああ きれいな (A うん)

アー タノシミナ テ ューテ (A ヤ ホーヤ)
ああ 気持ちがよい と 言って (A あ そうだ)

スワッタモンデスワネー アー。

座ったものですよね ええ。

(A ヤ ホーヤ オ ソヤ ソヤ ソヤ

(A ああ そうだ うん そうだ そうだ そうだ

ウン ムシロー ウーン) ホイデ ザブトンモ スイカント
うん 篠 ううん) それで ざぶとんも 敷かないで

ネマッタケレド ナーンモ オモワント。

座ったけれど 少しも [不自由など]思わないで。

イマ アンタ ザ タタミノ ウエニ ザブトン シーテ
今 あなた × 畳の 上に ざぶとん[を] 敷いて

マダ (A {笑}) アシャ イタイ

まだ (A {笑}) 足が 痛い[と言って]

(C {笑}) {笑} ューテマスケ°イネ。

(C {笑}) {笑} 言ってますよ。

(C ホントヤ) ネー ジセツデスネー。

(C ほんとうだ) ねえ 時代ですね。

70C : バーチャンナンカ ジョーズナンヤチャネー。 (B ャー)

おばあちゃんなんか 上手なんだよね。 (B いや)

アンタワ ジョーズナンヤチャ。

あなたは 上手なんだよ。

71B : ホンナコトア ナイデスニー。

そんなことは ないですよ。

(C オー コナイダモ ホンニ)

(C おお この間も ほんとうに)

ムスイロ オルカ[°]モ ヤッパ オソエテモロテ
筵[を] 織るのも やっぱり 教えてもらって

(C ンナ モー) オッタデスワー。

(C そんな もう) 織った[の]ですよ。

[17↑18]

72C : ミヤサマノーオ (B ハイ) アノ メク[°]ラニ ツルノニ
宮さま[=神社]の (B はい)あの まわりに 吊るのに

(B ハイ) コモオ (B ハイ) アンタ アンダンヤロネ
(B はい) 薦を (B はい) あなた 編んだんだよね

(B ハイ) ウーン (B {笑}) イヤー (A ホントヤ)
(B はい) うん (B {笑}) いや (A ほんとうだ)

マタタクマニ (B ハイ) ミシカイ ジカンニ
またたく間に (B はい) 短い 時間に

(B ハイ) ヨー アンナモンノ タクサン
(B はい) よく あんなもの[を] たくさん

ネロッタモンジャカ[°] (B ハー) ヤッパ
織ったものだよ (B はあ) やっぱり

ジョ ジョーズナンヤロネー。

×× 上手なんだろうね。

73B : クチョサンカ° アンデクレッテ ューマシタ[25]モンデー
区長さんが 編んでくれと おっしゃったもので

ナーン[26] ホンナ コト キレーニ デキンワニ
少しも そんな こと[は] 上手に できないよ

ツタラ (C ウン) ナーン オバチャン
と言つたら (C うん) いいや おばちゃん

トシカ° イッタサカイ アノ オサメニー アンデクレ
歳を とつたから あの [この世の]納めに 編んでくれ

ツテーテ (C {笑}) ューマシタモンデ (A {笑})
と言って (C {笑}) おっしゃったので、 (A {笑})

アラー ホンナラ (C ウーン)
あら それなら (C うん)

ゴエンナ ナケニヤネ (C ウン ウン) ホンナラ
ご縁が なかつたらね (C うん うん) それなら

オミヤサンノ ゴエン コトモ (C ウン) デキンワ
お宮さんの ご縁[の] ことも (C うん) できないわ

(C ウン ソヤ ソヤ) テユーテ
(C うん そうだ そうだ) と言って

ホイテ アマサシテ (C ウン) オモライシタデスワー
そして 編ませて (C うん) もらったのですよ

(C ウン ウン イヤー) エー。 (C ホントニ)
(C うん うん いやあ) ええ。 (C ほんとうに)

18↑

―― 中 略 ――

74C : エー コリヤ ドコノ ザイショ[27]デモ アッタ コトヤケドモ
ええ これは どこの 村でも あった ことだけど

↑19

イマワ アマリ ナイケレドモ アノ
今は あまり ないけれどあの

ゲンプートユーノカ° アッタカ°ヤカ° (A ウン ウン)
元服というのが あったのだが (A うん うん)

エー ヨボシオヤ[28]トカ (A ウン)
ええ 鳥帽子親とか (A うん)

ヨボシコ° [29]トカ (A ウン)
鳥帽子子とか (A うん)

オハク°ロオヤ[30]トカ (A ウン)
お歯黒親とか (A うん)

オハク°ロコ° [31]トカ (A ウン) カ°
お歯黒子とか (A うん) が

アッタカ[。]ヤ (A ウン) マー ホーダツニモ
あったのだ (A うん) まあ 宝達にも

コーエモンア アッタ ワケヤ (A ウン ソー ソー)
こういうものが あった わけだ (A うん そう そう)

エー。ミナ コレニ ツイテ チョッコ (A ウン)
ええ。みな これに ついて 少し (A うん)

アト ハナシ シテクダサイ。
あと 話[を] してください。

75A : ハイ {笑}
はい {笑}

ホヤネ マー サイキンナ ナイカ[。]ニナッタレド
そうだね まあ 最近は なくなつたけれど

ムカシ ワレワレノ ジブンニ アー ズイブン コンデ
昔 われわれの [若い]頃に ああ 随分 これで

シェーダイナネ ウーン シキオ シタモンジャネ。 (C ウン)
盛大なね うん 式を したものだね。 (C うん)

ホンデ イチバンネ ホレ オヤネ ナッテモロタ ヒトニ
それで いちばんに ほら 親に なつてもらった 人に

トコニ コドモ コドモカ[。] イッテー
所に 子ども 子どもが 行って

デ ソコデ オヤネ ヨ ウーン ゴツツオネ ヨバレテ [32]
で そこで 親に × うん ごちそうに なつて

コレデ キネンヒン モロテ ホシテ マー ウチエ カエッテ
これで 記念品[を] もらつて そうして まあ 家へ 帰つて

ホイカラー ショーカ[。]ツ コンタワ コドモカ[。]
それから 正月[になると] 今度は 子どもが

コンタ オヤオ オ エー ウー ネ キテモッテー
今度は 親を × ええ うん に 来てもらつて

イワイノ マー オサケオ ノンデモローカ[。]ヤッタネ バーチャン。
祝いの まあ お酒を 飲んでもらうのだったね おばあさん。

76B : ウン ホンナヤッタネ。
うん そんなでしたね。

77A : ウン ウン。 ホシテ ホントッキヤ コンタ コドモノ ホア
うん うん。 そして その時は 今度は 子どもの ほうが

コンタ ウー ナンヤッタヤ シンシェキオ タクサン ア
今度は うん 何だったか 親戚を たくさん ×

フキンノ アタシノ マ アー ヒトニ キテモッタリ
付近の あたりの ま ああ 人に 来てもらつたり

ヨーワ シンシェキノ ヒトラト ヨボッテ マー ニキ[。]ヤカナ
要は 親戚の 人たちを 招いて まあ にぎやかな

オー ホイテ アンター リヨーリニン イレテ
おお そして あなた 料理人[を] 入れて

オー ゴチソーオ コッシャエテ
おお ごちそうを 作って

アー シェーダイナ モンジャッタ アー。
ああ 盛大な ものだった ああ。

ホントネ アー シェーダイナ アー
ほんとうに ああ 盛大な ああ

オヤト コノ エンオ ムスンデ
親と 子の 縁を 結んで

ホノ オタカ[。]イニ シヌマデ マー エー
その お互いに 死ぬまで まあ ええ

チカラオ アワイテ キョーリョクオ スル ト ュー コトネ
力を 合わせて 協力を する と いう ことに

アンデ ケッキョクワ ナ ナランヤロネー ウン イミカ[。]
あれで 結局は × なるのだろうね うん [その]意味が。

19↑20

78B : シンルイカ[。]ネー (A ウン)
親類[のつながり]がね (A うん)

アノ ウシナッタラネー (A アー) ア マタ イッカイ
あの 薄くなったらね (A ああ) × また 1回[縁を結び]

オ (A オー) ウシナルサカイニー

× (A ああ) 薄くなるから

(A オ ソヤ ソヤ) テテ ューテ

(A うん そうだ そうだ) と 言って

ウシナッタラ カナラズ (A ウン)

薄くなったら 必ず (A うん)

オヤコニ ナッタモンデスワ

親子に なったものですよ

(A オー ホヤ ホヤ ホヤ ウン) エー。

(A ああ そうだ そうだ そうだ うん) ええ。

79A : ウン シンシェキオネ。

うん 親戚をね。

80B : エー。 (A ウン) オハク[°]ロオヤデモ (A ウン)

ええ。 (A うん) [女の場合は]お歯黒親でも (A うん)

ヤッパ ソノ トーリデー (A ウン)

やはり その とおりで (A うん)

アー モ シンルイヤ ウシナルケ[°]イノ[33] (A ウン)

ああ × 親類が 薄くなってしまうよ (A うん)

アノ ニヤーニヤ コンカイネ

あの おねえさん[=B] [私の子に]来ないか

石川 20-3

キテクサンチマン[34] テテ ューテネー (A ホヤ)
来てくださいよ と 言ってね (A そうだ)

ホシテ ナッタ モンデー (A ウン)
そして [子に]なった もので (A うん)

ホシテ オハク[。]ロオヤニ ナッ ア コ オヤ モッタラ
そして お歯黒親に ×× × × 親[を] 持つたら

オヤカ[。]ネ (A ウン) ソノ オイワイト
親がね (A うん) その お祝いと[言って]

ヤッパ コントア アノ クロマメノネー (A ウン)
やっぱり 今度は あの 黒豆のね (A うん)

シェキハンノネ? (A オー) クレテノモンジャワネ
赤飯をね (A ああ) くれたもんだよ

(A ホリヤ ソイカ[。]ヤ) エー (A エー ミンナワ)
(A それは そんなのだ) ええ (A ええ みんなは)

ソーユー イワレヤワネ (A ウン)
そういう わけだよ (A うん)

ヨメ トッタラ アカイガ[。]ヤケド (A ウン)
嫁[を] とったら [祝いは]赤いのだが (A うん)

オハク[。]ロオヤ クロインヤネ
お歯黒親[の時は] 黒いのだね

石川 20-4

(A オー ホヤ ウー ウン) ウン クロマメノネー。 ホエ
(A ああ そうだ うん うん) うん 黒豆のね。 ××

81C : オトコワ コレア ヨボシオヤ (A ウン) (B エー)
男[の場合]は これは 烏帽子親 (A うん) (B ええ)

ヨボシコ[°]ヤネ (B エー エー)
烏帽子子だね (B ええ ええ)

オンナカ[°] オハク[°]ロオヤ。
女[の場合]が お歯黒親。

82B : オンナカ[°] オハク[°]ロオヤデ オハク[°]ロデネー。
女[の場合]が お歯黒親で お歯黒で[歯を染めて]ね。

83A : ウン マー シンシェキオ コースル タメネ
うん まあ 親戚を 濃くする ために

オタカ[°]イネ ア マー イチダイカ[°] アイダ
お互いに × まあ 一代の 間

マ アー タス オタカ[°]イ タスケオ一 チューノー
ま ああ ×× お互い 助け合う というの

ホンデ イミナンヤロネー。
それで [そういう]意味なのだろうね。

マー ベツノ コト ュータラ
まあ 別の こと[を] いうと

石川 20-5

ムカシャ ホントネー ヤカマシー ュータ モンジャ アー
昔は ほんとうに うるさく いった ものだ ああ。

84B : シンルイカ[°] ウシナルサカイニ (A ウン)

親類が 薄くなるから (A うん)

ナッテクレ ッテ (A ウン)

[親子に]なってくれ と (A うん)

マ ミンナ オタカ[°]イニ (A ウン)

まあ みんな お互いに (A うん)

ア コーカオ ミンナ (A ウン) ア アツマッテ (A ウン)

× 好意を みんな (A うん) × 集って (A うん)

ソノ ウスナッタラ タイヘンヤ ッチュモンデ (A ウン)

その 薄くなったら たいへんだ というので (A うん)

ナカヨー シテ (A ウン)

仲よく して (A うん)

ヒク[°]ラシ[35] シタカ[°]デスネ。 (C ウン ウン) ウン

生活[を] したのですね。 (C うん うん) うん

85A : ソレカ[°]一 (B ウン) オ オヤオー コドモア ヨブ トッキヤ

それが (B うん) × 親を 子どもが 招く 時は

タイヘンナ ゴツツオ シタ モンジャ。

たいへんな ごちそうを した ものだ。

86B : ア ソリヤ ソーヤッタネー。

× それは そうでしたね。

87A : アー。 ホンデ ミンナ アンタ

ああ。 それで みんな あなた

モンノ ツイタ ハオリ ハカマデ。

紋の ついた 羽織[と] 袴で。

88B : ハオリ ハカマヤッタネー {笑}

羽織 袴だったね {笑}

89A : {笑} ホイテ アンタ ヨバレネ イッタ モンジャ

{笑} そして あなた お招きに 行った ものだ

(B エー) エー。

(B ええ) ええ。

90B : ハオリ ハカマヤッタネー エレタケ°ーンモンデネー。

羽織 袴だったね /// ものでね。

91A : ホーリヤ シェーダイ オー シェーダイナネ (B ウン)

それは 盛大[に] うん 盛大なね (B うん)

ウー ヤルカ° テカ°ラニ シトッタ ムカッシャ。

うん やるの[を] 自慢に していた 昔は。

92B : マン ジャイショカラ ジャイショヤ オヨメニ イッタラー

まあ [同じ]村から [同じ]村へ お嫁に 行くと

ホンナ コト ナ ヨケー ア アッタワ アッタケド
そんな こと[は] × 多くは × あったことは あったけれど

ヨ アノー シケナイデスケレドネー (A オー オー オー)
× あの 少ないですけれどね (A ああ ああ ああ)

タビカラ オヨメニ キタラ カナラズ アノ サビシーデショ
他所から お嫁に 来ると 必ず あの 淋しいでしょう

(A ソヤ ソヤ ウン) チカラネ ナル ヒトア
(A そうだ そうだ うん) 力に なる 人が

オイデンモンデ (A ホヤー)
いらっしゃらないもので (A そうだ)

ホンデ カナラズ オハク[。]ロオヤオー (A オー)
それで 必ず お歯黒親を (A うん)

モタイタッタワネ。
持たしてあったよね。

93A : アー ソーユ ワケヤ (B エー エー) ウン。
ああ そういう わけだ (B ええ ええ) うん。

[20↑21]

94B : ホシテ ソノ オヤカ[。] ドーヤイネ ドーヤイネ テーテ
そして その 親が どうだね どうだね と言って
(A ウン) カワイカ[。]ッテ (A ウン)
(A うん) かわいがって (A うん)

石川 21-2

オモライシタカ[°]デスネ ウン
いただいたのですよ うん。

95A：ホヤ。 オ オボンジャノー ウン オショーカ[°]ツニア
そうだ。 × お盆だの うん お正月には

コドモア コンタ ウン オヤノ ウツイエ アスンニ イッテ
子どもは 今度は うん 親の 家へ 遊びに 行って

イチニチカ[°]アイダ マー シェケンバナスイ シテワ
1日の間[=一日中] まあ 世間話 しては

マー アンデ タイヘン ヨロコンデク[°]ライッテ
まあ あれで たいへん 喜んでいく////////

アスンデッテワ ウン。
遊んでいっては うん。

96B：ホイテ ボンヤ ショーカ[°]ツニ カナラズ ゲタ
そして 盆や 正月に 必ず 下駄[を]

モロタモンジャ {笑} (C {笑})
もらったものだ {笑} (C {笑})

97A：オー ホヤ ホヤ。 オクリモン クダサイ。 ウン
うん そうだ そうだ。 贈りもの[を] ください。 うん。

ホイテ ナンジャー オショーカ[°]ツノ グワンタンデア
そして なんだ お正月の 元旦には

石川 21-3

イヤ フツカノ ヒヤワ ショーカ[°]ツノ フツカネア
いや 2日の 日だわ 正月の 2日には

カナラズ ネンカ[°]ネ オヤノ ウチー (B カナラズ)
必ず 年賀に 親の 家へ (B 必ず)

オン ネンカ[°] オトコドモア ネンカ[°]ネエ
うん 年賀[に] 男たちは 年賀に

(B サケ モッテ イッタネー?) オン。
(B 酒[を] 持って 行ったね?) うん。

コブンナ サケ モロテ オミキ モロテ
子は 酒[を] もらって お神酒[を] もらって

ホシテ アーイ イッタ モンジャ? ウン。
そして ××× 行った ものだ うん。

イマジヤー ソーユー ケーコーノ コター ハヤラン。 ウン。
今では そういう 傾向の ことは 流行らない。 うん。

(B イマデア ヒトリモ シェンジヤネー[36])
(B 今では ひとりも なさらないね)

オー ヒトリモ ソーユナ コトア シトル モンナ
うん ひとりも そのような ことを している 者は

オランネ (B ネー) ウン。
いないね (B ねえ) うん。

98B : ムカシ モタナンナランヨニ ミンナ
昔[は] 持たなくてはならないように みんな

(A オー ソヤ ソヤ) モッタネ アー。
(A おお そうだ そうだ) 持ったね ああ。

99A : オー オヤ ホヤ。 (B ウン) ホーッリヤ アンタ
ああ ×× そうだ。 (B うん) それは あなた

ドンナー オマ コノ ゲンブク チュ一 コトオ ヤカマシ。
どんな ×× この 元服 という こと[は] うるさい。

100B : スインルイカ° タクサン アッテモ (A ウン)
親類が たくさん あっても (A うん)

イヤ ジンブ モッタネ。
いや 全部[の人が] [親を]持ったね。

101A : ホヤ。 (B ア) ホシテ一 ソノ一 ムラノ一 ニンソクネ一
そうだ。 (B あ) そして その 村の 人足にね

シコ°トニ キュードーシコ°トニ アー デテモ一
仕事に 共同仕事に ああ 出ても

ゲンブクマエノ ヒトワ ブーキ°リ[37]デ
元服前の 人は 分切りで

イチネン アタラナンダンエ イチニンマイ。
1年 もらえなかったのだ 一人前[は]。

ホイター ゲンブク シタカ[。]チャー
ところが 元服[を] したとなると

ゲンブクー ウー スインダンヤサカイ
元服[が] うん すんだのだから

ウー ソレカラ マ ムラニンソクデ デモ
うん それから ま 村人足で でも

キヨードースイコ[。]トニデモ イッタカ[。]キャ
共同仕事にでも 行ったんだ

イチニンズツラ[38]
一人[前]ずつ

アタリマエノ オトナノ ヒヨー[39] チンキン モロテ
普通の 成人の 日当 賃金 もらって

モロタモンジャ ウン。 (B ソーヤッタネー)
もらったものだ うん。 (B そうだったね)

ホレア アンデー ソノ テンナ ハッキリ シトッタネ ウン。
それは あれで その 点は はっきり していたね うん。

ナカナカ アンデ。
なかなか あれで。

102C : コレア ジューキューサイン ナッタ トキノヤネー。
これは 19歳に なった 時のだね。

103A : (B エー) ウン ソヤ ソヤ ソヤ ウン。
(B ええ) うん そうだ そうだ そうだ うん。

ジュー ジューキューサイノ ハルー[40] ナッタ トキ
××× 19歳の 春[に] なった 時

[21↑22]

ソノ アー ダレン トコエ イッテ モリヤー エーケイヤー
その さあ 誰の ところへ 行って もらえば よいやら

ドコエ イキヤ エーヤラ ッチュテア {笑} ウン。
どこへ 行けば よいやら といつては {笑} うん。

ホイタラ コンダーア サキベーネ オヤニヨッテ
そうしたら 今度は すでに 親によって[は]

ナンニンモ モットル アノー シトラ
何人も [子を]持っている あの 人が

オッテノモンジャハカイ ウーン ソノ ヒトラ ツット ヨッテ
おられるものだから うん その 人たち さっと 集まって

マタ キョーダイブンノ コンタ サカズキ {笑}
また 兄弟分の 今度は[また] 盂事[を] {笑}

(B {笑}) サカズキ シテワ
(B {笑}) 盂事[を] しては

ホシテ オタカ[。]イニ マー タスケオー チュー
そして お互いに まあ 助け合う という

マー アンデ イミデーネ ウン。

まあ あれで 意味でね うん。

ナカナカ アンデ ムカッシャ シ アレア
なかなか[わからないが] あれで 昔は × あれは

ドユトッカラ一 アンナ ゲンブク チューコタ
どういうところから あんな 元服 ということが[始まったか]

ムカシ サムライノカ[°]カネー

昔[の] 武士のものかね

ナンカ ウ オヤブンコブンジャサカイ
[それとも]なにか × 親分子分だから

コーエ ヤクザノ ソーユー モンノ マネシタ モンカ
こういう やくざの そういう ものを 真似した ものか

ドユモンジャラ ソノ ヘンノア ワカラニケド。
どういうものやら そのあたりの[こと]は わからないが。

104C : ソレワー ソンナ コトジャ ナカロネー。

それは そんな ことでは ないだろうね。

(A アー ホーヶ) ャッパリ コノ アノー
(A ああ そうですか) やっぱり この あの

イチニンマイニ ナル ッテユー (A ウン)
一人前に なる という (A うん)

アノ コノ ヤッパリ ブシノー (A シルシカ)
あの この やはり 武士の (A 印か)

エー ブシノオー (A ウン) アノー アー
ええ 武士の (A うん) あの ああ

ジューゴサイン ナット (A ウン) ゲンブクヤワネ
15歳に なると (A うん) 元服だよね

(B イチネンニ ナッタ チュー オイワイデ ナイカネー)
(B 一人[前]に なった という お祝いで ないかね)

(A オイワイカ ナンカネー ウン ウン)
(A お祝いか なにかね うん うん)

ソレデー ソレオ カナリ マネトランナイカネー
それで それを かなり まねているのでないかね

(A ウン ネー ン) ジューキューサイテユーノワ。
(A うん ねえ うん) 19歳というのは。

105A : ゾ ソレワ インネンノ コトア マー アンデー シランケドネ。
× それは 因縁の ことは まあ あまり 知らないがね。

(C ウン) ナンシェ ワレリョーリ トキニワ ズイブン
(C うん) なにしろ われ//// 時には ずいぶん

コノ ゲンブクオ ヤカマシー ュータ モンジャ
この 元服を やかましく いった ものだ

(C ウン ウン) ウン。 ホシテ アンタ
(C うん うん) うん。 そして あなた

ソユモンデ リョーリニン イレテ
そういうもので 料理人[を] 頼んで

ゴツツオ一 コッシャエテ ホシテ ウン ミナ
ごちそう[を] 作って そして うん みんな

シンシェキカラ アタシノ シトオ ヨンデ
親戚から 近所の 人を 招いて

ホイテ イオーテモッタモンジャ ウン。
そして 祝ってもらったものだ うん。

106C : コレア オハク[°]ロオヤワ オハク[°]ロコ[°]ノ トッキヤ
これは お歯黒親は お歯黒子の 時は

コレア アノ ネンレーワ ナイカ[°]ヤロネ。
これは あの 年齢[のこと]は ないのでしょう。

107B : ナイカ[°]デスチャ (C アー アー ハイ) ハイ
ないのですよ (C ああ ああ はい) はい

ナンドキデモ。 (C ウン ウン)
いつでも[よいのです]。 (C うん うん)

108A : ホヤ オンナダッチャネ。
そうだ 女たちはね。

石川 22-5

ソリヤー ヤッパ イマデモ ヤッパ アル
それは やっぱり 今でも やっぱり ある

ヤットッテノ ヒトア オッテノア デアウエネ。
やっていらっしゃる 人は いらっしゃるのは 出会うよ。

22↑

石川県羽咋郡押水町1977注記

[1] シタッタ

シタッタ（しなさった）の「～タッタ」は尊敬表現形を作る接辞。ほかにイッタッタ（行きなさった）などの例も。近畿地方周辺部に分布する「～テヤッタ」からの音変化形か。能登地方から加賀地方北部、さらにそれに続く富山県氷見市周辺にも分布。

[2] オレン

オルに「～ガ°ヤ」が変化したケ°ンが結びついて [oru] + [gen] → [oren] と音変化した形。「いるのだ」の意味となる。

[3] ソーケ

「そうですか」にあたる。「～ケ」は親愛の気持ちを込めた疑問の終助詞。ソーケの「ソ」が「ホ」に変化したホーケの形もよく使われる。これに対して、ソーカ・ホーカ（そうか）の「～カ」は、「～ケ」に比べてぞんざいな疑問の意となる。

[4] ハヨラト

石川県加賀地方から能登地方の一部で、特定の形容詞の連用形（西部方言的なウ音便形）に接尾辞「～ラト」が後接して副詞的に用いられることがある。ほかの例には、オソーラト（遅く）、タコーラト（高く）、アカルーラト（明るく）、マルーラト（丸く）などがある。

[5] クラブ

青年団の集会場がクラブ。当地のクラブは青年団員が自分たちの汗を流して得た資金で創設された。

[6] ワラオネーエ

ワラオネーエの末尾の「一エ」の部分は、北陸方言特有のうねるような（ゆするような）間投イントネーションとともに使われる。女性に多い表現。

[7] トス

トス（年）のスの発音は、富山県沿岸部から石川県の口能登、さらに富山湾の能登内浦に分布する北陸のズーズー弁（シ=ス、チ=ツ、ジ=ズ）的発音の例。

[8] オトッチャン

おとうさん。この場合は、話者A氏のこと。

[9] アケラン

アケル（明ける）+～ガ[°]ンの音変化形。[akeru] + [gan] → [akeran]。

[10] シコ[°]トハズメデネー

シコ[°]トハズメのハズメもやはりズーズー弁的発音の例。

[11] アンタ

アンタはやや丁寧な対称代名詞で共通語的な呼称。話者B氏と二人だけならオマンと言うのが一般的。

[12] ハダスタッビヤ

「はだし たひ裸足足袋」からで地下足袋のこと。

[13] アシナカヤチャ

アシナカは「足半」で「足半草履」の意。足半草履は、踵まで十分にない短い草履のこと。「～ヤチャ」は「～だよ」の意で、やや優しいニュアンスになる。

[14] シエックワイ

シェックワイのクワの発音は、かつて中央語にも存在した合拗音の名残。

[15] シミドラ

スミダワラ（炭俵）の音変化形。

[16] アヘナカッタ

忙しかった。注[17]のアシェナイ（忙しい）の「シェ」が「ヘ」に変化したもの。

[17] アシェナイ

「忙しい」の意。

[18] ニヤーニヤ

おねえさん。年ごろの「娘さん」「姉さん」「嫁さん」。最近ではネーサンと呼ぶことが多い。この場合は、話者B氏のこと。

[19] カカ[°]リ

藁縄をカカ[°]って（編んで）作った買物かごのようなもの。山のワラビ・ゼンマイ、畑のキュウリ・ナスなどを取って入れる道具。ただし、山の茸

や栗を入れるのには使わない。

[20] ソンナカ[。]イネ

ソンナカ[。]イネは、ソンナカ[。]ヤワイネからの変化。

[21] バンドリ

昔、雨具に使った藁製の蓑。

[22] ネゴダ

薪などを背負うときに背中に当てた、藁製の背中当て。

[23] サーシタカチャ

「どうかすると」「時によつては」の意味。

[24] トリ

この場合のトリは「兎」の意。当地方では、兎も鳥の仲間で1羽2羽と数える。兎の骨をたたいて碎き肉だんごのようにして食べる。ガン（雁）の骨も同様にして食べる。

[25] ユーマシタ

「おっしゃった」「言われました」の意。「～マシタ」は尊敬の助動詞「マッシャ」が「タ（過去の助動詞）」に接続する連用形相当の形。

[26] ナーン

「少しも」の意で、ナニモ→ナンモ→ナーモ→ナーンと変化した形。

[27] ザイショ

在所。町村の字（アザ）にあたる。たとえば、押水町字宝達が在所の一つ。

[28] ヨボシオヤ

えほしおや
鳥帽子親の音変化形。元服のとき、緑を結んだ仮の親子関係（男性同士）の親。富山県では氷見地方、石川県では能登地方（大河川の北）に分布した民俗事象。

[29] ヨボシコ[。]

えほしこ
鳥帽子子の音変化形。元服のとき、緑を結んだ仮の親子関係（男性同士）の子。

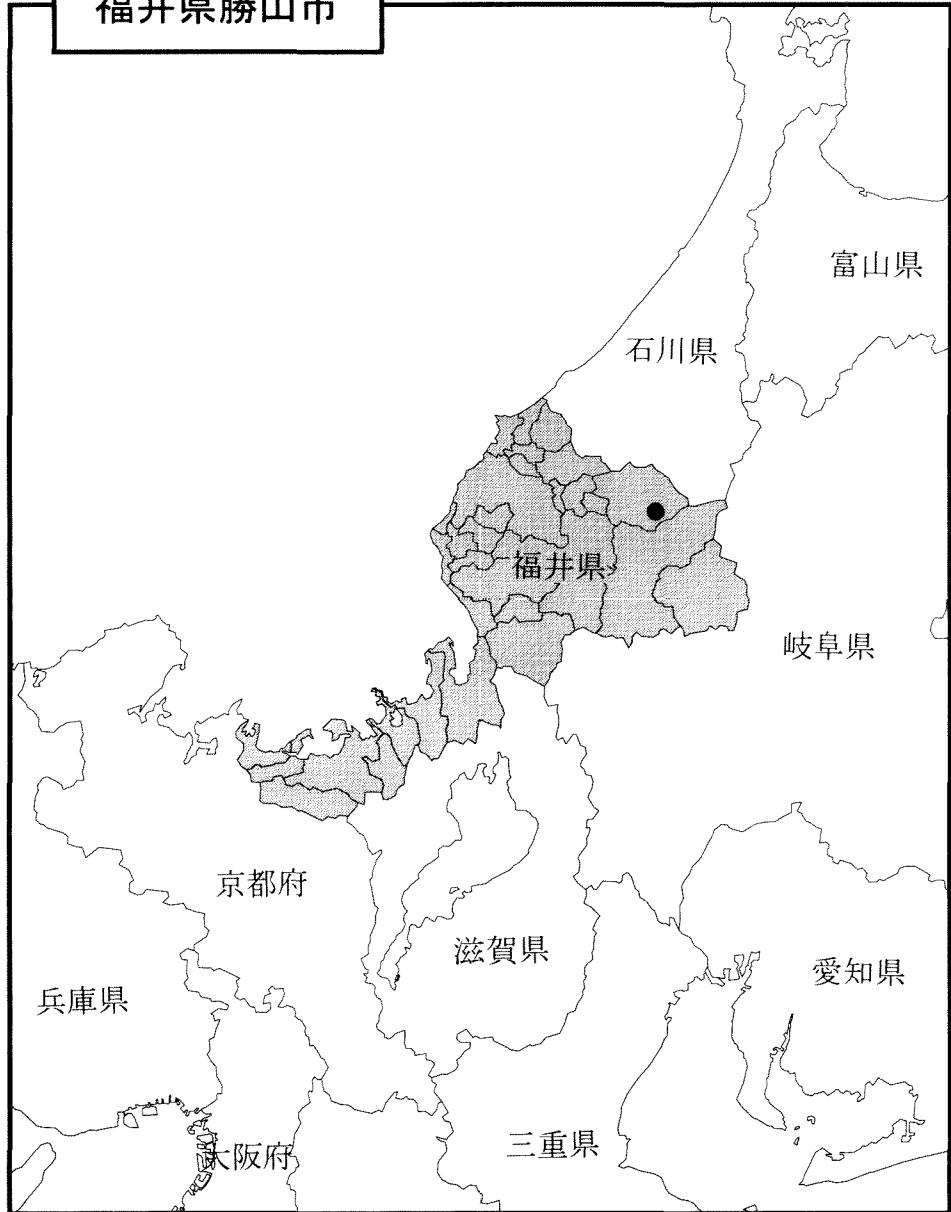
[30] オハク[。]ロオヤ

はぐろ
お歯黒親。女性の間の仮の親子関係の親。

- [31] オハク[°] ロコ[°]
お歯黒子。女性の間の仮の親子関係の子。
- [32] ヨバレテ
ヨバレルは「ごちそうになる」の意。
- [33] ウシナルケ[°] イノ
「薄くなってしまうよ」の意。ナルカ[°]イ（なるのだ）→ナルケ[°]イ。
- [34] キテクサンチマン
クサンチマンは「下されませ」の意。「～ンチ」は旧・羽咋郡域の特徴的表現で優しい命令の意の表現。従って、行カンチは「いらっしゃい」の意となる。クサンチの「クサ」はクサンセの活用語幹。県内他地方の「～クダンセ・クタンセ」にあたる。
- [35] ヒク[°]ラシ
「日暮らし」からで、その日その日の生活をさす。
- [36] シエンジャネー
「なさらないね」の意。シェンジャは、シテヤ（しなさる）に対する否定の形。ただし、ぞんざいな形としてのシェンジャもある。
- [37] ブーキ[°]リ
分切り。ブーキ[°]リは、どれだけかカットされて、一人前でない賃金のこと。
- [38] イチニンズツラ
イチニンズツラの「ラ」は、「ほど」「など」の意味で、使用頻度が高い。
- [39] ヒヨー
「日庸」「日用」からか。「日当」（1日働いた賃金）の意。ヒヨー、ヒヨーチンとも言う。
- [40] ハルー
春。ここでは「正月」の意味。
- [41] ナンシタ
「なにをした」の意。ここの「ナン」は「招待」をさす。

**III. 福井県勝山市
1982**

福井県勝山市



福井県勝山市1982話者・担当者

「各地方言収集緊急調査」

話者	木村 あきえ 中山 又右衛門 林 かた
収録担当者	天野 義廣
文字化担当者	天野 義廣
共通語訳担当者	天野 義廣
解説担当者	天野 義廣

(敬称略　項目別50音順)

「全国方言談話データベース」

編集担当者	佐藤 亮一 江川 清 田原 広史 井上 文子
編集協力者	井上 優 鳥谷 善史 熊谷 康雄

福井県勝山市1982解説

収録地点名

ふくい けんかつやま し へいせん じ ちょうへいせん じ
福井県勝山市平泉寺町 平泉寺

収録地点の概観

位置

勝山市は福井県北東部に位置し、石川県と接する。平泉寺町平泉寺は勝山市の南東部、勝山市役所から直線距離にして約3キロのところに位置する山村である。

交通

福井市から勝山駅までは京福鉄道で約1時間。勝山駅から平泉寺まではバスで約15分。

地勢

平泉寺の集落は九頭龍川に注ぎ込む女神川の扇状地に形成されている。三方を山で囲まれた高地であり、夏は涼しくしのぎやすいが、冬は市内でも雪の深いところである。平均して12月下旬に雪が降り始め、4月上旬ごろまで積雪が見られる。積雪量は年によって異なるが、豪雪時には積雪3メートルを超えることもある。

行政区画

1954(昭和29)年、平泉寺村をはじめ、勝山町、村岡村、北谷村、野向村、荒土村、北郷村、鹿谷村、遅羽村の1町8か村が合併し、勝山市となった。

戸数・人口

1982(昭和57)年8月1日現在、勝山市の世帯数7,762戸、人口31,103人、平泉寺町の世帯数141戸、人口610人である。

産業

戦前までは、農業と林業(特に薪や炭の生産)が主な産業であった。戦後は兼業化が進み、農林業を自営しながら勝山市街地の会社、工場、建設現場などに働きに出る人が多くなっている。

収録地点の方言の特色

方言区画上の位置・隣接諸方言との関係

福井県方言は、木ノ芽峠付近を境として、嶺北方言と嶺南方言とに分かれる。嶺北方言は北陸方言、嶺南方言は近畿方言に属する。勝山市・大野市のある山間部（いわゆる奥越地区）の方言は嶺北方言に属する。福井市は無アクセントの地域として知られているが、その周辺は奥越地区を含めて曖昧アクセントといわれる。

音韻

(1) 一音節語は長音で発音されることが多い。

カー (蚊)

キー (木)

ヨー (子)

(2) 語中・語尾のガ行音は鼻濁音化する。

チカ°イ (違い)

スキ° (杉)

(3) 語によって次のような母音の交替が見られる。

[i] → [e]

エク (行く)

ヘモ (紐)

[u] → [i]

イコ°ク (動く)

[ju] → [i]

マイケ° (眉毛)

イキ (雪)

[u] → [ju]

ユエ (上)

タユエ (田植え)

[u] → [o]

ノク° (脱ぐ)

テノコ°イ (手拭い)

[o] → [u]

アスブ (遊ぶ)

フルシキ (風呂敷)

(4) 形容詞の語尾の「アイ」「オイ」は「エー」になりやすい。

アケー (赤い)

エレー (偉い)

ツエー (強い)

シレー (白い)

(5) 共通語の「セ」「ゼ」は「シェ」「ジェ」となることが多い。

シェンシエ (先生)

シェマイ (狭い)

カジエ (風)

ジェンジエン (全然)

ナジエル (←ナゼル) (撫でる)

「サ」も「シャ」になることがある。

シャク (裂く)

シャカン (左官)

(6) 共通語のサ行がハ行になることがある。

イキナハル (行きなさる)

スズキハン (鈴木さん)

ヒチ (七・質)

ヒク (敷く)

アリマヘン (ありません)

ホコ (そこ)

「ヒ」が「シ」になることもある。

シト (人)

(7) 共通語のマ行がバ行になることがある。

シェバイ (狭い)

クルビ (くるみ)

サブイ (寒い)

チベタイ（冷たい）

ヘボ（紐）

文法

(1) 動詞の命令形は、親が子供に命じたり、相当強い気持ちで相手に訴えたりする場合にしか用いられない。通常は「動詞連用形+ネン」という形を用いる。

ミネン（見なさい）

タベネン（食べなさい）

(2) 依頼表現には「シテ」「シトクレ」がある。後者の方が敬意がこもっている。

(3) 老年層が用いる勧誘表現に、「～マイカ」「～マイコ」(～ようじやないか)がある。

(4) 断定の助動詞は「ヤ」が一般的である。まれに老人男子が「ジャ」と言う。「ダ」は聞かれない。共通語の「のだ」にあたる「ノヤ」、及びそれが変化した「ンニヤ」「ネ(一)」などの表現も見られる。

(5) 推量の助動詞は「ヤロ(一)」が一般的である。「ノヤロー」(のだろう)から変化した「ンニヤロ(一)」もよく聞かれる。丁寧表現は「デスヤロ(一)」「デッシャロ」となる。

(6) 共通語の「てしまう」「てしまった」にあたる形は「テマウ」「テモタ」である。

(7) 当為・義務の表現は「動詞未然形+ンナ(ラ)ン」である。また、不要を表す「～するに及ばない」の意の表現として「動詞連用形+ネバン」がある。

ハチジニ エカンナ(ラ)ン(8時に行かなくてはならない)

マダ イキネバン(まだ行く必要がない)

(8) 打消表現は「動詞未然形+ン」(過去形「動詞未然形+ナンダ」)である。

(9) 共通語の「-eba」、「-reba」に対応する仮定表現は、それぞれ「-eja」、「-rja」となる。「-rja」はさらに直前の音節と融合することもある。

ノミヤ(飲めば)

タベリヤ、タビヤ(食べれば)

次のような形式も仮定表現として用いられる。

ウトタラ（歌ったら）

シナ（しなければ）

シナンダラ（しなかつたら）

ショーナラ（したとすれば）

シタッテ（したとしても）

(10) 疑問の文末詞には、「ケ」〈対等以下〉、「(デス) カ」〈目上〉が用いられる。

親密な相手には「ン」も用いられる。

(11) 話し手の考えを述べたり、話し手側の事情を述べたりするときの終助詞に

「ワ」「ワイ」、「モ」「モン」がある。同意要求の気持ちを表す終助詞に「ノ(一)」〈対等以下あるいは親密な相手〉、「ネ(一)」〈目上の相手や客人など〉、「ナ(一)」〈ぞんざい〉がある。これらは組み合わせて用いられることがある。

アツシテバーッカ インナンワ

(熱くしてばかりいなくてはならないよ)

ドッチカ ユート サンガ[。]ノヒトア ジョーズヤネー

(どちらかというと山家の人は上手だね)

ジューニンイジョーモ ソトメサン クルワノー

(10人以上も早乙女さんが来るよね)

(12) 「ノー」「ネー」が次の内容を考えながら発する間投助詞として用いられる。

老年層の男性は「シテ(一)」と言うこともある。これらは単独で間投詞としても用いられる。

ソッデノー ムカシノ タユエネワ ネー

アサ ヨジネ オキルンデスワー

(それでね、昔の田植えにはね、朝4時に起きるんですよ)

その他、特徴ある間投詞的表現として次のようなものがある。

サーラ（さあて）

ナンニヤ（何だよ）〈次に言うべき内容を思案しながら言う〉

ユート（言ってみれば）

- (13) 尊敬表現には「動詞連用形+ナハル」、「動詞連用形+ネンス」がある。前者の方がよく用いられる。後者は老年層の女性に使われる言い方である。
- (14) 丁寧表現には「～ス」の形式がよく用いられる。

アレ (一)ス (あります)

チカ°エス (違います)

「デゴイス (ゴエス)」(でございます) という形式も丁寧表現として多用される。打消の形式は「デゴヘン」(でございません) となる。

(以上の解説は、基本的に、「各地方言収集緊急調査」当時の報告原稿による。)

福井県勝山市1982凡例

談話資料は、方言談話音声、方言談話音声の文字化、方言談話の共通語訳から成る。CD-ROMには、ページ単位で切った方言談話音声を、CDには、方言談話音声全体を収録した。

文字化と共通語訳

方言談話音声の文字化はカタカナで表記し、方言談話の共通語訳は、漢字かなまじりで表記した。方言談話音声の文字化と共通語訳とは、対照ができるよう、上下2段を1組として示した。上段が文字化、下段がその共通語訳である。

文字化については、表音的カタカナ表記を用いている。つまり、長音は「一」で示し、助詞「は」は「ワ」、助詞「を」は「オ」、助詞「へ」は「エ」と表記する。「カ°」「キ°」「ク°」「ケ°」「コ°」はガ行鼻濁音を表す。

また、分かち書き、句読点などは、便宜的なもので、厳密なものではない。「各地方言収集緊急調査」における、方言談話音声の文字化の方法は、後に掲げる「調査実施上の留意事項について」などに詳しく記されている。ただし、今回、「全国方言談話データベース」として公開するにあたり、文字化・共通語訳を整備する際には、当時のマニュアルにはとらわれず、読みやすさ、意味のとりやすさを優先して処理をした部分がある。

また、この文字化は、時間の流れを忠実に反映することを意図していない。したがって、発話の重なりや、複線的な会話の進行の構造が、文字化からは読み取れない。データを使用する際には、文字化・共通語訳を見るだけではなく、実際に、音声を聞いて判断していただきたい。

発話単位

ひとりの話者が続けて話している、話者が交替するまでの連続した発言を1発話とする。途中にあいづちが入る場合もある。

発話番号 〈半角〉

発話の通し番号を、各発話の話者記号の前に付した。

例：1A

話者記号 〈全角〉

話者、調査者など、談話の場にいる人物について、A, B, C, D, E, F, ……のように、アルファベットで示した。

例：1A

固有名詞

話者および一般の人名については、文字化・共通語訳の該当個所を、A, B, C, X1, X2, X3などのアルファベットに置き換えた。話者、調査者など、談話の場にいる人物については、A, B, C, D, E, F, ……のように示し、話題の中の第三者については、X1, X2, X3, ……のように示した。ただし、音声は、該当個所に加工をしなかった。

歴史上の人物や、有名人の人名については、記号に置き換えることはせず、個人名を出すことにした。また、会社名、店名、製品名などについても、発言されたとおりに記している。

地名については、そのまま扱うこととした。

記号

。 (句点) 〈全角〉

ポーズがあって、意味的にひとつのまとまりを持つ文と考えられる個所。

共通語訳については、実際の発話でポーズが置かれていないところでも、意味の取りやすさを優先して句点をつけた場合もある。

例：ソーデス ソーデス

 そうです。 そうです。

、 (読点) 〈全角〉

基本的に息をついた個所、または、ポーズのある個所。

共通語訳については、実際の発話でポーズが置かれていないところでも、意味の取りやすさを優先して読点をつけた場合もある。

また、文字化と対応しなくなっても、読みやすさを優先して、取り去った場合もある。

例：シ、ヤクショ

 市役所

？ 〈全角〉

上昇イントネーションと判断した個所。

例：アズケトイテ？

預けておいて？

() 〈全角〉

あいづち。ひとりの人が連續して話している時にさえぎったり、口をはさんだりした個所。

(A …… のように、開き括弧の次にあるアルファベットは、発言している話者を示す。() の閉じ括弧の直前の句読点は省略した。

なお、() 内のあいづちと、独立した発話扱いされているあいづち的発話との違いは必ずしも明確ではない。

例：(A アー ソーデスカ)

{ } 〈全角〉

笑、咳、咳払い、間、などの非言語音。

例：{笑}

{咳}

{手を叩く音}

× × × 〈全角〉

言い間違いや言い淀みなど。

例：ム ム ムツカシー

× × 難しい

* * * 〈全角〉

聞き取れない部分。

例：オチャズケノ*

お茶漬けの*

/// 〈全角〉

対応する共通語訳が不明な部分。

例：モーゼー／＼ モジナンデスナ、

／＼＼＼＼ 「文字」なんですね。

[] 〈全角〉

方言音声には出てこないが、共通語訳の際に補った部分。

例：ミカン ノセテ

みかん [を] 乗せて

= 〈全角〉

[] 内の=は、意味の説明や、意訳であることを示す。

例：イマ ュー

今 いう [=今話題にあがつた]

| | 〈全角〉

注意書きなど。

例：| Aに対して |

[] 〈全角〉

注記。方言形の意味・用法、特徴的音声などについて説明し、文字化・

共通語訳の後にまとめてある。[] 内の半角数字は、注記の番号を示す。

例：ホシツキサンノオモチ [1]

音声

CD-ROMには、冊子のページ単位で区切った方言音声のwaveファイルを収録している。冊子のページをpdfファイルにしたものに、方言音声をリンクさせていて、各ページにある再生の部分をクリックすると、そのページの音声を聞くことができる。

CDには、談話全体の音声を収録している。以下にあげるように、適当な個所で、トラックに区切っている。

CD トラック番号

文字化・共通語訳のヘッダは、方言音声を収録したCDのトラック番号を示している。「福井23-1」はCD トラック番号が23で、その1ページ目ということである。「福井23-1」「福井23-2」……「福井23-7/24-1」……「福井34-3」のように表示される。

また、文字化・共通語訳部分には、CDのトラックの切れ目を表示した。矢印の部分がトラックの切れ目を表し、その両側の数字はトラック番号である。

[↑23], [23↑24], …… [33↑34], [34↑] のように表示される。

第10巻のCD（66分47秒）には、福井県勝山市の談話、【土地の食べ物の話】の全体の音声を収録している。各トラックの開始ページ・行、終了ページ・行、時間は下記のとおりである。行は、文字化の行を表示した。

トラックNo.	開始ページ・行	終了ページ・行	時間:分:秒
23	p.178・ℓ.1	p.184・ℓ.11	0:02:10
24	p.184・ℓ.11	p.191・ℓ.5	0:02:02
25	p.191・ℓ.5	p.197・ℓ.7	0:02:00
26	p.197・ℓ.9	p.203・ℓ.11	0:01:59
27	p.203・ℓ.13	p.209・ℓ.1	0:01:58
28	p.209・ℓ.3	p.215・ℓ.7	0:02:10
29	p.215・ℓ.9	p.220・ℓ.17	0:02:00
30	p.220・ℓ.19	p.226・ℓ.9	0:02:01
31	p.226・ℓ.11	p.232・ℓ.15	0:02:00
32	p.232・ℓ.17	p.238・ℓ.11	0:01:57
33	p.238・ℓ.13	p.244・ℓ.5	0:02:01
34	p.244・ℓ.7	p.246・ℓ.5	0:00:49
計			0:23:07

福井県勝山市1982談話

収録地点 福井県勝山市平泉寺町 平泉寺

収録日時 1982(昭和57)年8月20日

収録場所 福井県勝山市平泉寺町平泉寺 老人センター 平泉寺荘

話題 土地の食べ物の話

話者

- | | | | | |
|---|---|-------------|----------|-----------|
| A | 女 | 1904(明治37)年 | (収録時78歳) | 農業 |
| B | 女 | 1919(大正8)年 | (収録時63歳) | 農業 |
| C | 男 | 1911(明治44)年 | (収録時71歳) | 農業, 元・会社員 |

司会者

- | | | | | |
|---|---|-------------|----------|----|
| D | 男 | 1949(昭和24)年 | (収録時33歳) | 教員 |
|---|---|-------------|----------|----|

収録時間 (CD) 23分07秒

【土地の食べ物の話】

話し手

- | | | | |
|---|---|--------|--------------|
| A | 女 | 明治37年生 | (収録時78歳) |
| B | 女 | 大正8年生 | (収録時63歳) |
| C | 男 | 明治44年生 | (収録時71歳) |
| D | 男 | 昭和24年生 | (収録時33歳) 調査者 |

1 C : ホレカラー モットー ムカシ一 ウララノ オヤノ ジダイネワー
それから もっと 昔 私たちの 親の 時代には

↑23

サバ サバ アルヨネー。 (D ハイ)
鯖 鯖 あるよね。 (D はい)

サバノ ナカエ ゴハンオ ギューット ツメテ (D ホー)
鯖の 中に ご飯を ぎゅっと 詰めて (D ほう)

デー モー モー ゴハン クテーア ネテルト
で もう もう ご飯[を] 食べては 寝ていると

サバノ スシンテネー ッテ
鯖の 鮨みたいに と

ヨー ムカシノ モンア ュータカ[。]ノー。 ソレクライヤ。
よく 昔の 者は 言ったがね。 それくらいだ。

サバノ スシオー シツ トキ[1]ネワー
鯖の 鮓を する 時には

福井 23-2

キチーット サバン ナカエ ゴハンオ ツメテ
きちつと 鯖の 中へ ご飯を 詰めて

アジノ ツケタ ゴハンオヤザ ショーカ^モ イレタ
味の つけた ご飯をだよ しょうがも 入れた

ソイテ ソレオ ピシャット コー フタ シテノー ウーン。
そして それを ぴしゃっと こう 蓋[を] してね うん。

ハラ シタ[2]ンニヤデ (D ハイ)
腹[の処理を] してあるのだから。 (D はい)

ヒライテル サカナヤデノー。
開いている 魚だからね。

デ フタ シテー ソイツオ コッダ[3]
で 蓋[を] して そいつを 今度は

マルッポデ チョイト オーキメノ スシオケネ コー ツメテ
丸い形で ちょっと 大きめの 鮨桶に こう 詰めて

ナラベテ ツメテ マー ダーイタイ ゴホン。
並べて 詰めて まあ だいたい 5本。

ソノツキ^モ ゴホン チューヨーネー。 (D タテヨコネ シテー)
その次も 5本 というように。 (D 縦横に して)

オーン[4] タテヨコネ ツメテ
おう 縦横に 詰めて

ホイテ ギュート オスンニヤネ。
そして ぎゅっと 押すのだね。

ソレワ ダーイタイ ナンヤネ。 ナツノ スシデワー ンー
それは だいたい 何だね。 夏の 鮨では うん

カンブクロ ハンタワラノ カンブクロ フタツヤノー。
紙袋 半俵の 紙袋 ふたつだね。

イッピョーヤノー。 (D フーン) イッピョー ツムンニヤ。
1俵だね。 (D ふうん) 1俵 積むのだ。

ソレ アサマデ オクンニヤ。
それ[を] 朝まで 置くのだ。

サカナヤデ モー ツブレル リョーワ ワカッテモテルンニヤ。
魚だから もう つぶれる 量は わかってしまっているのだ。

ホヤケド アノー マスノ スシワ
だけど あの 鱒の 鮨は

ソーユー オモシェーコト シット
そういう 変わったこと[を] すると

クチャーット ナッテマウデノー。 (D アー)
くちやっと なってしまうからね。 (D ああ)

ホイデ サバノ スシワ ソー シンニヤ[5]。
それで 鮓の 鮨は そう するのだ。

福井 23-4

ソーシテ ナニ[6] シェーナ モー エマデア
そうして 何[を] しないと もう 今では

サバノ スシ メンドクソテ テナンノヤ。
鯖の 鮓[は] めんどうくさくて 困るのだ。

アタマ クワレンシノー。 (B ウーン)
頭[は] 食べられないしね。 (B うん)

シリップ アルシ ドームナランノヤ。
尾[が] あるし どうにもならないのだ。

デ アレア マー アノー ウスアジネ ツケル トキワ
それで あれは まあ あの 薄味に つける 時は

コマコーラト キルンデスケドー。
細かく 切るのですけれど。

マー サシミ キルヨーネ キッテー。
まあ 刺身[を] 切るように 切って。

2 D : アー。 ゴハンガ。 マー ュート
ああ。 ご飯が まあ 言うと

サンドイッчинテネ ナッテルノオ
サンドイッチみたいに なっているのを

3 C : ホヤ ホヤ。 コー[7] キルンニヤ。 (D ハー)
そうだ そうだ。 こう 切るのだ。 (D はあ)

福井 23-5

ホイテ キッテ (D エー) サラネ イッポン
そして 切って (D ええ) さらに 1本

ソノママ キッタ キリメ ソノマーマオ アタマモ ミンナ ツケテ
そのまま 切った 切り目 そのままを 頭も みんな つけて

ホイテ ダスンニヤ。 (D アー。 ホーデスカ)
そして 出すんだ。 (D ああ。 そうですか)

イマワ モー ホンナコトア シエン。 アー。 モー ナーモ。
今は もう そんなことは しない。 ああ。 もう 何も。

4 B : アノー フユノ スシワー (C ウン)
あの 冬の 鮨は (C うん)

アノ コメ ハンタワラホド ノシエスカ^ノー。 (C ウン)
あの 米 半俵ほど 載せますがね。 (C うん)

アノ コージ エレタ スシ。
あの こうじ[を] 入れた 鮨。

5 C : ホヤ ホヤ。 コージ エレタ ヤツワ。 (A ホーヤ)
そうだ そうだ。 こうじ[を] 入れた やつは。 (A そうだ)

6 B : コージ エレテ サケノ マーッカナノ
こうじ[を] 入れて 鮭の まっ赤なの[を]

ウエ ノシテ シット キレーナノー。
上[に] 載せて すると きれいだね。

福井 23-6

7 C : ホレカラノー ショーガ[°]ツヨートカ ネントー[8] (D ハイ)
それからね 正月用とか 年頭 (D はい)

アルワネー。 アノトキワ マ ダイタイ マー サケヤネ。
あるわね。 あの時は まあ だいたい まあ 鮭だね。

ショーガツネ サケ。 (B オサケ) サケ。 サケ。
正月に 鮭。 (B お酒) 鮭。 鮭。

(B ソレワ カワラン。 ゴメハンラ シトケースモ)
(B それは 変わらない。 // しておきますもの)

ソレワノー アノ ヤッパ ソレモ ウラオモテ
それはね あの やはり それも 裏表[を]

チョト アブッテネ (B フーン) (D ハー)
ちょっと あぶってね (B ふうん) (D はあ)

ホイテ モー クイキレルヨーニナル
そして もう かみ切れるようになる

アレ キューット ノバイテモ キレン。
あれ きゅっと 伸ばしても 切れない。

8 B : ホイテ カワ トンナハランノケ。
そして [魚の]皮[を] お取りにならないのですか。

(C トラン) Cハンノ。 (C アー トランノヤ)
(C 取らない) Cさんの。 (C ああ 取らないのだ)

ア一 ホーデスカ。

ああ そうですか。

9 D : マー カワコ^ト。

まあ 皮ごと。

10C : アー ウロコカ^{ミナ} カート ウスコケ^ヤ。

ああ うろこが みんな かっと 薄こげだ [=薄くこげている]。

(B イヤー。 イヤ チュテル。 {笑}) ハー。

(B いや。 いや と言っている。 {笑}) はあ。

ソイテノ一 カワ トランチュト

そしてね 皮[を] 取らないというと

サカナノ ミア グダグダン ナランネヤ。 (D ハー)

魚の 身が ぐだぐだに ならないのだ。 (D はあ)

[23↑24]

カワ ツケタナリヤト。 (D クツツイテマスネー)

皮[を] つけたままだと。 (D くっついてますね)

ホイト クイツク トキネ キヤー ヨソノ スシ

そうすると 食いつく 時に ××× よその 鮓

クート クーット ヒッパッテ ノビルワノ一。 カワ。

くっと くっと 引っぱって 伸びるわね。 皮[が]。

(B カワカ^{コワイデ})

(B 皮が 固いから)

イクラ クテモ キレンネ。
いくら 食べても 切れないのだ。

ホヤケド ウラン トコノ スシア
だけど 私の ところの 鮨は

ソンナコト ジェッタイ ネーンニヤ。 (D アー ヤイタルデ)
そんなこと 絶対 ないのだ。 (D ああ 焼いてあるから)

カワ キチン キチント キレテマウンニヤ。
皮[が] きちん きちんと 切れてしまうのだ。

ホイテネー ソノ サバノ スシワー
そしてね その 鯖の 鮨は

コメ イッピョーカ イッピョーハン ハー ツクルンニヤ。
米 1俵か 1俵半 はあ 作るのだ。

ミッカデモ ヨッカデモ オサナアカン。
3日でも 4日でも 押さなくてはだめだ。

アレワノー (B フーン) オモシェシダイノモンヤデ。
あれはね (B ふうん) 重石次第のものだから。

ソイテ コージ エレタヤツ
そして こうじ[を] 入れたやつ

ホイト コージト ナントカ° キシーット マジッテ (D ホ一)
それと こうじと 何とが きちんと まじって (D ほう)

福井 24-3

ホイテ ソレオ コンダ アケ[°]テネー。
そして それを 今度は あげてね。

ココ コボーット トレルヨーネ アケ[°]テー
ここ こぼつと 取れるように あげて

ホイテ ナニ シット スーツ
そして 何 すると すっと

ソラ オイシーンニエ。 (D ホー)
それは おいしいのだ。 (D ほう)

マー イマー アノー フユノ スシデー イチバン ウマイノア
まあ 今 あの 冬の 鮨で いちばん うまいのは

X1サンノ スシノー。 (B フーン)
X1さんの 鮨ね。 (B ふうん)

アノー X2ハンネ タベタヤロ。 (B ウン)
あの X2さんで 食べただろう。 (B うん)

アー ジョーズネ シナハルワネー。
ああ 上手に しなさるよ。

ホンデ アレワ ソノ カトナッタリ ヤコスキ[°]タリ
それで あれは その 固くなったり 柔らかすぎたり

コノ カケ[°]ンカ。 ムツカシーンニヤノー。
この かげんが 難しいのですね。

11B：アノ オモシエノ カケ^ンデ
あの 重石の かげんで

アレ パンパン ナッタリ シット ヤッパ。 ウーン。
あれ パンパン[に] なったり するから やはり。 うん。

12C：ソーユーフーネ シテ フユノ スシワ シマスンニヤ。
そういうふうに して 冬の 鮨は するんです。

ホイテ (B アトワー) フユノ スシワー
そして (B あとは) 冬の 鮨は

ナツノ スシノ ヤクニバイカラ ニバイハンノ ジューリョーオ
夏の 鮨の 約2倍から 2倍半の 重量を

オモサニ シェーナ アカンノヤ。 (D アー ソーデスカ)
重さに しないと だめなのだ。 (D ああ そうですか)

ナツノ スシワ ソンナコト シット アカンネ。
夏の 鮨は そんなこと[を] すると だめなのだ。

(D フユノ スシ チューノワ ヨースルネ)
(D 冬の 鮨 というのは 要するに)

ヒツキデモ フタツキデモ モツンニヤデ。 アレワ。
ひと月でも ふた月でも もつのだから。 あれは。

(D アー。 アケ^ンテー タベタ アトカラ
(D ああ。 あげて 食べた 後から

福井 24-5

マタ オサエテシマウンニヤ) (B ソー ソー)
また 押さえてしまうのだ) (B そう そう)

13D : マー ュート カンショクミタイナ モンデスカ。
まあ 言うと 間食みたいな ものですか。

ヤッパ ゴ ゴハン。
やはり × ご飯。

14B : *** サケノ サカナニネー
*** 酒の 看にね

(C ヤッパ サケノ サカナヤネー チョット ***)
(C やはり 酒の 看だね 少し ***)

ヨソノ ヒト キナハルト一 オサラニ モッテノ一。
よその 人[が] 来なさると お皿に 盛ってね。

サカナ コトーン コトーントノ一 トッテワ。
魚[を] ことん ことんとね 取っては。

15D : アー。 ホッデ ニシンダイコン[9] ツクッテ
ああ。 それで 鯪大根[を] 作って

フユ シルヨーナ モンデスカ。
冬 するような ものですか。

16C : ホーヤ。 ホヤ ホヤ。 ニシンズケ。
そうだ。 そうだ そうだ。 鯪漬け。

ソヤ ソヤ ソヤ。
そうだ そうだ そうだ。

17A：フユノ スシワ エーケドノー。ナカ[°]モチ シルデー。ハ一。
冬の 鮨は よいがね。長持ち するから。はあ。

18C：フユノ スシワ ナカ[°]モチ シマス。（A ドーシテモ）
冬の 鮨は 長持ち します。（A どうしても）

ホイデ マー ソンナモン コノコ[°]ロノ ワカイ シュヤラ
それで まあ そんなもの このごろの 若い 人たちは

ホンナモンア クワンケド。（D ウーン）
そんなものは 食べないけれど。（D うん）

ソヤケドー ヘーションジノー オマツリネワ
そうだが 平泉寺の お祭りには

イークラ クテモ クワイデモ ダンナイ[10]。
いくら 食べても 食べなくても かまわない。

コンマキ[11]ワ ドーシテモ シェーナ アカン。（D ハ一）
昆布巻きは どうしても しないと だめだ。（D はあ）

(B コンマキト スシー)
(B 昆布巻きと 鮨)

シェキハンワ ドーシテモ シェーナ アカン。（D ハ一）
赤飯は どうしても しないと だめだ。（D はあ）

デ コンマキト一 スシ (B スシ)
で 昆布巻きと 鮓 (B 鮓)

スシト一 (B ウン) ホイテ アカメシサエ アリヤ
鮓と (B うん) そして 赤飯さえ あれば

ゴツツオ チョットモ シエンデモ
ごちそう 少しも しなくとも [=作らなくても]

ホンデモ マツリヤ。 ウン。 (D フーン)
それでも 祭りだ。 うん。 (D ふうん)

ホヤ。 ウン。 ホッデモ一 ヨバッテ [12] キタ モンワー
そうだ。 うん。 それでも 招待されて 来た 人は

ココ°トア ユワレンネ。
小言は 言えないね。

ソヤケド ソラ ソンナコトシテ (B {笑})
だけど それは そんなこと[を]して (B {笑})

キヨービア オカレンデ
今日このごろは おかれない [=すませられない] から

(D エー エー) イヤ
(D ええ ええ) いや

サシミヤタラ ニツケヤタラ スノモンヤタラノ一 ューテ
刺身だとか 煮付けだとか 酢の物だとかね [と] いって

オジエン イッパイ ダイテ ホイテ
お膳 1杯 出して そして

サー ドーゾ アカ°ツテ ツテ ューケド
さあ どうぞ 召し上がって と 言うけれど

ナーンニヤ ジェンダケ デテ ドーゾ アカ°ットクンネヘン テ
何が 膳だけ 出て どうぞ 召し上がってください と

24↑25

ワカ°ミカッテ ハライッパイ クイヤ クイトネンニヤサケネノー。
自分だって 腹いっぱい ××× 食べたくないのだからね。

ヨソノ ウチ ヨバッテ
よその 家[に] 招待されていって

スシダケデ ハラ フクレテタ カッタッテ
鮓だけで 腹[が] ふくれていた //

ナーモ ホシナイクライナ モンヤ
何も 欲しくないくらいの ものだ

モッテカエル ツタッテ ホンナモンノー。
持つて帰る といつても そんなものね。

ヒトバンドマリヤデ スーナリカカッタヨーナ
一晩泊まりだから 酸っぱくなりかかったような

コンマキ モッテ。 (D {笑})
昆布巻き 持つて。 (D {笑})

モッタイナイ ハナシー
もったいない 話。

19B : アツシテ アツシテバーッカ インナン[13]ワ。
熱くして 熱くしてばかり いなくてはならないよ。

20C : ノー。 モッタイナイ ハナシヤケド Bハン。
ねえ。 もったいない 話だけど Bさん。

ホコルカ アツシテバーッカ エンナンワエ。
捨てるか 熱くしてばかり いなくてはならないよ。

ショージキ ュート。 ウン。 ホイテ
正直 言うと。 うん。 そして

21D : チマキ チマキア ツクンナハルンケ。
ちまき ちまきは お作りになるのですか。

22C : チマキット ナンヤナー。 (D コー)
ちまきと[言うと] 何だな。 (D こう)

ササダンコ°カ一。 (B ササ) ダンコ° (B ササダンコ°)
笛団子か。 (B 笛) 団子 (B 笛団子)

アー アー。 アレワー ウラン トコラー (B シナハランネ)
ああ ああ。 あれは 私の ところなどは (B なさらないの)

ヘタクソヤデ デキンネー。
へたくそだから できないのだ。

福井 25-3

(D ヘド シナハランノ。 アー ホーデスカ)

(D そんなに なさらないの。 ああ そうですか)

23B : シナハルヒトワ シナハル。 (C アー シナハル シナハル)

なさる人は なさる。 (C ああ なさる。 なさる)

ワシラワ シタコト ナインデ

私たちは したこと ないので

24C : ドッヂカ ユート ヤマカ[°]ノ ヒトア ジョーズヤネー。

どっちか [と] 言うと 山家の 人は 上手だね。

(D アー) キリーット ササ マイテ

(D ああ) きりっと 筈[を] 卷いて

ゴホンドツ ウエカラ ジュッポンデ ヒトカラケ[°]。

5本ずつ 上から 10本で ひとからげ。

アレ カッコノ エーモンデス。 (D エー エー)

あれ かっこうの よいものです。 (D ええ ええ)

ネー。 アレワー モチコ[°]メノ ゴーカノー。

ねえ。 あれは 餅米の 粉かね。

25A : ソーヤ。 モチコ[°]メノ ゴーヤ。 ササマキダンコ[°]。

そうだ。 餅米の 粉だ。 筈巻き団子。

26B : モチコ[°]メノ ゴーデス。

餅米の 粉です。

福井 25-4

27C：オイシーモンヤ。 ササマキダンゴ[。]ノー。

おいしいものだ。 笹巻き団子ね。

28D：ソーデスカー。 ト ホカニー マチデ コーテクルンデナシネ
そうですか。 すると 他に 町で 買ってくるのでなくて

ウチデ シナハル一

家で お作りになる

マ キシェツ キシェツノ タベモン チューカー

まあ 季節 季節の 食べ物 というか

ドンナン アリマスカ。

どんなの[が] ありますか。

ハ ハル一 ハルノー ムカシノ ハナシデスケド一

× 春 春の 昔の 話ですが

アノー エ ナンチューン ホーバメシ チューンデスカ

あの え 何というの 朴葉飯 というのですか

ソレワ ココラデ シナハッタンデスカ。

それは ここらで お作りになったのですか。

29A：ゴマゴメシ チューンニヤロ アノ (C ホーバメシ)

ごまご飯 というのだろう あの (C 朴葉飯)

30B：ホーバメシ チュート ヤマノー ナンカ。

朴葉飯 というと 山の 何か。

31C : タユエ タユエ タユエー。

田植え 田植え 田植え。

32B : アーア。 ホーバ。

ああ。 朴葉。

33C : ソレモ シェツメー シェーナ アカン。

それも 説明 しないと だめだ。

34B : ナルホド。 (C ムカシワネー) ホーノハ。

なるほど。 (C 昔はね) 朴の葉。

ホーバデ。 (C ムカシワネー)

朴葉で。 (C 昔はね)

35A : エー。 ホーノハデ ヤキ

ええ。 朴の葉で 焼き

36C : ガクモンジョーデ イエバ アノー (B ウン) ホーバヤ。

学問上で 言えば あの (B うん) 朴葉だ。

ノー。 (B ウン) ホレカラ ワレワレ ューテルノワ

ねえ。 (B うん) それから 我々[が] 言っているのは

ヘーシエンジコ[°]デ ユエア ホーノハ。 {笑} (A ソー ソー)

平泉寺語で 言えば 朴の葉。 {笑} (A そう そう)

ソッデノー ムカシノ タユエネワ ネー

それでね 昔の 田植えには ねえ

アサ ヨジネ オキルンデスワ。 ウチノ オンナドモア。
朝 4時に 起きるのですよ。 うちの 女たちは。

ソシテ コレク[°]レーナ ケナコ ツケタノー (D ハー)
そして これぐらいな 黄粉[を] つけたの (D はあ)

オニキ[°]リ チューカナー ヤキメシ チューンカナー。
おにぎり というのかな 焼飯 というのかな。

(A ヤキメシヤ。 ャッパ) (B キナコノ オニキ[°]リ)
(A 焼飯だ。 やはり) (B 黄粉の おにぎり)

ホヤー オニキ[°]リヤノー。 (D ハー)
そうだ おにぎりだね。 (D はあ)

コーンナ エケーノ コッシェンニヤザー。
こんなにも 大きいの 作るんですよ。

ホイテ アコノ コンナ チェーノナシ[14] クレナンダ
そして あそこの こんな 小さいのしか くれなかつた

チューンデア ナランデ
というのでは いけないから

シェーイッパイ エコシンニヤ。 アッデノー。
精一杯 大きくするのだ。 あれでね。

ホイテ エコーシテ ホイテ ホーノハデ キリーット マイテ。
そして 大きくして そして 朴の葉で きりっと 卷いて。

ホーノハ ニマイデ マカナ[15]。

朴の葉 2枚で 卷かないと。

イチマイデワ ドームナランデ。

1枚では どうにもならないから。

ニマイデ アッチト コッチト マイテ。 ホイテ ソレオ一

2枚で あっちと こっちと 卷いて。 そして それを

ワラー スク[°]リワラノ シンデー コー クワッテネー

藁 すぐり藁の 芯で こう くくってね

25↑26

ホイテ ソレオ一 ノー ヨーケ エレンネ。

そして それを ねえ たくさん 入れないのだ。

ジューバコネ フタツドツ エレテ

重箱に ふたつずつ 入れて

ホイテ キョー タユエヤデ オタノモシェンスノ一 ッテ

そして 「今日 田植えだから お頼み申しますね」 と

ミーンナ オコシネ アルクンニヤ。 ムラジュー。

みんな[を] 起こしに 歩くのだ。 村中。

ムカシワー。 (D アー アー) ウン。

昔は。 (D ああ ああ) うん。

ソーシェナ イッカモ イッカモ ソートメ[16]ハン

そうしないと 何日も 何日も 早乙女さん

福井 26-2

ツカレテー ヨワッテー ネルンニヤサカイネ。
疲れて くたびれて 寝るのだからね。

アサ ナカナカ ソリヤー シュートサンク[°]レ アリヤ
朝 なかなか そりや しゅうとさんぐらい ありや

ナオサラ ソーヤワノー。
なおさら そうだよね。

ホイテ アサ オコス。 マー ヨビカケノー {笑}
そして 朝 起こす まあ 呼びかけね。 {笑}

アノー ゴシンモツトシテノー。 (D ハー)
あのう ご進物としてね。 (D はあ)

ホイテ ソノ ホーノハーノ モチオ ジューバコネ イレテ
そして その 朴の葉の 餅を 重箱に 入れて

サラヤラ ホンナモン オカシナ モンネア モッテカン。
皿やら そんなもの おかしな ものには 持っていかない。

37B : キテ モラウ ウチ ミンナ。 ウン。 モッタルイテ。
来て もらう 家 みんな。 うん。 持って歩いて。

38C : ホヤ。 ミンナ キテモラウ
そうだ。 みんな 来てもらう

ウチ ヒチケン アローガ[°] ハチケン アローガ[°]。
家 7軒 あろうが 8軒 あろうが。

福井 26-3

39A：アサ ト— オコシ— (C オコシネ アルク)
朝 早く 起こし (C 起こしに 歩く)

マー オコシネ アルクンテナモンヤネー。
まあ 起こしに 歩くみたいなものだね。

アリヤ。 (C ホヤ ホヤ)
あれは。 (C そうだ そうだ)

ゴクロサンデス ツテ アルクノ。
「ご苦労さまです」と 歩くの。

40D：オコシネ アルキナハンノワ ナンジコ[°]ロ。
起こしに 歩かれるのは 何時ごろ。

41C：マー アンデ ムカシワ ヨジハング[°]レデナイカ。 Aハン。
まあ あれで 昔は 4時半ぐらいで[は]ないか。 Aさん。

42A：イヤ。 ソレタ モット ハヤイ ハヤイ。
いや。 それより もっと 早い 早い。

(C モット ハヤイカ) アー。
(C もっと 早いか) ああ。

ウチノ モン アルクノアー。
うちの 者 歩くのは。

43D：ホンデ ソノヒネー ゴハン タイテ シナハルンケ。
それで その日に ご飯[を] 炊いて なさるのですか。

44C : ホヤ ホヤ ホヤー。 アサ タイテー。
 そう そう そう。 朝 炊いて。

45B : ホンデー ウチノ ヒト タユエノ ヒトワ ホンナ
 それで 家の 人 田植えの 人は そんな

ネドコ ハイッテル マ ナインデスワ。
寝床[に] 入っている 間[が] ないですよ。

46C : ホーヤ。 ネル マ ネーンニヤ。 ムカシワ。
 そうだ。 寝る 間[が] ないのだ。 昔は。

47B : バゲ オニシメ ニンナレヘンヤロ。 (C ホヤ ホヤ)
 夜 お煮しめ 煮なくてはならないでしょう。 (C そう そう)

タユエノ オニシメ ニルノワ
田植えの お煮しめ 煮るのは

48A : ホデ ター ユエネ イクノカ。 オーカタ ヨジ。
 それで 田を 植えに 行くのが だいたい 4時。

ヨ アケット シラート ヨー アケット デルンニヤデネ。
夜[が] 明けると しらっと 夜が 明けると 出るのだからね。

ジョーリ ワカラニカナー チュ ジブンネ[17]。
草履[も] わからないかな という 頃に。

(C ウン) (D {笑})
(C うん) (D {笑})

福井 26-5

49C : ダイタイ一 ンマー ツコーテ タンボ カク ヒト[18]ワ
だいたい 馬を 使って 田んぼ 挿く 人は

サンジハン。 (D ハ一)

3時半。 (D はあ)

ホイテ ソトメハンカ。 ジューニンナラ ジューニン ソロウマデ
そして 早乙女さんが 10人なら 10人 そろうまで

イッタンブク[°] ライノ ターワ カイトカナ
1反歩ぐらいの 田は 揿いておかないと

ソトメハンネ ボワッテモテ[19]
早乙女さんに 追われてしまって

タカキモ ナクニモ ナケンデノー。
田掻きも 泣くにも 泣けないからね。

ソーシット ソトメハン グロゾローット
そうすると 早乙女さん[が] ぞろぞろと

マー エカイコト ツクンナハル ウチデワ
まあ たくさん 作られる 家では

ジューニンイジョーモ ソトメサン クルワノー。
10人以上も 早乙女さん 来るわね。

50D : ホイテ ソノ一 アノ ホーバノ アノ オニキ[°] リワ
そして その あの 朴葉の あの おにぎりは

イツ タベルンデスカ。

いつ 食べるのですか。

51C : ソレワ アサ モロタノワ

それは 朝 もらったのは

ウチノ ノコッテル カヅクワー ワケテ クーヤロシー。

うちの 残っている 家族は 分けて 食べるだろうし。

ホレカラ タンボエ イキナハルト一 ハ一 コンナ エカ一イ

それから 田んぼへ いらっしゃると はあ こんな たくさん

テビツ[20]デモ オヒツデモ モッテッテ。

手びつでも おひつでも 持っていって。

(B オヒツ。 オヒツ ネ一。 コー イレテ)

(B おひつ。 おひつ ねえ。 こう 入れて)

52A : ター ユエル ヒトカ[。] ヤスム一 イップクネ

田を 植える 人が 休む 一服に

タベルンデスワー。

食べるのですよ。

53C : ソヤ ソヤ。 マエビリ[21]ネ一。 (D フーン)

そうだ そうだ。 「マエビリ」に。 (D ふうん)

コビリ[22] チューノワー ゴコ[。] タベッデ一 コビリー。

「コビリ」 というの 午後 食べるから 「コビリ」。

(D エー)

(D ええ)

ホレカラ ゴジエンチューノワ マエビリ チューンニヤネー。

それから 午前中のは 「マエビリ」 というんだね。

54D : ホイト ソノ一 ノーハンキノ一 (C ウン)

そうすると そのう 農繁期の (C うん)

アノ サツキジブンワ ソノ一 タトエバ

あの 5月頃は その たとえば

ソトメサンワ ナンカイ ゴハン タベルンデスカ。

早乙女さんは 何回 ご飯[を] 食べるのですか。

アノ デシナ[23]ネワ タベンノケ。

あの 出がけには 食べないのですか。

26↑27

55C : イヤ。 マー ダイタイ ゴカイヤノ。 (B ウーン)

いや。 まあ だいたい 5回だね。 (B うん)

ゴカイヤケドー コリヤ マー

5回だけど これは まあ

チョット キタナイ ハナシン ナルケド

ちょっと みっともない 話に なるけれど

ゴカイヤケドネー。 コビリカ° エケーコト アタルモンヤデ

5回だけどね。 「コビリ」が たくさん もらえるものだから

福井 27-2

アサ ホトンド クワンワ。 (D アー)
朝[は] ほとんど 食べないよ。 (D ああ)

ヨワルシノー。 (D オキダチヤシ)
疲れるしね。 (D 起きたばかりだし)

ホイテ アサ ハヤイシノー。
そして 朝 早いしね。

56A : クチャ ワリーデ (C クチャ ワリーシ)
[起きたばかりで]口が 悪いから (C 口が 悪いし)

ヘド[24] クイトゴヘンヤロー。
そんなに 食べたくありませんでしょう。

ホイデ コビリワ オイシゴイスンニヤワ。
それで こびりは おいしいんですわ。

57C : ホシットー ウン ホイト コビリ アタルトー
そうすると うん すると 「コビリ」 もらうと

ホレ エケー ハラ *** クエルデショ。
それ 大きい 腹 *** 食べられるでしょう。

(D ナンジコ^ロ) エ アレ ジュージカ ジュージマエヤ。
(D 何時ごろ) え あれ 10時か 10時前だ。

58A : ソヤ マー ジュージジブンヤネー。 コビリワー。
そうだ まあ 10時頃だね。 「コビリ」は。

59C : ウン クジハンカ ジュージデスワ。

うん 9時半か 10時ですわ。

ホイト ヒルマワー ヤッパ イチオーワ ウチ カエルンニヤ
すると 昼間は やはり 一応は 家[に] 帰るのだ。

ゴハン タベネ クイトノーテモ。
ご飯 食べに 食べたくないとも。

ソレカラー コノ オバーチャンランテネ
それから この おばあちゃんたちみたいに

トショッテカラノ イッタ バーイネワ
年がいってからの[人が] 行った 場合には

ウララー ウチ カエルヨリモ ココデ ネサシテ モラウワ。
私たちは 家[に] 帰るよりも ここで 寝させて もらうよ。

ゴハンモ タベトネーシ ッテ。
ご飯も 食べたくないし と言って。

60A : タンボデ カヤッテ ヤスンデマスンニヤ。

田んぼで ひっくり返って 休んでいるんですよ。

(C ヤスンデンニヤ) (D ハー)

(C 休んでいるのだ) (D はあ)

ホイット マタ ヒルカラ アタリマスヤロ。
すると また 昼から もらえますでしょう。

61C : ホヤ ホヤ。 コビリ モッテクルヤロ。 (D ハー)
そうだ そうだ。 「コビリ」 持ってくるでしょう。 (D はあ)

ホンデノー ハラ フクラカスノワ サンドヤケドー
それでね 腹[を] ふくらませるのは 3度だけど

ホンデー フツーノ ジョーショクノー アサー ヒルー バン一
それで 普通の 常食の 朝 昼 晚

チューヤツワ ** クワンワノー。 (D ハー)
というやつは ** 食べないわね。 (D はあ)

タユエザカリネワ。 コビリカ° オーイデ。 (D ウーン)
田植え盛りには。 「コビリ」が 多いから。 (D うん)

ホイテ マー オカズワ ナンヤ チュート
そして まあ おかげは 何か と言うと

マー ハデナモンワ フユノ タケノコヤノー。
まあ 派手なもの[として]は 冬の 箍だね。

アンナモン ナンカ シオズケシトイタ ヤツヤラ
あんなもの 何か 塩漬けしておいた ものやら

ホレカラ マー ジエンマイヤラノー。
それから まあ ゼンマイやらね。

ホレカラ アブラアケ° ヤラ。 (B アケ°サンネ)
それから 油揚げやら。 (B 油揚げね)

福井 27-5

ホンナモンナシ クワンノヤ。 ホイテ ツケモノト一 (D ン一)
そんなものしか 食べないのだ。 そして 漬け物と。 (D うん)

ンナモン オツケマデ コシェテ モッテク モンワ
そんなもの おつゆまで こしらえて 持っていく 者は

62A : ゴヘン[25]。 ゴヘン。 (C ホンナモン デキンシ)
ありません。 ありません。 (C そんなもの できないし)

ンナモン ***
そんなもの ***

63D : ホンナ エケーモン ヒツモ タベラレンデショ一。
そんな 大きいもの ひとつも 食べられないでしょう。

64C : ターベ タベラレルノ一。 ムカシノ ヒトワ。
××× 食べられるね。 昔の 人は。

65A : タベラレッサー。 オイシー モンデッサー。 ソレワ。
食べられますよ。 おいしい ものですよ。 それは。

66C : キナコノ カオリト ホイカラ ホーバノ カザト
黄粉の においと それから 朴葉の においと
ホーバノ ニオイトデ。 オイシイン ン
朴葉の においとで。 おいしいの うん

67A : ハー。 ヤッパー ホーノハーノ カザトネ一
はあ。 やはり 朴の葉の 香りとね

(B ホーノハノ カオリト) オイシーンデス。

(B 朴の葉の 香りと) おいしいのです。

アノー ヒトネヨッテ ヒトツハング[°]レーワ タベンナル。
あの 人によって ひとつ半ぐらいは お食べになる。

ヒトツ タベテ モスコシ ホシイケド
ひとつ 食べて もう少し 欲しいけれど

ヒトツモ タベラレンデ シテ
ひとつも 食べられないから と

ホンデ アンタト ウラト ハンブンワケ ショーカ。
それで あなたと 私と 半分分け しようか。

ヨカロー チュテ ハンブンズツシテ (D ハー)
よからう と言って 半分ずつ[に]して (D はあ)

(C ホーユー コトデスワノー) (D ホーデスカ)
(C そういう ことですよね) (D そうですか)

68C：ホレカラー カナシーカナヤー。

それから 悲しいことにね。

マ一 ヨソノ ムラワー シランケド ヘーシェンジノ
まあ よその 村は 知らないけれど 平泉寺の

ホンコサン[26]ノ リョーリ チューモンワー
報恩講の 料理 というものは

ダーイタイ スタッテキタノ一。コレ カンソカン ナッテノ一。
だいたい すたれてきたね。これ 簡素化に なってね。

27↑28

ムカシワ モー コノコ^ロ アノ一 ゴマノ アエモンデモ一
昔は もう このごろ あの ゴマの あえものでも

ホントノ エー アジツケ シル モンワ ネーワノ一。
ほんとうの よい 味付け する 者は ないわね。

(D ハー) ウン。

(D はあ) うん。

ホイテー ハナハダシーノワ コンダ ツトメヤラノ一。
そして はなはだしいのは 今度は 勤めやらね。

(D ハー) ホンナモンヤデ

(D はあ) そんなものだから

クイモン シンノ[27] テナンデ
食べ物[を] するのが 困るから

クイモンテ ショクジ ツクルノ テナンデー
食べ物って 食事 作るの いやだから

アー *** ホンコサンネ

ああ *** 報恩講に

ホンコサンネア アンナ ショージンリヨーリデ ネーモン
報恩講には あんな 精進料理で ないもの[を]

クテア ナランノヤネ ノー。
食べては ならないのに ねえ。

イチネンカンノ ムシケラオ *** シタコトヤトカ
1年間の 虫けらを *** したことだとか

アルイワー ナニシタ ホーオンオヤネー
あるいは 何[を]した 報恩をだね

アノー シャトク チューンカ ナンヤ シランケドー
あの 謝徳 というのか 何か わからないけれど

カンシャシル ヒネア ナー
感謝する 日には ねえ

ナマザカナヤラ アンナモン バカナモン クーチューノア
生魚やら あんなもの 馬鹿なもの[を] 食べるというのは

ドダイガ。 ウソナンヤ。
そもそもが 嘘なのだ。

ソーシキネ ホンナ タイヤラ サシミ ソンナ ウソナンヤ。
葬式に そんな 鯛やら 刺身 そんな 嘘なのだ。

ケドモ エマノ ジダイデワ ドーモ ナランノヤワー。
けれども 今の 時代では どうにも ならないのだよ。

ウン。 ワカイ シューア ソレ ヤンニヤ。
うん。 若い 人たちが それ[を] やるのだ。

ソーナッテクット コンダー イヤー
そうなってくると 今度は いやあ

ヤツカ[°]シラネ ヒキオトシ[28]ヤタラ
八つ頭に。 引き落としたとか

ニンジンヤラ ゴンボヤラーッテノー ニテ
人参だとか ごぼうだとかってね 煮て

コンナ ナカ[°]サネ キッタ マルッポー
こんな 長さに 切った 丸いもの[を]

ソレオ ミンナ ヒキオトイテ コンナ トーノイモノ エケーヤツ
それを みんな 引き落として こんな とうの芋の 大きいやつ。

キッタ ャッチャラー ソレニ ア布拉ケ[°]ノ シタ
切った やつやら それに 油揚げの 下

オヘラ[29]ヤラノー。 (A ホヤー。 ウン)
おへらだとかね。 (A そうだ。 うん)

アーユーモンア ミーンナ ダンダンダンダン スタッテ キタンヤ
ああいうものは みんな だんだんだんだん すたれて きたのだ。

(D ハー) ウン。 ハナハダシーノ ナッテクット
(D はあ) うん。 はなはだしいの[に] なってくると

ホンナモン オマエ ジューバコ サケ[°]テ
そんなもの おまえ 重箱 下げて

ホンナモン イッタリ キタリ シエント
そんなもの 行ったり 来たり しないで

オツケト ママサエ アリヤ エーンニヤ チューナ
お汁と ご飯さえ あれば よいのだ というような

チョーシデノー。

調子でね。

ホレカラ モット ハナハダシナッテクット
それから もっと はなはだしくなってくると

ホンコサンテナ モー カワシェネ シテ
報恩講みたいな もう 引き換えに して

シェントコマイコ ッテ。
しないでおこうではないか と言って。

ソレデワ クヨーン ナランワノー。
それでは 供養に ならないわね。

ホンナモン シエンゾア ナイテゴザルヤロ
そんなもの 先祖は 泣いていらっしゃるだろう

ト オモウンニヤ。 ウラ。
と 思うのだ。 私。

69A : ホンコサンノ バンワ ソノ サシミヤ ニツケ チューノワ
報恩講の 晩は その 刺身や 煮つけ というのは

シェンシェー イマノ イマデア ツトメナハッデ
先生[=D] 今の 今では お勤めになるから

ソノ トマル ヒトア スケナインジャワニー。 (D ハイ)
その 泊まる 人は 少ないのですよ。 (D はい)

ホンコサンネ キテモ スク。 ソノバン カエンナハルデ。
報恩講に 来ても すぐ その晩 お帰りになるから。

ホッデ アレ アkulヒーノ ゴツツオ一
それで あれ あくる日の ごちそうを

ホンコサンノ バンネ ダスヨーンナルデ
報恩講の 晩に 出すようになるから

ホッデ ソーユー コト ナレースンニヤ。 (D アー アー)
それで そういう こと[に] なりますか。 (D ああ ああ)

70C : ソレガ。 ャッパ エスカレートシテ ミンナ ウツッティクンニヤー。
それが やはり エスカレートして みんな 移っていくんだ。

(A エー ホーデスー)

(A ええ そうです)

アコノア サカナ ダイタ
あそこのは 魚[を] 出した。

ウラン トコア シェンワケネア イカン テ コーナルンニヤ。
私の ところは しないわけには いかない と こうなるのだ。

福井 28-6

71D : アズキア シナハルンケ。 (A へ) アー イー
小豆は なさるのですか。 (A へ?) ×× ××

アズキノ アン ナカ一 イモ イレタノ。
小豆の あん[の] 中に 芋[を] 入れたもの。

72C : エー。 ツボチューテー。 ツボ ヘラーノー
ええ。 つぼといつて つぼ へらね。

ヒキオトシワ アレー カ ナンヤラカンタラーッテ
引き落としは あれ × 何やらかやらと

ヨー ユーワネー。 (A ソーデスー)
よく 言うよね。 (A そうです)

ホヤケド モー ソーユーナ コトオー シッテル ヒトワー
だけど もう そういうような ことを 知っている 人は

ココラネ イル オバーチャンラ フタリク[°]ライナモンデ
ここいらに いる おばあちゃんたち ふたりぐらいのもので

イマノ ワカイ シューワ ミーンナ シラン。
今の 若い 人々は みんな 知らない。

73A : ミーンナー デースンニヤー。
みんな [お膳に] 出すんですよ。

オアエヤトカネー。 ナマスットカッテ。 (C ホヤ ホヤ)
あえものとかね。 なますとかって。 (C そうだ そうだ)

ミナ デルンデスー。 ウン。
みんな 出るのです。 うん。

74C : ジェンブ ショージンリヨーリデ ダイコンノ ナマストカノー。
全部 精進料理で 大根の なますとかね。

75A : ホッデ ムカシデ ユート
それで 昔で 言うと

ホンコサンノ イカ[°]イネー

報恩講の[料理として昔から伝わっている種類の料理] 以外に

[28↑29]

ソノー ト リョーリヤカラ トッタモン ダス デルンデスワー。
その × 料理屋から とったものを 出す 出るのでよ。

ナンデット[30] トマル オキャクサン ナイデショー。
なぜかと言うと 泊まる お客様[が] ないでしょう。

エマ ツトメルデ。 (D エー)
今 勤めに行っているから。 (D ええ)

ホッデ トマルト アクルヒノ オヒルノ ゴツツオ エレスケドー
それで 泊まると あくる日の お昼の ごちそう 必要ですけれど

ホレ ヤッパ カエル ヒトネ ソレ ダス チューンデ
それ やはり 帰る 人に それ[を] 出す と言うので

アノ ホンコサンノ バン ミナ デースンニヤ。
あの 報恩講の 晩 みんな 出ますのよ。

ウチノラモ ウン。

うちなども うん。

76C : マー カンリヤク ナッタワケヤ。 (D ウーン)

まあ 簡略[に] なったわけだ。 (D うん)

デ ムカシワネー。 ホンコサンワ パン オテ
で 昔はね。 報恩講は 晩 ××

オテラハン[31]ノ オキヨー モロテ
お寺さんの お経を もらって

ホイテ ショージンリョーリ イッサイデ (A ホヤ ホヤ)
そして 精進料理 一切で (A そうだ そうだ)

ホイテ オキヤクシテー ホイテ アケノ ヒーワ ショージアケ
そして お客[を]して そして 明けの 日は 精進明け。

コンダ サカナバーッカデ ホリヤ モー ヤサイモン デナカッタ
今度は 魚ばっかりで そりや もう 野菜物 出なかつた

ウチデ ツクッタモン コンニヤクノ カラニカ
家で 作ったもの こんにゃくの 辛煮か

ソンナモンク[°]ライヤロデノー オイテシモテ
そんなものぐらいだろうからね おいてしまって

ホイテ サカナリョーリデ ャッテ (D ハー)
そして 魚料理で やって (D はあ)

ホイテ イマー トマル ヒトッタラ スクネー。 (D ハ一)
そして 今 泊まる 人といつたら 少ない。 (D はあ)

ホリヤ トイ トコノ ヒトデモ コレ アルデノー。
そりや 遠い ところの 人でも これ[が] あるからね。

(D エ一) サーット カエッテマウンニヤ。
(D ええ) さあっと 帰ってしまうんだ。

ホレ ドームナランモンヤデー ホッデ シカタナーシ
それ どうにもならないものだから。 それで しかたなく

ショージンリョーリ シルノ デキタシ
精進料理[を] するの[が] できたし

77A : ソーデスー。
そうです。

78C : ドームナラン。
どうにもならない。

ウラン トコノア ソレ ジェッタイ サシェン。
私の ところのは それ 絶対 させない。

アイサツノ トキ ウラ ユーテマウンニヤ。 ハ一。
挨拶の 時 私 言ってしまうのだ。 はあ。

キョーア イチネンジューノ ホーオンコーデスカラー
今日は 一年中の 報恩講ですから

イッサイ サカナリヨーリワ イタシマシエン。
一切 魚料理は いたしません。

サヨー ゴショーチ オネガ[。]イシタイ。 (D ハー)
さよう ご承知 お願いしたい。 (D はあ)

ヘテー ボンサン ハジメ イチバンサキネ アイサツシテ
そして 坊さん[を] はじめ いちばん先に 挨拶[を]して

ホイテ シンルイノ モン アイサツシテ
そして 親類の 者[が] 挨拶[を]して

ホレカラー ソレ スンデモテー
それから それ すんでしまって

ホイテー ジェンブー ジューバコネ ツメル モンア ツメルワノー。
そして 全部 重箱に 詰める ものは 詰めるわね。

ホイト コンダ オヤショクッテ ュー トキネー (D ハイ)
すると 今度は お夜食と いう 時に (D はい)

コンダ サシミト ニツケト。
今度は 刺身と 煮つけと。

ソシテ ソバ ダシテ ヤルンニヤ。
そして そば[を] 出して やるのだ。

ホイトー ハラ フクレテッデ
すると 腹[が] ふくれているから

ソバ イッパイナシ クワンワー。 ソバー。
そば[を] 1杯しか 食べないよ。 そばを。

ホイテー サカナモ メッタト テー ツケンノー。 ウン。
そして 魚も めったに 手を つけないね。 うん。

(B ソーヤネー) ホイテ サケ マタ イッパイ ノミナオイテ
(B そうだね) そして 酒[を] また 1杯 飲み直して

(D トー) ホイテ ソレオ一 ツツンデ
(D すると) そして それを 包んで

ホイテ オヤショク スムト一 ジューニジ スムト一
そして お夜食[が] すむと 12時[が] すむと

カエルモンア カエッテマウンニヤ。 クルマデノー。
帰る者は 帰ってしまうのだ。 車でね。

ホレ ニジューネ シェンナンデ
それ 二重に しなくてはならないから

マコトネ サンニョア[32] ワリーンニヤ。
実に [お金の]都合が 悪いのだ。

ホヤケド アケノヒーワ ラクナンニヤワノー。
だけど 翌日は 楽なんだよ。

ホンコサンノ アケノヒーワ ミーンナ エンデー
報恩講の 翌日は みんな いないから

マー コドモヤラ ホンナ モンワ イルケドノー。
まあ 子どもやら そんな 者は いるけれどね。

ムスメラワ イルケド。
[他家に嫁いだ]娘たちは いるけれど。

79A : ムスメヤ コ マコ[°]ワ エース[33]ワイノー。 ホリヤ。
娘や 子 孫は いますよね。 そりや。

80D : ホイトー オキヤクサンワー タショノ ヒトバッカデスカ。
すると お客様は よその 人ばかりですか。

アノ ムラウチ[34]ノモ キナハルン
あの 村内のもの 来なさるの

81C : イヤー。 ムラウチノモ ミンナ エッタ キタ。
いや。 村内のもの みんな 行った 来た。

82B : ムラウチノモ ホンコサンネワ クルンデス。
村内のもの 報恩講には 来るんです。

イッタリ キタリ シルンデスワ。
行ったり 来たり するんですよ。

83C : ホーオンコーダケワ エッタリ キタリ。
報恩講だけは 行ったり 来たり。

29↑30

オマツリ[35]ワ モチロン イッショヤカラ
お祭りは もちろん 一緒だから

マツリワ タショノ オキヤクサン。
祭りは よその お客様。

84D：ホーオンコーワ ナンカ[°]ツカラ ナンカ[°]ツネ カケテー。

報恩講は 何月から 何月にかけて。

85B：マー コノゴロワ ハヤ ハヨナッタデ ジューカ[°]ツノ一
まあ このごろは ** 早くなつたから 10月の

(A ツキジマイ) ツキジマイカラノ一
(A 月末) 月末からね

86C：マー ハヤイ ヒトワ一 ジューカ[°]ツノシマイ ジューアイチカ[°]ツ。
まあ 早い 人は 10月の終わり 11月。

(A ジューアイチカ[°]ツ)
(A 11月)

87B：ジューアイチカ[°]ツネ カケテヤノ一。 オソイ ヒトワ。
11月にかけてだね。 遅い 人は。

88C：ジューニカ[°]ツネ ヤルモンモ サンニンヤ ゴニン アルケドノ一。
12月に やる人も 3人や 5人 あるけれどね。

ホンデア アンマリ ショーカ[°]ツネ ***デ。 (A ホトンド ナイ)
それでは あんまり 正月に ***で。 (A ほとんど ない)

ダイタイ ジューカ[°]ツ ジューアイチカ[°]ツデ
だいたい 10月 11月で

ホンコサン (D アー) シマイマスノー。

報恩講 (D ああ) しまいますね。

ドヤラシット オテラノ ホンコサンノ ホーカ°

どうかすると お寺の 報恩講の ほうが

オソナッテノー。

遅くなつてね。

89D : ホー ホイトー オボーサンワー

ほう すると お坊さんは

ドージョーヤ ドージョーヤクサン[36]テ イナサルンデスカ。

道場や 道場役さんというの いらっしゃるのですか。

90C : イヤー ソレワー オテツキ°ノー ケンカイジサン[37]ナラ

いや それは お手つぎの 顕海寺なら

ケンカイジサン。 (D ハー)

顕海寺。 (D はあ)

コナタラ フタリワー ケンカイジサンヤデネー。

この人たち ふたりは 顕海寺だからね。

91B : テンダイシュー。 テンダイシュー。

天台宗。 天台宗。

92C : テンダイシュー。 ケンカイジサン。

天台宗。 顕海寺。

福井 30-4

ホレカラー ワレワレ ジョードシンシューワ
それから 我々 浄土真宗は

サンネンジナラ サンネンジサン。 ホレカラー フクイノ オテラトカ
西念寺なら 西念寺。 それから 福井の お寺とか

リヨトカー ホンカ[。]クッサン[38]トカネー[。]
///// 本覚寺とかね

アルイワ フジシマハン[39]トカッテ
あるいは 藤島とかというように

トイイトコノ オテラカ[。] オテツキ[。]ト シルト
遠いところの お寺が お手つぎと すると

ホイト ソレノ シタデラデ ナケリヤ
すると その 下寺で なければ

(A ドージョーサン[36]) ***ノ ドージョーサン。
(A 道場さん) ***の 道場さん。

ドージョーガ (B ドージョーノー) (D ハー)
道場が (B 道場の) (D はあ)

ドージョーカ オキヨーサンデワー ホンナモン
道場の お經では そんなもの

オキヨーサンネ カワリ ネーケドー。 (D ハー ホーデスカ)
お經に かわり[は] ないけれど。 (D はあ そうですか)

ソンナモンヤ。 ホリヤノ一。 ホンデ ホンシア キナハルト一
そんなものだ。 そりやね。 それで 本師が いらっしゃると

ケンカイジサンデモ サイネンジサンデモ一 ホリヤ ヤンバイ
顕海寺でも 西念寺でも そりや よいあんばいに

アケ[。]トクレルデ ホリヤ チカ[。]ウケドネ一。
[お経を]あげて下さるから そりや 違うけれどね。

93D : ホンデー オボーサンモ トマッティキナハルン
それで お坊さんも 泊まっていらっしゃるの[ですか]

94C : トマラン トマラン。
泊まらない 泊まらない。

95B : ムラノ ヒトデスデー。
村の 人ですから。

96C : オボーサンモ ムラノ モンバッカヤデ。 ミーナ。
お坊さんも 村の 者ばかりだから。 みんな。

(B ウチノラワ) デ タショノ シンルイダケア トマル
(B 我が家などは) で よその 親類だけは 泊まる。

ハー モー カエッテクレ ッタッテ シカタナイ
はあ もう 帰ってくれ と言つても しかたない

トマラナ ドームナラン。 {笑} (D フーン)
泊まらなくては どうにもならない。 {笑} (D ふうん)

福井 30-6

ホイテ マー ホンコサンネア アマリ ワカイ モンア コンワノー。
そして まあ 報恩講には あまり 若い 者は 来ないよね。

(D ウーン) ホンナモン エモヤラ ダイコン クイネ
(D うん) そんなもの 芋やら 大根[を] 食べに

ナンヤ コーエ[40]。

何が 来るだろうか。

トショリヤ ヨッテ ゴショーバナシ[41] シタリ
年寄りが 集まって 後生話[を] したり

イチネンジューノー ハナシ シタリ
一年中の 話[を] したり

ウラントコノ ヨメア テナワズ[42]ヤタラ
私のところの 嫁は 気性の強いやり手だとか

ウラン トコ バーサン エーガ[°]ナー ツタラテ
私の ところ[の] おばあさん[は] いいがね とかって

ソレー アライザライノー ハナシアウンニヤ。
それを 洗いざらいね 話し合うのだ。

ホリヤ イッケ[43]ドーシ (B ウン)
そりや 親類どうし (B うん)

ワリー コトデア ネーンニヤ。 ソレ ノー。 (D アー アー)
悪い ことでは ないのだ。 それ ねえ。 (D ああ ああ)

ホイテー タマタマ アウンニヤデネー。 (D ハ一)
そして たまに 会うんだからね。 (D はあ)

ウン。 マー アッデー
うん。 まあ あれで

97A : ソレモー デタ ムスメデモー アレバ エーケドー
それも [家から]出た 娘でも あれば よいけれど

ナイトー メッタニ ホンコサンモ トマレヘンワノー。
ないと めったに 報恩講も 泊まりませんわね。

(C トマラン トマラン。 カエル) (D ハ一)
(C 泊まらない 泊まらない。 帰る) (D はあ)

[30↑31]

98C : ワカイ シューワ ホトンドー カエルワネ。 ホレアネー。
若い 人たちは ほとんど 帰りますよ。 それはね。

ホイデ トショリカ° クルトー ホントワ
それで 年寄りが 来ると ほんとうは

トマッテー ホイテ ハナシ シルンニヤ。 (A ソー ソー)
泊まって そして 話[を] するのだ。 (A そう そう)

99D : アノー ホンコサンノ オツユワー
あのう 報恩講の [会食時の]お汁は

ナンカ トクベツノ コト シナハルンケ。
何か 特別の こと[を] なさるのですか。

福井 31-2

100C : エー エー。 ゴジル。

ええ ええ。 吳汁。

101A : ヘーシェンジデア ゴジルデスワ。 (D アー ゴジル)

平泉寺では 吳汁ですわ。 (D ああ 吳汁)

マメオ ヒータノ。 (D マメオ ヒーテ ゴジル)

大豆を 挽いたの。 (D 大豆を 挽いて 吳汁)

102C : シエンシェ シッテナハルワ。

先生 知っておられるよ。

マメノ ヒーター マメノ ヒキジル。

大豆の 挽いた 大豆の 挽き汁。

(D アー ヒキジル チューンニヤノー。 ハイ)

(D ああ 挽き汁 というのですね。 はい)

ヒキジルノー。

挽き汁ね。

103B : アノ オツユワ モー ホントネ オイシー。

あの お汁は もう ほんとうに おいしい。

デ マー ドコ イッテモネー。 (C テンカイッピンヤ)

で まあ どこ[へ] 行ってもね。 (C 天下一品だ)

104A : イノ[44]デワ シマシエンカ。 (D イヤー シマス)

猪野では しませんか。 (D いや します)

ソーデッシャロー。

そうでしょう。

(D ヘー ホイテ トーカ[°]ラシンテナ チョット イレテ)

(D へえ そして 唐辛子みたいなもの[を] ちょっと 入れて)

105C : マー ソヤ。 (A ソヤ ソヤ)

まあ そうだ。 (A そうだ そうだ)

ホイテ ウキクサワー シエリカネー。 (D アー)

そして 汁の実は セリかね。 (D ああ)

ソレカラー シエリノ ナイトキア

それから セリの ない時は

アカズイキノ コマコ一 キッタ ヤツ。 (D ハー)

赤ズイキの 細かく 切った もの。 (D はあ)

アカズイキ。 ネー。 サトイモノ アカイノ。 (D ハイ)

赤ズイキ。 ねえ。 サトイモの 赤いの。 (D はい)

クキ アルデショ。 アレノ ホイタ ヤツ。

茎 あるでしょう。 あれの 干した もの。

コマコ一 キッタ ヤツ。 ホレカラ シエリカノ一。

細かく 切った もの。 それから セリかね。

106B : ナンカ チョット ウカシ イレテネー。 ゴジルネ。 ウン。

何か ちょっと 汁の具[を] 入れてね。 吳汁に。 うん。

福井 31-4

(C ソー ソー) (D トフモ イレナハルンケ)
(C そう そう) (D 豆腐も お入れになるんですか)

107A : エマノー ホンコサンデア シエリ ナイヤロー。

今の 報恩講では セリ[は] ないでしょうね。

アキ ハヤイデ。 シエリ アリマスカ。 (C アル) ハー。
秋 早いから。 セリ[は] ありますか。 (C ある) はあ。

108B : トフモ イレルト オイシーデス。 トフ イレタリー
豆腐も 入れると おいしいですよ。 豆腐[を] 入れたり

アノー ネンジンバ コマコー ワカイトコ トッテ
あの 人参の葉[を] 細かく 若いところ[を] 取って

コーシタリネー[45]。

こうしたりね。

109A : アキ ハヨテモ トンネ イキヤ デテマスカ チーチャイノ。
秋[が] 早くても 取りに 行けば 出ていますか 小さいの。

(C アル アル アル) フーン。
(C ある ある ある) ふうん。

110B : ホリヤー アノ イモズイキタ オイシーデス。 {笑}
そりや あの 芋ズイキよりも おいしいです。 {笑}

イモズイキデア フクレルデ。 {笑}
芋ズイキでは [腹が] ふくれるから。 {笑}

福井 31-5

111C : ホンデ マー ワタシラワ サケ ノメンデヤケド
それで まあ 私らは 酒[を] 飲めないからだけれど

ヒター サケ ノンデルマーネー (D エー)
人が 酒[を] 飲んでいる間に (D ええ)

オイ ゴジル コッシェタンカエー ッテ コー ューワノー。
おい 呉汁 作ったのかね って こう 言うでしょう。

ホイトー シモノ ウチラ イクト
そうすると 下の 家[分家]では 行くと

ゴジル アルンナラ オッサンネ モッテコイ ッテ。
吳汁 あるのなら おじさんに 持って来い と言って。

マダ オテラハン マダヤ。
まだ お坊さん[が] まだ[お汁に手をつけていない]よ

オテラハン ドーデモ ダンネーエ。 ホンナモン。
お坊さん[など] どうでも いいじゃないか。 そんなもの。

(B オテラハン {笑})
(B お坊さん {笑})

オテラハン サケ ノンデルエ。
お坊さん[は] 酒[を] 飲んでいるじゃないか。

X3ハンヤデ。 ドージョーハン。
X3さんだから。 道場役さん。

福井 31-6

ホンナモン オテラハン サケ ノンデルエ。
そんなもの お坊さん[は] 酒[を] 飲んでいるじゃないか。

ハヨ サケ ヤメー チュート キケン ワリーデ
早く 酒[を] やめろ と言うと 機嫌[が] 悪いから

ウラネ オツケ モッテコイ ッテ。
私に お汁[を] 持ってこい と言って。

ホイテ ゴジル スーンニヤカ[。]ノー。
そして 呉汁[を] 吸うのだがね。

ホイト ダイタイ ゴジル スキヤデー
そうすると だいたい 呉汁[が] 好きだから

スクノーテ ヒチハチハイ。 (B ウワーッ)
少なくなく 7、8杯。 (B うわあ)

ミソシルノ ゴジルヤデノー。 ウン。
味噌汁の 呉汁だからね。 うん。

ホレカラ オーイ トキャ ジューイッパイク[。]ライヤノー。
それから 多い 時は 11杯ぐらいだね。

(B ホントケー) アー。 (B イヤー)
(B ほんとうですか) ああ。 (B いやあ)

ホッデモ ハラモ ユルマナ
それでも 腹も 緩まなければ[=下痢もしないし]

ナーツトモ ナイ。 (B ア。 スキヤノー)

何とも ない。 (B あ。 好きだね)

ア。 ホイテ ゴハンワ

ああ。 そして ご飯は

モー コレネ[46] イッパイモ クワン。 (B フーン)

もう これに 1杯も 食べない。 (B ふうん)

ソノカワリ ムタムタムタムタト一 アノ

そのかわり むたむたむたむたと あの

ナンバ ハイッタ コロニヤラノー

唐辛子[の] 入った [芋の] ころ煮やらね

112B : ウン。 ソー ソー。 イモノ コロニナンカ オイシーデネ。
うん。 そう そう。 芋の ころ煮なんか おいしいからね。

113C : スコ[47] ヤラ ナンタラッテ イロンナ モン クワシェッデ
「すこ」やら 何やらと言って いろんな もの 食べさせるから

ハラ フクレテマウンニヤネ。 {笑}

腹[が] ふくれてしまうのだね。 {笑}

31↑32

114B : ヤッパ イモノ コロニナンカ ホン イチバン オイシーネー。
やはり 芋の ころ煮なんか ごく いちばん おいしいね。

ノー。 チョット アイサネ タベルノネ。

ねえ。 ちょっと 間食に 食べるのに。

福井 32-2

115C : マー ホヤケド ジックリ タベテミネ。
まあ そうだけれど じっくり 食べてごらん。

ヒヤクショーデ ツクッタホド ンマイモンワ ネーザノ。
百姓で 作った[もの]ほど うまいものは ないよ。

(B ネー)
(B ない)

ヘタナ ジエン ダイテ コータ サカナンタナ[48]
とおりいっぺんの お金[を] 出して 買った 魚など

ナニカ° ンマイコト アロー。
何が うまいこと[が] あろうか。

116A : タカイバーッカデ ジエン ダス ***
高いばかりで お金[を] 出す ***

117B : ホンコサンワ ホント ジブン トコデ トレタ
報恩講は ほんと 自分の ところで とれた

イチネンジューノ トレタモンデ ゴツツオ シルノカ°
一年中の とれたもので ごちそう[を] するのが

ホントーノ ナン[49]ヤモネー。
ほんとうの 何だものね。

118C : アレカ°ー ホントノー オフクロノアジャモナー。
あれが ほんとうの お袋の味だものな。

福井 32-3

(B アー ホント一。 ウン)

(B ああ ほんとう。 うん)

ホンナ モン一 マチカラ コーテキテ一

そんな もの 町から 買ってきて

ナクソヘクソネ デバボーチョーデ キリマクッタヨーナ モン
むちやくちゃに 出刃包丁で 切りまくったような もの

ンモモ ナーモネー。 (B ウン)

うまくも 何ともない。 (B うん)

ホント ソーヤザー。 エマワネー。 ハー。

ほんとう[に] そうですよ。 今はね。 はあ。

ホヤケドー ムカシワ一 アタラナンダデ一 ホリヤ
そうだが 昔は もらえなかつたから そりや

サカナヤト一 チンミナ コッチャ。 ホリヤ。

魚だと 珍味な ことだ。 そりや。

イワシヤラ ニシンナシ クタ オボエノナイ モンワノ一
イワシやら ニシンしか 食べた 覚えのない 者はね

ホリヤ ゴツツオヤワノ一。

そりや ごちそうだよね。

ホヤケド エマデワ モー クイアイテモテノ一。 (D ウン)

だけど 今では もう 食べ飽きてしまつてね。 (D うん)

トカイカラ キタ モンデ ヤサイモンノ ホーカ。 ヨロコブ。
都会から 来た 者でも 野菜物の ほうが 喜ぶ。

(D ハー) ハー。 サカナ トッテキテヤッタッテ
(D はあ) はあ。 魚[を] 取り寄せてきてやつたとしても

ホンナモンア クワン。
そんなものは 食べない。

コンナモン一 サシミノ キリメノ マルナツタヨーナ モン
こんなもの 刺身の 切り目の 丸くなったような もの

クイトナイ チューテ。
食べたくない と言って。

スカーット テー キレルヨーナノー
すかつと 手が 切れるようなもの

カドノ タッタ サシミデナケナー
角の 立った 刺身でなくては

トカイノ モンア クワンワネー。 (D アー ホーケ)
都会の 者は 食べないからね。 (D ああ そうか)

クチャ コエテルンニヤ。 (D クチャ コエテンニヤネー)
口が 肥えているのだ。 (D 口が 肥えているのだね)

クチャ コエテンニヤ。 (B {笑})
口が 肥えているのだ。 (B {笑})

ホイテ タベテモ ホンナ
そして 食べたとしても そんな

モタモタト シテルヨーナ サシミワ クワンワ。 (D ハーン)
モタモタと しているような 刺身は 食べないよ。 (D ふうん)

シャキーン シャキート ソノクライ アタラシモン
シャキッ シャキッと そのくらい 新しいもの[を]

クテル チューコトヤ。 (D フーン)
食べている ということだ。 (D ふうん)

ホンデイナカ[°]ラ ソーヤネー ヘーシエンジラ キテー
それでいながら そうだね 平泉寺あたりへ 来て

サシミ コッシェタケ[°]ルデ
刺身[を] 作ってあげるから

ナケナシノ ジエン ハタイテデモ コーテキテ
なけなしの お金[を] はたいてでも 買ってきて

ゴツツオヤトモテ コッシェタルケド
ごちそうだと思って 作ってあげるけれど

コドモドモア ホンナモン クワンテ。 {笑} (D フーン)
子どもたちは そんなもの 食べないったら。 {笑} (D ふうん)

ソーカユーテ ワカ[°]ミ サシミバッカ
そうかと言って 自分が [残った] 刺身ばかり

福井 32-6

ミナ *** * クーワケネモ イカンシノー。
みな *** * 食べるわけにも いかないしね。

ホレコソ ハラ コワスワ。 (B {笑})
それこそ 腹[を] こわすよ。 (B {笑})

ホンナヨーナ モンデス。 ドッチャカユートー
そんなような ものです。 どちらかというと

ヤサイモンノ ホーカ° ヨロコブネー。
野菜物の ほうが 喜ぶね。

119D : フユラー ヤサイモン ナイ トキワ
冬など 野菜物[が] ない 時は

ドンナモン シナハルンデスカ。 ゴハンノ オカズネー。
どんなもの[を] なさるのですか。 ご飯の おかずに。

(C チョゾー)
(C 貯蔵)

120A : ヘージェーケ。 (D エー エー)
ふだんかい。 (D ええ ええ)

ヘージェーノ オカズ ヤッパー
ふだんの おかげは やはり

121B : アノー ホゾンシタルデー
あのう 保存してあるから

ナーモ ナイ チューコト ナイデスワー。 (D アー)
何も ない ということ[は] ないですわ。 (D ああ)

アノー ホレ ワラデ コー アンダー アノ コンナ オーキーノ。
あの ほら 薫で こう 編んだ あの こんな 大きいの。

イズミ チューノ (D アー イズミ イズミ)
イズミ というのか (D ああ イズミ イズミ)

ネー。 アレネ イッパイ ホゾンシタルンニヤデ
ねえ。 あれに いっぱい 保存してあるのだから

フユ オカズ ナイ チューコトワ ネーデスワー。 {笑}
冬[に] おかげ[が] ない ということは ないですわ。 {笑}

(D ウーン)
(D ふうん)

32↑33

122C : アレノー ムカシノ コトバデ ュート
あれね 昔の ことばで 言うと

コー ワラデ アンダ ヤツネー (B タテ)
こう 薫で 編んだ やつ[を]ね (B タテ)

アレ タテノー。 アレア タテッチュー ヒトモ アルシ
あれ 「タテ」ね。 あれは 「タテ」という 人も あるし

ホレカラ ヤ ナン チューンヤナー アレー
それから × なんて 言うのかな あれ

(A ダイコツク[°]ラ チュー)

(A 「大根つぐら」 という)

アレ ダイコンツク[°]ラ (A ダイコツク[°]ラ)

あれ 「大根つぐら」 (A 大根つぐら)

(B ツク[°]ラ) チュー モンモ アルシノー。

(B つぐら) という 者も あるしね。

ヤタビヤ チュー モンモ アルンヤナー。

「ヤタビヤ」 という 者も あるんだな。

(B ウン。 アル) (A ムカシ ヤタ イレタデ)

(B うん。 ある) (A 昔 ヤタ[を] 入れたから)

ヤタ[50] イレタデー ソーユー トコエ。 (D ヤタビヤ)

ヤタ[を] 入れたから そういう ところへ。 (D ヤタビヤ?)

(A ウン) ヤタビヤ。 (D アー) ヤタノヘヤヤデ

(A うん) ヤタビヤ。 (D ああ) ヤタの部屋だから

マー ヤタビヤ チューンニヤノー。 (D アー)

まあ ヤタビヤ というんだね。 (D ああ)

ソリヤ マー ホーケ[°]ン ナルケドー。

それは まあ 方言[に] なるけれど。

ソコエー ダイコンヤラ ナンヤカヤ ニンジンヤラ ゴボーヤラ

そこへ 大根やら 何やかや 人参やら ごぼうやら

福井 33-3

(B ニンジンカラ ゴボーカラネー カブラカラッテ)

(B 人参から ごぼうからね 蕎からって)

ミーンナ アレ チョットー

みんな あれ ちょっと

アラカジメ ツチダケ オトイテ アロータ ヤツオ一

あらかじめ 土だけ 落として 洗った ものを

(B アロテ ジエンブー ソコエー ホゾンシトクンデスー。)

(B 洗って 全部 そこへ 保存しておくのです。

ホイテ タベル)

そして 食べる)

サンカ°ツデモ ゴカ°ツデモー ナーベトモネー。

3月でも 5月でも 何ともない。

ショーノエー ヤツワノー。 (D アー)

品質のよい ものはね。 (D ああ)

ホーカユーテ アレ ピシート フタ シテシマウト

そうかと言って あれ[に] ピシッと 蓋[を] してしまうと

クサッテマウンニヤ。

腐ってしまうのだ。

ヤッパ ユキミズノ チョッ チョット ハイラナ アカン。

やはり 雪水の ××× ちょっと 入らなくては だめだ。

福井 33-4

(D アー) ホリヤ オモシェーモンヤー。 ノー。

(D ああ) そりや おもしろいものだ。 ねえ。

ダイコンナンカワ トクニー ソノ サブサカ[。] コノムンニヤデネー。

大根なんかは 特に その 寒さが 好むのだからね。

ダイコンワ サブ ナラナ オーキ ナランネデ

大根は 寒く ならなくては 大きく ならないのだから

ハッキリ ユーテ。 (D ホー) ウン。

はっきり 言って。 (D ほお) うん。

ホンデー エマノー ホンナー

それで 今の そんな

トキナシダイコンヤタラー シロクビダイコンヤタラッテ

時無し大根だとか 白首大根だとかって

イツーデモ アホミタイネ エコナッテル ダイコンモ

いつでも ばかみたいに 大きくなっている 大根も

アルケドー {笑}

あるけれど。 {笑}

セヤケド ホントノ ムカシカラノ アオクビダイコン チュー

だけれど ほんとうの 昔からの 青首大根 という

(D ハイ) ホントノ ダイコンワー

(D はい) ほんとうの 大根は

福井 33-5

(B モット サブナラナ エコナラン)

(B もっと 寒くならなくては 大きくならない)

サブナラナ エコナラン。 (D フーン) ウン。
寒くならなくては 大きくならない。 (D ふうん) うん。

ソーユーフーネ シテ ホゾン シンニヤ。 (D ハー)
そういうふうに して 保存 するのだ。 (D はあ)

ソレカラネー。 ジエンマイ ワサビ (D ハイ)
それからね。 ゼンマイ ワサビ (D はい)

ソレカラー アレ ワサビデネー ジエンマイ ホレカラ
それから あれ ワサビでない ゼンマイ それから

ナン チューンニヤナー (B タニフタキ° [51])
何と 言うのかな (B タニフタキ°)

ミツマタン ナルノ (B ウン タニフタキ° トカ)
三つ又に なるの。 (B うん タニフタキ° とか)

(D ワラビ) ワラビ (B ウン) ノー。
(D ワラビ) ワラビ (B うん) ねえ。

ワラビ タニフタキ° フキ ソレワ シオズケ。 (D ハー)
ワラビ タニフタキ° フキ それは 塩漬け。 (D はあ)

シオズケ ホレ イツ ナンドキア ホッデ ウドナンカヤットネー
塩漬け。 それ いつ 何時 それで ウドなんかだとね

ナンカ アレー テツカ ナンカ一 イレトクンデショ一。
何か あれ 鉄か 何か 入れておくのでしょうか。

マッサオヤノ一。 ホイテ一 ウドモ シオズケ。
真っ青だね。 そして ウドも 塩漬け。

123D : アレー (C ウン) イロカ[。] アシェンノワ
あれ (C うん) 色が あせないのは

アレ ニント シオズケ シルンケ。
あれ 煮ないで 塩漬け[に] するのですか。

ドーユーフーネ。
どういうふうに。

124C : アレワー ドーヤッタナー。
あれは どうだったかな。

125A : サーット (C ユデルンヤナー) エー
さっと (C ゆでるのだろうな) ええ

ニル ユーテ ナカ[。]イコト ユデテワ シマシェンケド
煮る 湯で 長いこと ゆでるなどは しませんけれど

サート クク[。]ラシェルダケ
さっと [湯に]くぐらせるだけ

(C ュー クク[。]ラシェルダケヤー) デスワー。
(C 湯に くぐらせるだけだ) ですわ。

(C ホイテ シオズケ シンニヤ)

(C そして 塩漬け[に] するのだ)

ホレ キョーラモ ココ デテタデショ。 (D ハイ)

それ 今日なども ここ[に] 出ていたでしょう。 (D はい)

ワラビ。 (D ハイ) アッラモ ニル ユネ サーット トイテ

ワラビ。 (D はい) あれなども 煮る 湯に さっと といて

[33↑34]

ホイテ アレ ホソ一 シトクンデスワノ。

そして あれ 細く しておくんですよ。

エーカイ レーザー一 イレテー。

大きい 冷蔵庫[に] 入れて。

ヘーシエンジノ X4ハンノカ°一 エークトモ エケー レーザー一コネ

平泉寺の X4さんのが 大きいとも 大きい 冷蔵庫に

ピシート シメタルンデストー。

びしっと 詰めてあるのですと[いうことだ]。

126C : ソレデネー ソレネワ イロオ サマサン ヤクヒンモ

それでね それには 色を さまさない 薬品も

アリマスケドー ヤクヒン イレタノワ オモシロナイデネー。

ありますが 薬品[を] 入れたのは おもしろくないからね。

イチバン カンタンナノワ一 アノ一 コ一 ウツ クワノ一

いちばん 簡単なのは あの こう 打つ 鍔の

福井 34-2

シェンダ[52] チューナ ヤツ ゴイスヤロー。
センダ というような もの ありますでしょう。

テツクズヤ テツクズオ ニサンマイ ホーリコム
鉄くずだ。 鉄くずを 2、3枚 放り込む。

ホイト イロア マッサオン ナル。 (D フーン) ハー。
そうすると 色が 真っ青に なる。 (D ふうん) はあ。

ソーユー モンオー タベルモンデー¹
そういう ものを 食べるもので

フユワ ドッヂカユート ツクリ トキタ
冬は どっちかと言うと [野菜を]作る 時よりも

ヨケー カワッタ シナモン クエル チュー
よけい[に] 変わった 品物[が] 食べられる という

グアイヤノー。 (D フーン)
ぐあいだね。 (D ふうん)

ソレクライナ ホゾン ホゾンショクヤネー。 (D アー アー)
それくらいの 保存 保存食だね。 (D ああ ああ)

127B : ソレニ ソラ ハクサイ アルデショ一。 (D ハイ)
それに そら 白菜[が] あるでしょう。 (D はい)

ハクサイネー アッラモ マター トーノツク[°]ラエ イレント
白菜ね。 あれなども また //ツク[°]ラヘ 入れないで

福井 34-3

ベツニ チャントネー (C ホヤ ホヤ ホヤ)
別に ちゃんとね (C そうだ そうだ そうだ)

タクサーーン モー (C キャベツヤトカ) ウン
たくさん もう (C キャベツだとか) うん

タクサン アリマスデー。 (D ウーン)
たくさん ありますから。 (D ふうん)

34↑

福井県勝山市1982注記

[1] シツ トキ

「シル トキ」→「シットキ」。「シル」は「する」の意。ここでは「作る」の意。

[2] ハラ シタ

魚を料理する際、内臓を取り除くことを「ハラ シル」と言う。

[3] コッダ

「コンドワ」→「コンダ」→「コッダ」。

[4] オーン

「おう」。返事のことば。

[5] シンニヤ

「スルンヤ」→「シルンヤ」→「シルンニヤ」→「シンニヤ」。

[6] ナニ

重石を掛けることを指している。

[7] コー

手まねで示す。

[8] ネントー

正月の初訪問。

[9] ニシンダイコン

冬の食べ物のひとつ。鯖と大根漬けとと一緒にこうじを入れて漬けて食べる。客にお茶うけに出すこともある。「ニシンズケ」ともいう。

[10] ダンナイ

「差し支えない」「かまわない」の意。「ダイジナイ（大事ない）」が原形。

[11] コンマキ

昆布巻き。当地では中に鯖、油揚げ、人参、ごぼうなどを入れる。

[12] ヨバッテ

「ヨバレテ（招待されて）」→「ヨバッテ」。祭りその他で客人を招くことを「ヨブ」と言う。

- [13] インナン
「イニヤナラン」→「インニヤナラン」→「インナラン」→「インナン」
→「エンナン」
- [14] チェーノナシ
「～ナシ」は「～しか（限定）」の意を示す。
- [15] マカナ
「巻かねば」が原義。「マカニヤ」→「マカナ」
- [16] ソートメ
早苗を水田に植える女性。
- [17] ジョーリ ワカラランカナー チュー ジブンネ
「草履が（玄関のどのあたりにあるのか）見えないなあというほどの（朝早い）暗い時に」の意。
- [18] カク ヒト
田植き（田作り）をする人。
- [19] ボワッテモテ
「（仕事が）追われてしまって」。「ボウ」は「追う」の意。
- [20] テビツ
携帯用の飯櫃か。
- [21] マエビリ
田植えや稻刈りの時の、田んぼで食べる午前10時ごろの間食。
- [22] コビリ
田植えや稻刈りなど野外作業で午後3時ごろ食べる間食。
- [23] デシナ
「～シナ」は「～する際」「～しがけに」の意。
- [24] ヘド
「ヘド」は「ひどく」が原形であるが、後に打消語を伴った時は、「たいして」「それほど」の意を示す。
- [25] ゴヘン
「ございません」が原義。「ゴザイマシェン」→「ゴジェーマヘン」→「ゴジェヘン」→「ゴヘン」のような変化をしたものか。

- [26] ホンコサン
浄土真宗の寺々で行う報恩講。
- [27] シンノ
「スルノ」→「シルノ」→「シンノ」
- [28] ヒキオトシ
報恩講の時、お膳にのせる料理の一種。煮しめを蓋付きのお椀に盛ってある。
- [29] オヘラ
「オヘラ」は「お平」。「平たい皿」の意。お膳にのせる料理の一種。
- [30] ナンデット
「なぜと言うと」が原形。
- [31] オテラハン
僧侶のこと。どこの寺の僧侶が各家の仏事に来るかは家ごとに決まっている。
- [32] サンニョア
「算用」が原義。「会計」「勘定」の意で用いることが多い。
- [33] エース
「イマス」→「エンス」→「エース」
- [34] ムラウチ
同じ地区内の人。多くの場合、親類の人。
- [35] オマツリ
村の鎮守の祭り。
- [36] ドージョーヤクサン, ドージョーサン
各村に住み、農業等をしながら村の仏事を取り行う人。寺は持たないが浄土真宗の僧の資格は持っている。
- [37] ケンカイジサン
顯海寺。寺の名前。寺の名には接尾語の「～サン」や「～ハン」をつけて呼ぶ。
- [38] ホンカ[°]クッサン
本覚寺。寺の名前。吉田郡永平寺町にある、浄土真宗本覚寺派の本山。

- [39] フジシマハン
福井市東藤島にある、浄土真宗大谷派の寺院。
- [40] コーエ
「何が来るものか」「どうして来たりしようか」の意。反語表現。
- [41] ゴショーバナシ
死後の世界をめぐる話。宗教の話。
- [42] テナワズ
気性の強いやり手。
- [43] イッケ
一家。一系。親類のこと。
- [44] イノ
地名。調査者D氏の居住地区。
- [45] コーシタリネー
手振りで示しながらの発話。
- [46] コレネ
手で指示しながらの発話。
- [47] スコ
サトイモの茎をゆがいて作った酢のものの料理。報恩講の宴席に出す。
- [48] サカナンタナ
「～タナ」は「～みたいな」の意。「～テナ」とも言う。
- [49] ホントーノ ナン
「報恩講に提供すべき料理」の意。婉曲な表現をとっている。
- [50] ヤタ
稲の脱穀の時、稻穂のついた藁の断片。風で選別して粒を得る。
- [51] タニフタキ[°]
山菜の一種。
- [52] シェンダ
柄と鍬の刃との間に打ち込み両者を固定する鉄製の小さいくさび。

作成・公開の経緯

「各地方言収集緊急調査」について

昭和52(1977)年度から昭和60(1985)年度にかけて、文化庁によって「各地方言収集緊急調査」が実施された。これは、「全国的に急速に変化し、失われつつある各地の方言を各都道府県において、緊急に調査し、これを記録・保存する」目的で行われた、全国規模での方言談話の収録事業である。国立国語研究所は、文化庁の要請により、この調査の計画段階から、指導・助言などにかかわっていた。

文化庁は、全国の都道府県教育委員会に各地方言の収集を指示した。47都道府県は、実施時期ごとに、第1次（昭和52(1977)～54(1979)年度）から第7次（昭和58(1983)～60(1985)年度）に分けられ、それぞれ3年計画で、収録を行った。

各都道府県教育委員会は、言語学、国語学、方言学の専門家から調査員として、主任調査員2名と調査員若干名を選出し、さらに、専門家や学識経験者を交えて、調査地点、具体的な調査方法、全国共通の場面設定会話項目などについて検討し、その結果をもとに調査を進めた。

その実施の概要は次のようなものである。

(1) 調査目的

全国的に急速に変化し、失われつつある各地の方言を各都道府県において、緊急に調査し、記録・保存する。自然な方言会話を良質な録音で採録し、後世に残す。

(2) 調査方法

(3)の調査内容にしたがって、1地点につき1年度あたり10時間程度の方言会話を良質な録音で採録する。そのうち、自然な方言会話の部分を3時間程度選んで、文字化を行い、共通語訳をつけて、記録として残す。

(3) 調査内容

①老年層の男女各1人による対話、または、男女を含む3人の会話（2時間）

②老年層の男性1人の対話、または、老年層の男性3人の会話（1時間）

- ③老年層の女性2人の対話、または、老年層の女性3人の会話（1時間）
 - ④老年層と若年層との対話、または、両者を含む3人の会話（1時間）
 - ⑤老年層の男性2人の、目上の者と目下の者の対話（2時間）
 - ⑥場面設定の対話（1時間、各場面につき1～3分程度）
 - 場面に応じて、老年層の男性2人の対話、または、老年層の男女各1人による対話
 - ⑦当該地域に伝わる民話（1時間）
 - 民話の語り手が存在する地点で収録を行う。収録不可能な場合は、
 - ⑧老年層の女性2人の、目上の者と目下の者の会話（1時間）
 - または、
 - ⑨目上の老年層の男性と目下の老年層の女性の、2人の対話（1時間）
 - を収録する。
- ①～⑤、⑧、⑨については、話題は自由。一般的には、「調査地の現況・変遷」「気候」「天災などの思い出」「子どもの頃の遊び」「仕事」「土地の生業」「出稼ぎ」「家事」「子どもの養育」「生活の変遷」「生活の中の楽しみ」「自慢話」「衣」「食」「住」「婚礼などの風俗」「信仰」「年中行事」「村の将来」「若者観」など。

⑥は、自然談話では得にくい各種の表現を得ることを目的として、特定場面を設定し、話者に「演技的対話」をさせる。「訪問」「辞去」「道でのあいさつ」「出産」「婚礼」「葬式」などの各種のあいさつ、「依頼」「指示」「助言」「買物」「勧誘」などの各種場面を設定する。具体的には、文化庁と各都道府県教育委員会が協議して、全国共通の数場面を設定する。

(4) 調査地点

調査地点は、各都道府県について5地点程度を選定する。文化庁および地元方言研究者の意見を聞いて、各都道府県教育委員会が決定する。

方言区画上、複数の区域に分かれる場合は、方言の状況が概観できるよう、それぞれの区域から収録地点を選ぶ。特に、離島など、特色の認められる方言は可能な限り収録する。

(5) 話者

その土地で生まれ育ち、よその土地に住んだことのない、あるいは、よそ

の土地に住んだことがあっても、その期間が短い人とする。在外期間は3年以内が望ましい。

年齢は、原則として、老年層の場合は、収録時において60歳以上とし、若年層の場合は、20～30歳代とする。

話者相互の立場はほぼ対等であることを原則とする。

(6) 録音

自然な会話を良質な録音で残すため、使用する録音機の性能、マイクの種類・配置、テープの長さ、収録場所の音環境などに注意する。

録音テープ記録票には、採録地点、採録年月日、話題、時間、話者、採録機種などを記入する。

録音テープは、収録したオリジナルのテープ（正）を1本、正テープより文字化部分を編集したテープ（副）を2本作成する。

(7) 文字化

方言音声の文字化の際の表記は、原則として、カタカナ書きとし、方言の音声的特徴をある程度表し得るよう工夫する。文字化に対応する共通語訳をつける。文字化内容について、場面・文脈・特徴的音声・方言形の語義・用法などについての注記、表記法についての説明などを行う。各地点ごとに、収録地点の方言の特色について解説する。収録地点の位置・交通・地勢・行政区画の変動・戸数・人口・産業など、収録地点の概観について記述する。録音内容記録票には、話者の氏名・性・生年・経歴、録音内容などを記入する。

文字化原稿は、手書きのオリジナル原稿（正）を1部、正の複製（副）を2部作成する。

調査は、各都道府県教育委員会と連携のうえ、全国各地の方言研究者が全面的に協力して行われた。その結果、地域的密度、収録量、方言的内容のいずれの面からも、他に類を見ない高レベルのデータを得たのである。

調査終了後、これらの方言談話の録音テープとその文字化原稿は、各教育委員会から、「各地方言収集緊急調査」報告として、文化庁に提出され、永久保存されることとなった。

なお、調査実施からかなりの時間が経過しているため、当時の関係文書の入手は困難であったが、文化庁、各都道府県教育委員会の協力により、部分的には手に入れることができた。得られたものを、資料として、この章の末尾に掲げたので、ご参照いただきたい。

「各地方言収集緊急調査」地点一覧

北海道	山形県
01a 空知支庁樺戸郡新十津川町	06a 新庄市
01b 十勝支庁中川郡豊頃町	06b 寒河江市
01c 渡島支庁亀田郡榎法華村	06c 東田川郡櫛引町
01d 渡島支庁松前郡松前町	06d 東田川郡朝日村
青森県	06e 西置賜郡飯豊町・東置賜郡川西町
02a 下北郡川内町	福島県
02b 北津軽郡市浦村	07a いわき市
02c 上北郡野辺地町	07b 大沼郡会津高田町
02d 三戸郡五戸町	07c 大沼郡昭和村
02e 弘前市	茨城県
岩手県	08a 高萩市
03a 久慈市	08b 久慈郡里美村
03b 宮古市	08c 水戸市
03c 遠野市	08d 鹿島郡大野村（→鹿嶋市）
03d 大船渡市	08e 古河市
03e 一関市	栃木県
宮城県	09a 大田原市
04a 本吉郡本吉町・歌津町	09b 日光市
04b 栗原郡築館町	09c 宇都宮市
04c 仙台市	09d 芳賀郡益子町
04d 亘理郡亘理町	09e 安蘇郡田沼町
04e 刈田郡七ヶ宿町	群馬県
秋田県	10a 利根郡片品村
05a 鹿角市	10b 吾妻郡六合村
05b 能代市	10c 前橋市
05c 仙北郡西木村	10d 邑楽郡大泉町
05d 河辺郡雄和町	10e 甘楽郡下仁田町
05e 湯沢市	

埼玉県	
11a 加須市	富山県
11b 南埼玉郡宮代町	16a 黒部市
11c 春日部市	16b 富山市
11d 児玉郡上里町	16c 氷見市
11e 秩父郡長瀬町	16d 砺波市
11f 入間郡大井町	16e 東礪波郡上平村
千葉県	石川県
12a 海上郡飯岡町	17a 羽咋郡押水町
12b 印旛郡印西町（→印西市）	福井県
12c 長生郡長生村	18a 坂井郡芦原町（→あわら市）
12d 木更津市	18b 勝山市
12e 館山市	18c 南条郡南条町
東京都	18d 敦賀市
13a 台東区	18e 遠敷郡名田庄村
13b 西多摩郡檜原村	山梨県
13c 大島町	19a 塩山市
13d 三宅村	19b 大月市
13e 八丈町	19c 莊崎市
神奈川県	19d 南巨摩郡早川町 [奈良田]
14a 愛甲郡愛川町	19e 南巨摩郡身延町
14b 横須賀市	長野県
14c 秦野市	20a 下水内郡栄村
14d 小田原市	20b 長野市
新潟県	20c 小諸市
15a 村上市	20d 伊那市
15b 西蒲原郡分水町	20e 木曾郡開田村
15c 十日町市	
15d 糸魚川市	
15e 佐渡郡佐和田町（→佐渡市）	

岐阜県	京都府
21a 高山市	26a 中郡峰山町（→京丹後市）
21b 大野郡白川村	26b 舞鶴市
21c 中津川市	26c 船井郡丹波町
21d 岐阜市	26d 京都市
21e 摂斐郡徳山村（→藤橋村）	26e 相楽郡山城町
静岡県	大阪府
22a 静岡市	27a 高槻市
22b 榛原郡本川根町	27b 大阪市
22c 磐田郡水窪町	27c 八尾市
22d 賀茂郡松崎町	27d 河内長野市
22e 浜名郡新居町	27e 泉佐野市
愛知県	兵庫県
23a 北設楽郡設楽町	28a 豊岡市
23b 西春日井郡師勝町	28b 朝来郡生野町
23c 岡崎市	28c 神戸市
23d 豊橋市	28d 相生市
23e 常滑市	28e 洲本市
三重県	奈良県
24a 安芸郡美里村	29a 大和郡山市
24b 阿山郡阿山町	29b 宇陀郡榛原町
24c 志摩郡阿児町	29c 五條市
24d 北牟婁郡海山町	29d 吉野郡下北山村
24e 南牟婁郡御浜町	29e 吉野郡十津川村
滋賀県	和歌山県
25a 長浜市	30a 那賀郡岩出町・打田町・桃山町
25b 高島郡安曇川町	30b 和歌山市
25c 神崎郡能登川町	30c 御坊市
25d 大津市	30d 田辺市
25e 甲賀郡甲賀町	30e 新宮市

- | | |
|---------------|--------------|
| 鳥取県 | 徳島県 |
| 31a 鳥取市 | 36a 鳴門市 |
| 31b 米子市 | 36b 阿南市 |
| 31c 日野郡日野町 | 36c 美馬郡脇町 |
| 島根県 | 36d 海部郡海南町 |
| 32a 仁多郡仁多町 | 36e 三好郡東祖谷山村 |
| 32b 出雲市 | 香川県 |
| 32c 浜田市 | 37a 小豆郡土庄町 |
| 32d 隠岐郡西郷町 | 37b 木田郡三木町 |
| 32e 隠岐郡西ノ島町 | 37c 丸亀市 |
| 岡山県 | 37d 仲多度郡多度津町 |
| 33a 勝田郡勝央町 | 37e 観音寺市 |
| 33b 新見市 | 愛媛県 |
| 33c 岡山市 | 38a 越智郡大三島町 |
| 33d 小田郡矢掛町 | 38b 西条市 |
| 33e 笠岡市 | 38c 松山市 |
| 広島県 | 38d 大洲市 |
| 34a 三次市 | 38e 宇和島市 |
| 34b 府中市 | 高知県 |
| 34c 広島市 | 39a 室戸市 |
| 34d 因島市 | 39b 高知市 |
| 34e 安芸郡倉橋町 | 39c 高岡郡檮原町 |
| 山口県 | 39d 幡多郡三原村 |
| 35a 萩市 | 福岡県 |
| 35b 大島郡大島町 | 40a 北九州市 |
| 35c 徳山市（→周南市） | 40b 遠賀郡芦屋町 |
| 35d 美祢市 | 40c 築上郡新吉富村 |
| 35e 豊浦郡豊北町 | 40d 飯塚市 |
| | 40e 嘉穂郡稻築町 |
| | 40f 福岡市 |
| | 40g 八女市 |

佐賀県

41a 東松浦郡鎮西町

41b 鳥栖市

41c 佐賀市

41d 武雄市

長崎県

42a 壱岐郡芦辺町（→壱岐市）

42b 平戸市

42c 長崎市

42d 南松浦郡奈良尾町

熊本県

43a 阿蘇郡阿蘇町

43b 熊本市

43c 球磨郡錦町

43d 天草郡天草町

大分県

44a 東国東郡国東町

44b 宇佐市

44c 大分郡挾間町

44d 佐伯市

44e 日田郡前津江村

宮崎県

45a 延岡市

45b 東臼杵郡椎葉村

45c 宮崎市

45d 北諸県郡山田町

45e 日南市

鹿児島県

46a 出水市

46b 摯宿郡頴娃町

46c 熊毛郡上屋久町

46d 大島郡龍郷町

沖縄県

47a 国頭郡今帰仁村

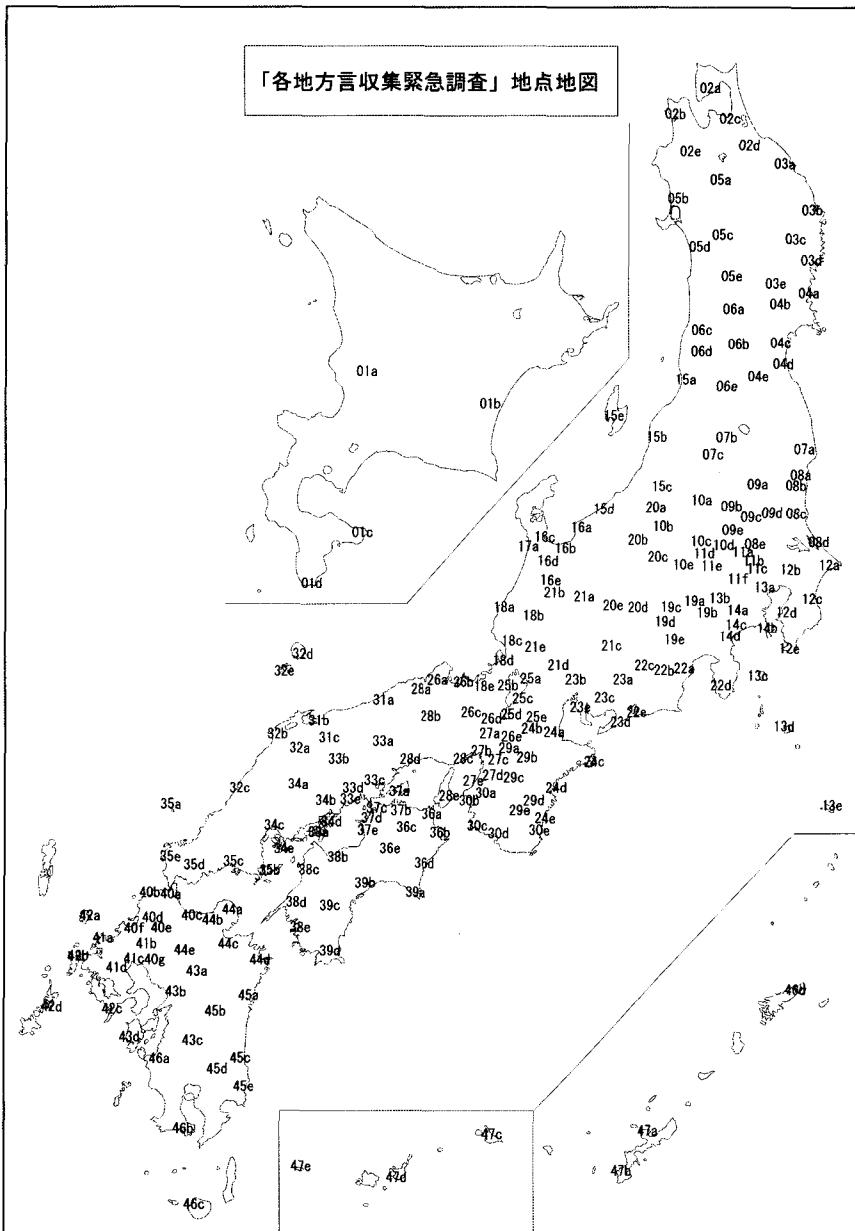
47b 那覇市

47c 平良市

47d 石垣市

47e 八重山郡与那国町

「各地方言収集緊急調査」地点地図



(2004. 06. 30. 作成)

各地方言収集緊急調査補助全体計画

56.7.29.

1. 年次計画

年度 計画	52	53	54	55	56	57	58	59	60	備考
第1次	8	8	8							
第2次		8	8	8						
第3次			6	6	6					
第4次				8	8	8				
第5次					10	10	10			
第6次						3	3	3		
第7次							4	4	4	
実施県数	8	16	22	22	24	21	17	7	4	
(千円) 予算額	6,000	12,210	18,150	18,150	18,000	15,750	12,750	5,250	3,000	

2. 調査県一覧

第1次 (S.52~54)	第2次 (S.53~55)	第3次 (S.54~56)	第4次 (S.55~57)	第5次 (S.56~58)	第6次 (S.57~59)	第7次 (S.58~60)
宮城	北海道	青森	岩手	福島	茨城	群馬
秋田	山梨	栃木	山形	埼玉	福井	神奈川
千葉	長野	東京	新潟	富山	鳥取	京都
石川	山口	岐阜	奈良	愛知		兵庫
大阪	香川	静岡	島根	三重		
広島	佐賀	岡山	福岡	滋賀		
高知	大分		長崎	和歌山		
鹿児島	沖縄		熊本	徳島		
				愛媛		
				宮崎		
8県	8県	6県	8県	10県	3県	4県

各地方言収集緊急調査費国庫補助要項

昭和54年5月1日
文化庁長官裁定
(昭和62年6月1日廃止)

1. 趣旨

全国的に急速に変化し、失われつつある各地の方言を各都道府県において、緊急に調査し、これを記録・保存するために要する経費について国が行う補助に関し、必要な事項を定めるものとする。

2. 補助事業者

補助事業者は、都道府県とする。

3. 補助対象事業

補助対象となる事業は、当該都道府県内における各地の方言を調査（録音採集・文字化）する事業とする。

4. 補助対象経費

補助対象となる経費は、次に掲げる経費とし、その明細は別紙のとおりとする。

主たる事業費

調査経費

5. 補助金の額

補助金の額は、補助対象経費の2分の1以内の定額とし、750千円を最高限度額とする。ただし、沖縄県については、別途協議して定めるものとする。

（別紙）

名称	対象経費の区分	項目	目	目の細分	説明
各地方言収集緊急調査事業費	調査経費	各地方言収集調査	報償費	○○謝金 ○○文字化謝金 ○○協力謝金	調査員、調査補助員等謝金 資料
			旅費	普通旅費 費用弁償 特別旅費	
			需用費	消耗品費 印刷製本費 会議費	野帳等文具、録音用テープ 調査報告用紙 企画委員会打合会
			役務費	通信運搬費	郵便、電信電話料等
			使用料及び賃借料	会場借上料 器具借上料	
			委託料	○○委託費	事業の一部を委託して実施する場合（特に認められた場合に限る）

各地方言収集緊急調査実施要領

昭和52年7月28日
文化庁次長決裁

「各地方言収集緊急調査補助金」の運用に当たっては、文化庁文化財補助金交付規則及び各地方言収集緊急調査補助要項に定めるもののほか、この実施要領によるものとする。

1. 地点の選定

文化庁及び地元方言研究者の意見を聴いて各都道府県（以下「県」という。）教育委員会が選定するものとする。

方言区画的にいくつかの区域に分かれる県においては、県下の方言の状況が概観できるよう、それぞれの区域から収録地点を公平に選ばなければならない。また、離島など、特色の認められる方言は、可能な限り収録するよう努めなければならない。

2. 録音内容・話者

ア 老年層話者による会話

収録内容——次の3種類の対話又は会話を収録する。

- (1) 老年層の男女各1人による対話、又は、男女を含む3人の会話
- (2) 老年層の男性2人の対話、又は、老年層の男性3人の会話
- (3) 老年層の女性2人の対話、又は、老年層の女性3人の会話

話者の年齢など——原則として、収録時において60歳以上とし、やむを得ないときは55歳以上でもよい。発音その他の障害がなければ高齢者でも差し支えないが話者相互の年齢が離れすぎてはいけない。また、話者相互の立場等もほぼ対等であることを原則とする。

話者の居住歴——その土地で生まれ育ち、よその土地に住んだことのない、あるいは、その期間が短い（在外期間は3年以内が望ましい。）人とする。よその土地から嫁入り、婿入りした人は採らない。ただし、女性については、他に適当な人が求められないときは、近隣地域から嫁入りした人でも、収録地点との間に大きな方言のちがいが認められない場合は差し支えない。

司会者——主たる話者のほかに、話の引き出し役としての司会者が必要である。司会者は、あらかじめ地域・話者に見合った適切な話題を用意し、会話の円滑な進行に努める。司会者の性・年齢は問わない。

話題——自由。一般的には、「調査地の現況・変遷」「気候」「天災などの思い出」「子どものころの遊び」「仕事（土地の生業・出かせぎなど。）」「家事」「子どもの養育」「生活の変遷」「生活の中の楽しみ」「自慢話」「衣」「食」「住」「婚礼などの風俗」「信仰」「年中行事」「村の将来」「若者観」などが考えられる。

イ 老年層と若年層との会話

収録内容——老年層の男性と若年層の男性との対話、又は、両者を含む3人の話者の会話を収録する。

話者の年齢など——老年層については前項アに準ずる。若年層については、原則として

20～30歳代とする。話者相互の立場などはほぼ対等であることが望ましい。

話者の居住歴——老若ともアに準ずる。

ウ 目上の者と目下の者の会話

収録内容——目上、目下の関係にある老年層の男性2人による対話を収録する。対話の具体的な人物像として、たとえば、僧侶対その檀家に当たる人物、その土地出身の教員又は元教員（校長又は元校長等）対教え子又はその土地の一般的職業（農業、漁業等）に従事している人物（父兄）等が考えられる。

話者の年齢——目上、目下とも60歳以上を原則とする。

話者の居住歴——原則として前項アに準ずる。ただし、目上に当たる者については、在外期間の比較的長い人物を登場させなくてはならない場合もあるので、アの条件（在外歴3年以内）から若干逸脱してもやむを得ない。

エ 場面設定の会話

目的と方法——自然会話では得にくい各種の表現を得ることを目的として、特定場面を設定し、話者に「演技的対話」をさせる。

場面の内容——各種のあいさつ（訪問・辞去・道でのあいさつ・出産・婚礼・葬式）や依頼・指示・助言・買物・勧誘等の各種場面を設定する。具体的には、文化庁と各県教育委員会が協議して全国共通の数場面を設定し、各場面の録音量は、1～3分程度とする。

話者——場面に応じて老年層の男性どうしの対話、老年層の男性対同女性の対話等を行う。

オ 民話

民話の語り手が存在する地点で収録を行う。

3. 録音機・録音技術

必ず、ステレオで録音することとし、テープは、オープン、カセットのいずれでもよい。この調査は、自然な方言会話を良い録音で収録し、それを後世に残すことが主要な目的であるからその点について十分配慮しなければならない。

録音機の操作は、録音技術に習熟した者が行い、会話の進行中は収録に専念しなければならない。なお、良質の録音を得るために基本的な留意点は次のとおりである。

① 雑音の少ない静かな部屋で録音する。足音、とびらの開閉音、机などへの衝撃音（湯飲みを置く音など）、紙をめくる音などは意外に大きな雑音として録音されるので注意すること。

② 内蔵マイクを使用すると良質の録音が得られないで、必ず外部マイクを接続すること。外部マイクは録音機本体から30cm以上離して配置すること。

③ マイクはなるべく話者の近くに配置し、どの話者の音声も十分な音量で録音できるよう配慮する。話者によって声の大きさにかなりの差があるので、この点に注意してマイクを配置すべきである。

録音の際には、音量メーターの針が十分に振れるよう注意すること。

④ テープを入れ替える際の無録音状態を避けるため録音機は2台使用すること。

⑤ カセットテープは短いもの（往復90分もの又は60分もの）を使用すること。

4. 文字化原稿の作成・表記

文字化用紙は文化庁が定めた様式のものを使用すること。

表記は原則としてカタカナ書きとし、方言の音声的特徴をある程度表しうるよう工夫する。ただし、文字化担当者が国際音声符号又は音素符号を用いた方が便利であると判断した場合はその表記でもよい。文字化の際には、共通語訳を付けるとともに場面、文脈、特徴的音声、方言形の語義・用法などについての注釈をも付ける。

5. 収録地点の概観、話者の経歴・録音内容の記録

収録地点の位置・交通、地勢・行政区画（旧藩領を含む）の変動・戸数・人口・主な産業などを記録する。

また、話者の経歴、録音内容などについては、「録音内容記録票」に録音のつど記入する。

各地方言収集緊急調査の実施について

54. 5. 10.

1. 調査（方言収録）の年次計画 (() は実施要領・文字化の時間数)

○ 第1年次

- ① 老年層の男女各1人による対話、又は、男女を含む3人の会話（アの(1)・2時間）
- ② 老年層の男性2人の対話、又は、老年層の男性3人の会話（アの(2)・1時間）

○ 第2年次

- ① 目上の者と目下の者の会話（ウ・2時間）
- ② 老年層の女性2人の対話、又は、老年層の女性3人の会話（アの(3)・1時間）

○ 第3年次

- ① 老年層と若年層との会話（イ・1時間）
- ② 場面設定の会話（エ・1時間）
- ③ 民話（オ・1時間）

(注) 3年次の「③ 民話」の収録不能のときは、2年次の「目上の者と目下の者の会話」の女性2人の会話を収録

2. 調査報告書の提出部数

(1) 録音テープ

- ・正……収録した生のテープ 1部
- ・副……文字化部分のテープ（正テープより文字化部分を複製したもの。） 2部

(2) 文字化原稿

- ・正……手書き原稿 1部
- ・副……正のコピー 2部

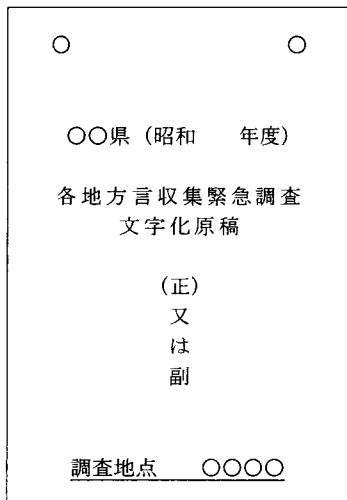
3. 調査報告書の様式等

(1) 録音テープの記録票

○ ○ 県		NO. 正 —○ (副)	補助要項 の記号	テープの ケース箱に 張り付ける ようにして ください。
各地方言収集緊急調査録音記録票				
1	採録地点			
2	採録年月日			
3	話題・時間 A面	() 分		
	B面	() 分		
4	話者			
5	採録機種			

(2) 文字化原稿の表紙

文化化原稿は、各調査地点ごとに、(1) 録音内容記録票、(2) 収録地点とその方言の特色等解説（初年次のみ）、(3) 録音文化化原稿の順で表紙（B4板目紙）を付けて綴ってください。



(3) 文字化原稿の用紙

- ① 録音内容記録票
 - ② 方言資料割付用紙
 - ③ 方言調査解説用紙
- } (別紙のとおり)

調査実施上の留意事項について

1 調査（方言収録）の年次計画

年次	調査の内容（記号は実施要領による）	採録時間	解説・文字化時間
1年次	① 老年層の男女各1人による対話、又は、男女を含む3人の会話（ア一（1））	10	2
	② 老年層の男性2人の対話、又は、老年層の男性3人の会話（ア一（2））		1
2年次	① 目上の者と目下の者の会話（男性2人）（ウ）	10	2
	② 老年層の女性2人の対話、又は、老年層の女性3人の会話（ア一（3））		1
3年次	① 老年層と若年層との会話（イ）	10	1
	② 場面設定の会話（エ）		1
計	③ 民話（オ） (民話が収録できないときは、(注) 参照。))	30	1
			9

(注)

民話の適當な語り手が存在しない場合などのため、収録が不可能な地点は、老年層の男性（目上）と老年層の女性（目下）の2人の対話を収録する。その際の話題は自由であるが、長上者に対する女性の丁寧な表現が収録できるよう配慮していただきたい。

2 調査報告書の提出部数

(1) 録音テープ

正……収録した生のテープ 1部

副……文字化部分のテープ（正テープより文字化部分を複製したもの。）2部

(2) 文字化原稿

正……手書き原稿 1部

副……正のコピー 2部

3 調査報告書の様式等

(1) 録音テープの記録票

○ ○ 県	NO. 正 -○ (副)	補助要項 の記号
各地方言収集緊急調査録音記録票		
1 採録地点		
2 採録年月日		
3 話題・時間 A面	() 分	
B面	() 分	
4 話者		
5 採録機種		

テープの
ケース箱に
張り付ける
ようにして
ください。

(2) 文字化原稿の表紙

文字化原稿は、各調査地点ごとに、(1) 録音内容記録票、(2) 収録地点とその方言の特色等解説（初年次のみ）、(3) 録音文字化原稿の順で表紙（B4板目紙）を付けて綴ってください。

○ ○
○○県（昭和 年度）
各地方言収集緊急調査 文字化原稿
(正) 又 は 副
調査地点 <u>○○○○</u>

(3) 文字化原稿の用紙

- ① 録音内容記録票
② 方言資料割付用紙
③ 方言調査解説用紙

} 別紙のとおり

(用紙の印刷発注については、国語課でまとめて行いますので必要部数を御連絡ください。)

4 文字化原稿の記入について（国語研・言語変化研究部でまとめたもの）

- (1) 原稿用紙には、「方言資料割付用紙」と「方言資料解説用紙」の2種類があり、「割付用紙」には録音内容の文字化と標準語訳を、「解説用紙」には収録地点の概観、収録方言の特色、表記法についての説明、文字化内容についての注記などを記入する。
- (2) 原稿用紙への記入は黒インキを用いる。(青インキは不可。)

割付用紙への記入

① 割付用紙の第1ページには、タイトル(録音内容を代表するようなもの)、話し手の略号・氏名・性・生年を記入し、一段あけて、録音内容の文字化・標準語訳を記入する。(記入例参照)

② 割付用紙の左端の[]には話し手の略号を記入する。

③ カウンタつきの録音機を使用した場合は、その番号を要所要所に鉛筆で薄く記入しておいていただきたい。

④ 文字化の表記について

ア 文字化は文節単位の分かち書きとし、各センテンスの末尾に句点「。」「、」を打つ。読点は文字化部分には原則として付けない。なお、談話文における文の認定は方法論的に多くの問題があるが、あくまで便宜的なものとしておく。

イ 改行は話し手が交替した部分で行う。

ウ 文字化は原則として表音的カタカナ表記による。これは、利用者の便宜、文字化作業の能率などを考慮したことである。ただし、対象とする方言の性格によって、カナ表記では特殊な字母を多数必要とし、かえって煩雑になると判断される場合は、国際音声字母による表記を用いてもよい。徹底した音韻(音素)表記は採らない。これは、音韻レベルの表記では捨象されることのある特徴的な方言音声や、自然会話にしばしば現われる無造作な発音、また、標準語的な発音の混入などを、解釈を加えずに、音声学的に記述しようとする意図による。なお、カナはあくまでも簡略音声表記として使用するわけであるから、それぞれのカナで表わす具体的音声の範囲については、解説(表記法の項)で説明しておいていただきたい。

エ 長音、鼻音、あるいは特徴的な方言音声をカタカナによって表わす場合、原則として次的方式によってほしい。

(ア) 長音には「一」の印を用いる。

例 オハヨー

(イ) ガ行鼻音は、カ° キ° ク° …のように表わす。

例 カカ°ミ [kaŋami] (鏡)

(ウ) 鼻音化には「ン」(上つき小字のン)を用いる。

例 マンド [ma' do] (窓)

カシゴ [ka^ go] (籠) —高知方言など—

(エ) 合拗音の [kwa] [gwa] はクワ, グワのように表わす。

例 クッジ [kwaži] (火事) —九州方言など—

(オ) [ʃe] [dʒe] はシェ, ジェのように表わす。

例 シエナカ [ʃenaka] (背中) —九州方言など—

(カ) [ti] [di] はティ, ディ, [tu] [du] はトゥ, ドゥのように表わす。

例 トウキ [tuki] (月) —高知方言など—

(キ) [ɸa] [ɸi] [ɸe] …はファ, フィ, フェのように表わす。

例 フェンビ [ɸe̚ bi] (蛇) —奥羽方言など—

(ク) [je] の音はイエで表わす。

例 イエダ [jeda] (枝) —九州方言など—

(ケ) [æ] [kæ] [sæ] …はアエ, カエ, サエのように表す。

例 アカエー [akæ:] (赤い) —岡山方言など—

(コ) [ɛ] [kɛ] [sɛ] …はエア, ケア, セアのように表わす。

例 アゲア [age] (赤い) —奥羽方言など—

上に示した以外の特殊な音声の表記は報告者が適宜くふうするか, あるいは, 一般的な字母を使用しておき, そのつど注記欄で説明する。

例 キモノ ^{(イ)→非} [kçimono]

オ アクセント, 文末イントネーションの記述の有無は, その表記法を含め, 担当者にまかせる。

カ 発音や録音が不明瞭なため聴き取りが困難な箇所には_____線を付けておく。

例 カステクレア—

キ 幾様にも聞こえる場合には仮にそのうちのひとつを_____線付きで記述し, 他の「聞こえ」を記述欄に記す。

例 カステクレア ^{(イ)→非} 「カステケロエ」または
「カステケロヤ」とも聞こえる。

ク 聴き取りが困難な箇所はなるべく話者や現地協力者にあたって確かめる。ただし, 最終的には文字化担当者がそのように聞こえると判定した結果を記述する。話者などが主張する(意識する)発言内容と録音された音声の「聞こえ」とが一致しない, すなわち, 話者が主張するようにはどうしても聴き取れない場合もありうるが, このような場合には, 文字化担当者に「聞こえる音声」を_____線付きで記述し, 話者などが主張する内容は注記欄に記す。

例 ボカ一 ^{(イ)→非} 話者は「ボクワ」と言っていると主張。

ケ 最終的に聞き取り不能の箇所には, _____線のみを記しておく。

⑤ 言いよどみ, 言いかさなり, 言いなおし, 笑い声など。

ア 言いよどみは, その末尾に…線を付ける。

例 オフロ サキカ。 タベルノ サキ…。

イ 発言の途中で他の者が口をはさんだ場合には, 次のように()を利用し, 発言

が重複する部分に____線を付ける。

例 A ヒルママデ マズ スコ^トモ オエッカラッテ

(B ンダケンド オレ^ア) アト スク^イ モッテクッカラ

ウ 重複部分が長い場合や、一人の発言が終わらないうちに他の者が話はじめたような場合には、改行して、重複部分に____線を付ける。

例 A アー バサマ オチャ ダシエ マズ。 チョイット
ナカ^ス キター。

B イヤ イソカ^ス スインダテ キヨーノー。

エ 言いかけて、それを言いなおした場合には、言いかけた部分に×××××を付ける。

例 アノ一 ワズカナ ゴ ゴジュー

×× ×××××

ゴジューEngラエージヤッタカナー。

オ 笑い声などは文字化本文中に()に入れて記す。

例 ウレシーナー (笑)

⑥ 標準語訳は漢字平がなまじりの表記とし、それぞれの文節に対応する逐語訳を心がける。逐語訳であるために全体の文脈がつかみがたいと判断される場合には、注記欄でさらに説明する。文末詞や待遇表現などは訳のつけかたがむずかしいが、標準語訳はあくまでも内容理解の手がかりと考え、訳しかたが問題となるような箇所については、なるべく詳しい注記を付けるよう心がける。

⑦ 注記について

ア 「割付用紙」には注記番号のみを()に入れて記し、注記内容は「解説用紙」に記入する。

イ 注記は、音声的特徴、基本的な語形（無造作な発音により語形が崩れている場合など）、方言形の意味・用法・語源、民俗的事象（話題にのぼった民具・行事など）、文脈のねじれ、標準語訳についての補足、話し手の動作（うなずき・手ぶりなど）などについて行う。とくに、方言形の意味・用法については、できるだけ多くの箇所に注を付けてほしい。

解説用紙への記入

解説用紙には次の事項を記入する。

A 収録地点とその方言について

1 地点名

2 収録地点の概観（位置・交通・地勢・行政区画の変動・戸数・人口・主な産業など）

3 収録した方言の特色

- ① 方言区画上の位置・隣接諸方言との関係
- ② 音韻上の特色（モーラ表・音声的特徴）
- ③ 文法上の特色（要点のみ。箇条書き）

4 その他（地点選定の理由、協力者の氏名、協力内容など）

B 表記について

それぞれの符号（カナ・音声符号）で表わす具体音声の範囲、特殊な表記についての

説明、判断に迷った微妙な音声の処理原則など。

C 収録内容の概説、注記など

- 1 タイトル（「割付用紙」の冒頭に記したもの）
- 2 録音年月日
- 3 録音場所
- 4 話し手の氏名・性・生年・職歴・役職歴・居住歴・言語的特徴（方言保有度・話し好きかどうか・早口か等）など。（話し手の性・生年は割付用紙にも記入）
- 5 録音環境（同席者・話の進行状況・場の雰囲気など）
なお、A、B、Cはそれぞれページを改めて記入する。Cはタイトルが変わる際に改ページを行う。

「全国方言談話データベース」について

「各地方言収集緊急調査」報告資料は、方言の使用実態を解明する貴重なデータであるとともに、急速に失われつつある各地の伝統的方言を、文化財として記録・保存するという意味においても意義のあるものである。

いくつかの教育委員会が、この資料の一部を用いて、独自に報告書を刊行している。ただし、市販されているわけではないので、一般には入手しにくい。また、その形態は印刷物であり、電子化された文字化テキストを備えたものはない。録音テープを添付しているものも少数である。その他の資料については、未公開であった。

その後、「各地方言収集緊急調査」報告資料は、文化庁から国立国語研究所に移管された。国立国語研究所では、受け継いだ録音テープ・文字化原稿を有効に利用するために、膨大な報告資料を整備して、方言談話の大規模なデータベースを作成し、公開するという計画を開始した。

平成8(1996)～12(2000)年度には、一般研究課題「方言録音文字化資料に関する研究」において、報告資料の一部を用いたケーススタディ的研究を行った。担当研究室は、情報資料研究部第二研究室（当時）、担当者は、井上文子であった。所外研究委員として、真田信治氏（大阪大学大学院文学研究科、元国立国語研究所）に委嘱を行った。

平成13(2001)年度からは、「日本語情報資源の形成と共有のための基盤研究」というプロジェクトの一環として、全国方言談話データベースの作成と公開に取り組んでいる。担当部門・領域は、情報資料部門第二領域、担当者は、井上文子（情報資料部門第一領域）である。所外研究委員として、佐藤亮一氏（東京女子大学現代文化学部、元国立国語研究所）、江川清氏（広島国際大学人間環境学部、元国立国語研究所）、田原広史氏（大阪樟蔭女子大学学芸学部）、真田信治氏（大阪大学大学院文学研究科、元国立国語研究所）に委嘱を行っている。

その一方で、平成9(1997)～13(2001)年度には、作成データベース名「全国方言談話資料データベース」、作成委員会名「全国方言談話資料データベース作成委員会」として、また、平成14(2002)年度からは、作成データベース名「全国方言談話データベース」、作成委員会名「全国方言談話データベース作成委員

会」として、科学研究費補助金研究成果公開促進費（データベース）の交付を受け、音声資料、文字化資料を電子化する作業を進めている。作成委員長は、佐藤亮一氏（東京女子大学現代文化学部、元国立国語研究所）であり、「各地方言収集緊急調査」当時、国立国語研究所言語変化研究部第一研究室室長として、調査の計画段階から指導・助言にあたり、調査および報告資料の全体像を把握している。作成委員としては、江川清氏（広島国際大学人間環境学部、元国立国語研究所）、田原広史氏（大阪樟蔭女子大学学芸学部）、井上文子（国立国語研究所情報資料部門第一領域）が担当している。平成13(2001)年度には、「全国方言談話データベース」の公開を開始した。

なお、このデータベースの作成事業で受けた、科学研究費研究成果公開促進費（データベース）は下記のとおりである。

年度	課題番号	補助金交付額
平成9年度	57	1,800,000円
平成10年度	64	1,800,000円
平成11年度	501027	1,800,000円
平成12年度	128032	2,800,000円
平成13年度	138031	4,600,000円
平成14年度	148034	5,200,000円
平成15年度	158043	6,100,000円
平成16年度	168037	7,000,000円

「各地方言収集緊急調査」報告資料については、日本全国の47都道府県でそれぞれ5地点程度、計200地点あまりにおける、約4000時間にも及ぶ方言談話の録音テープと、その一部を文字化した原稿が残されている。昭和52(1977)～60(1985)年度当時の老年層話者の自然談話が中心であるので、現在においては急速に失われつつある伝統的方言が比較的よく残されているものであると考えられる。

これらの報告資料をすべてデータベース化するのが理想ではあるが、膨大な資料を一気にデータベース化するのは困難であるので、段階的に公開を行うことにする。

今回刊行する『全国方言談話データベース』では、まず、第一段階として、各都道府県につき 1 地点、計47地点の老年層男女の自然会話を選び、その地の伝統的方言がもっともよく現れていると思われる部分を30~50分程度データベース化した。

データベース化のためには、次のような作業が必要であった。

- ①録音テープには、正が 1 本、副が 2 本ある。正は収録したオリジナルのテープ、副は正より文字化部分のみを編集したもので、いずれも60分または90分のカセットテープである。正をデジタル化し、複製を作成する。
- ②文字化原稿には、正が 1 部、副が 2 部ある。正は、文化庁指定の B4 判の用紙を使用した手書き、副は正のコピーである。正の文字化、共通語訳をパソコンにテキストデータとして入力する。この時点では、できる限り正の文字化原稿に忠実に行う。
- ③文字化原稿の収録地点、話者、収録内容、状況記録などの確認をし、その文字化原稿に対応する録音テープの録音状態などの確認を行う。
- ④今回刊行するものでは、老年層男女の自然談話のうち、各都道府県につき 1 地点30~50分をめやすとして、データベース化部分に選定する。
- ⑤データベース化する部分の、文字化テキストと、それに対応するデジタル化した録音音声を抽出する。
- ⑥音声データをもとに、文字データの明らかな誤りなどを修正する。原則としては、原資料の文字化原稿に従って行うが、見やすさを優先させたり、全体の統一を図ったりするため、必要に応じて変更を加える。この作業は、その地域の方言を専門とする研究者に依頼する。
- ⑦記号の種類と使い方、句読点、分かち書きなどについて、凡例を作成する。『全国方言談話データベース』における表記・形式は、見やすさや全体の統一のため、必要に応じて変更を加えているので、「各地方言収集緊急調査」当時のマニュアルに記載されているものとは部分的に違いが生じている。
- ⑧文字化データに沿う形で、注記を整える。原則としては原資料に従って行うが、場合に応じて最低限の変更を加える。

- ⑨収録地点の概観、方言の特色などの解説については、原則としては原資料に従って行うが、全体の統一を図るため、表記・章立てなどについて、最低限の変更を加える。
- ⑩調査の概要、収録した談話内容・地点・場所・日時などの情報、話者の性別・年齢・職業などの情報をまとめる。
- ⑪校正を行った文字データをもとに、文字化と共通語訳を2段組に対照させたファイルを作成する。さらに、それをpdfファイルにする。
- ⑫文字化と共通語訳を2段組に対照させたファイルを用いて、文字化のtextファイル、共通語訳のtextファイルを作成する。
- ⑬音声データは、サンプリング周波数22.050 kHz、量子化ビット数16 bitでデジタル化して、音声ファイル(wave形式)を作成する。そして、それを文字化と共通語訳を2段組に対照させたページに従って、ページ単位に切り、文字化・共通語訳のpdfファイルにリンクさせる。
- ⑭CD-ROMは、データベースソフトを利用して、文字化・共通語訳の文字列による検索、話者による検索などができるようとする。
- ⑮CDには、トラックに区切った談話全体の音声を収録する。
- ⑯録音テープ・文字化原稿が所在不明の地点については、必要に応じて、現地に赴き、収録担当者・教育委員会・図書館・関係者の協力を仰ぎながら、入手に努める。
- ⑰「各地方言収集緊急調査」の話者・収録担当者・文字化担当者・解説担当者などには、可能な限り、文書でデータ公開の通知と確認を行う。
- ⑱作成過程において、ある程度のデータが蓄積された段階で、CD-ROM、または、音声はカセットテープ・MD、文字はFDを媒体とした試作版を作成し、モニターに依頼して意見・要望を求め、データベースに反映させる。
- ⑲検索情報の整備、検索マニュアル、利用規程などの作成を行う。

『全国方言談話データベース』全20巻の各巻は、冊子、CD-ROM、CDから成り、方言談話の音声(waveファイル)、文字化(カタカナ表記、textファイル)、共通語訳(漢字かなまじり表記、textファイル)、文字化・共通語訳を2段組に対照させたもの(冊子、pdf)などを収録している。従来にはあまりなかった、

音声、文字化、共通語訳の電子化データを備えているので、研究や教育のために加工して、自由に検索することができるという特徴がある。

刊行にあたっては、国立国語研究所における『全国方言談話データベース』刊行物検討委員会で最終的なチェックを行った。委員長として、熊谷康雄（情報資料部門）、委員として、熊谷智子（研究開発部門第二領域）、三井はるみ（研究開発部門第二領域）、井上優（日本語教育部門第一領域）、井上文子（情報資料部門第一領域）が担当した。

刊行計画は下記のとおりとなっている。

書名：『国立国語研究所資料集 13-1～20 全国方言談話データベース 日本の
ふるさとことば集成』 全20巻

各巻：冊子1冊 A5判 約200ページ， CD-ROM1枚， CD1枚

巻数	巻名	ISBN	刊行順
第1巻	北海道・青森	4-336-04361-2	15
第2巻	岩手・秋田	4-336-04362-0	16
第3巻	宮城・山形・福島	4-336-04363-9	17
第4巻	茨城・栃木	4-336-04364-7	4
第5巻	埼玉・千葉	4-336-04365-5	5
第6巻	東京・神奈川	4-336-04366-3	6
第7巻	群馬・新潟	4-336-04367-1	7
第8巻	長野・山梨・静岡	4-336-04368-X	12
第9巻	岐阜・愛知・三重	4-336-04369-8	13
第10巻	富山・石川・福井	4-336-04370-1	14
第11巻	京都・滋賀	4-336-04371-X	1
第12巻	奈良・和歌山	4-336-04372-8	2
第13巻	大阪・兵庫	4-336-04373-6	3
第14巻	鳥取・島根・岡山	4-336-04374-4	11
第15巻	広島・山口	4-336-04375-2	10
第16巻	香川・徳島	4-336-04376-0	8
第17巻	愛媛・高知	4-336-04377-9	9
第18巻	福岡・佐賀・大分	4-336-04378-7	18
第19巻	長崎・熊本・宮崎	4-336-04379-5	19
第20巻	鹿児島・沖縄	4-336-04380-9	20

国立国語研究所資料集13-10

全国方言談話データベース
日本のふるさとことば集成
第10巻 富山・石川・福井

2004年12月30日 発行

編集：国立国語研究所
〒115-8620
東京都北区西が丘3-9-14
TEL：03-3900-3111（代表）
FAX：03-3906-3530（代表）
URL：<http://www.kokken.go.jp>

本書の市販品発行所

発行：国書刊行会
〒174-0056
東京都板橋区志村1-13-15
TEL：03-5970-7421（代表）
FAX：03-5970-7427（営業）
URL：<http://www.kokusho.co.jp>

（平16-10）